

## 第 16 章 学内調査票調査「文大生の学生生活と意識に関する調査」

### 16.1 調査の目的

「文大生の学生生活と意識に関する調査」の目的は 2 点ある。

第一の課題は、われわれ文大生みずからの学生気質と大学生活について基礎的な理解を得ることにある。1 年生が大半を占めるわれわれ調査メンバー自身の学生生活は、「大学とは何か、都留文科大学でのキャンパスライフとはどのようなものか」について学び体験しながら、おのおのの学習・生活スタイルを模索する活動でもある。記述的な関心によって、文大生のキャンパスライフと学生気質の基本的特性についてまとめ、それらの「見取り図」を描きたいと思う。

13 の調査班は、それぞれのテーマと視座を通して都留の地域社会について基礎的理解を深めてきた（本報告書「第 1 部」）。では、その「学園のまち」都留で、都留文科大学の学生（「文大生」）はどのような暮らしを営んでいるのだろうか、文大生の学生生活は都留の地域社会とどのようなつながりをもっているのだろうか。このような問題関心をめぐって、各調査班がそれぞれの調査活動によって得た知見を手がかりに考察してみたい。これが第二の調査課題である。

### 16.2 実施方法

- 調査対象： 都留文科大学に在学中の学生（全学科全学年）
- 調査方法： 自記式による調査票調査
- 調査主体： 都留文科大学社会科学部「社会調査・地域調査」A・B 両クラスの受講者
- 調査項目： 自宅通学・下宿の別、下宿の所在地区、下宿生の自炊の頻度、下宿の家賃、生活資金に占める仕送りの割合、利用交通手段、ショッピング地域、新駅開業に伴う電車利用の意向、自宅通学生の通学時間、睡眠時間、テレビ視聴時間、携帯電話の利用月額、部活等への所属有無、大学生活の重点、友人関係・友人づきあい、就職希望、アルバイトの有無、アルバイトの経験職種、アルバイト求人情報の収集手段、アルバイトの月収、アルバイトの月間労働時間、性別役割についての考え方、結婚希望年齢、社会意識（納得の生き方・人助け意識・革新志向・権威主義・協調志向・安定志向）、社会肯定評価、生活満足度（生活程度・同性の友人関係・異性の友人関係・住まい・家庭の人間関係・余暇の時間量・余暇の過ごし方・居住地域・学生生活全体）、市合併協議の認識、ムササビ生息の認識、市内観光地の訪問経験、都留の歴史認識、八朔祭り見学経験、地域交流経験、街へのイメージ、将来の市内居住関心、基本属性（出身地・性別・学年・所属学科）

対象者の選定方法： 学内全授業のうち受講者数 119 名以上の科目をすべてリストアップした。そのなかから、割当法に準じて受講者の学年別・学科別人数構成に配慮しつつ、最終的に 21 科目を任意に抽出した。それらの該当科目の受講者のうち、調査実施期間内の授業回（各 1 回のみ）への出席者全員を対象者とした。複数科目間で重複して出席した対象者については、調査票配布時に除外するとともに、重複提出を避けるよう調査票中に注意書きを付した。

実施方法： 集合調査法（該当授業の終了後の休み時間を利用して、調査員が各教場で調査票を配布し、その場で記入を求めて回収作業を行った）

実施時期： 2004年12月10日～17日

回収結果： 配布数915票  
 回収票689票（回収率 75.3%）  
 無効票 8票  
 有効票681票（有効回収率 74.4%）  
 紛失票 12票

## 16.3 調査結果の分析

### 16.3.1 回答者の属性

回答者の学年別構成（Q37）は、1年生が30.9%、2年生が32.6%、3年生が26.8%、4年生が8.5%、5年生以上が1.2%の内訳となっている。4年生の比率が少ないのは、対象者選定の際の基礎データとなった学内全授業のなかで4年生を対象とする配当科目数が少ないことに起因するものであるが、その点を除けば、各学年ともほぼ均等の比率となっている。

回答者の学年

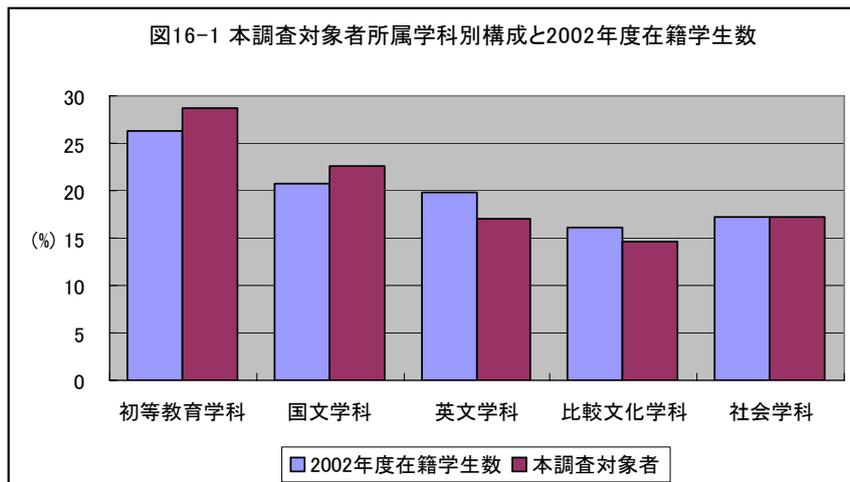
		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	1年生	204	30.5	30.9	30.9
	2年生	215	32.1	32.6	63.5
	3年生	177	26.5	26.8	90.3
	4年生	56	8.4	8.5	98.8
	5年生以上	8	1.2	1.2	100.0
	合計	660	98.7	100.0	
欠損値	無回答	9	1.3		
	合計	669	100.0		

所属学科別にみると（Q38）、都留文科大学の5学科（初等教育学科、国文学科、英文学科、社会学科、比較文化学科）のうち、初等教育学科が28.3%、国文学科が22.6%と、他の学科に対してやや比率が高い。2002年度の在籍学生数ベースでみると、各学科の在籍学生数は、初等教育学科766名、国文学科602、英文学科576、比較文化学科471名、社会学科500名であるので<sup>1</sup>、これらのデータと比較してみると図16-1に示される。

回答者の所属学科

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	初等教育学科	189	28.3	28.6	28.6
	国文学科	149	22.3	22.6	51.2
	英文学科	112	16.7	17.0	68.2
	比較文化学科	96	14.3	14.5	82.7
	社会学科	114	17.0	17.3	100.0
	合計	660	98.7	100.0	
欠損値	無回答	9	1.3		
	合計	669	100.0		

<sup>1</sup> 「2003年 自己点検・評価報告書」都留文科大学

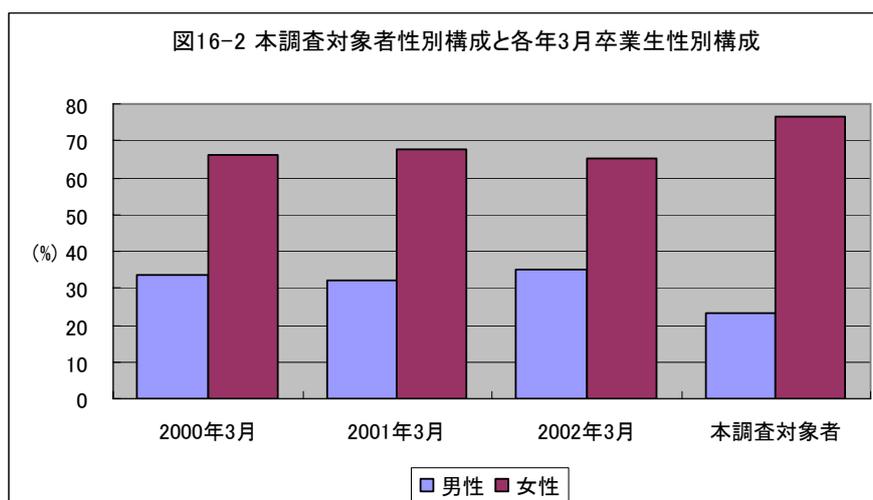


これによると、本調査の対象者は2002年度在籍者に対して、初等教育学科と国文学科で比率がやや高く、英文学科と比較文化学科でやや低い。社会学科はほぼ同比率である。若干の違いはあるものの、全体としてみれば、今回の調査対象者の所属学科別構成は、2002年度在籍者のそれをほぼ同等に反映しているものと考えられる。

なお、性別の構成比率は(Q36)、女性が76.7%、男性が23.3%と、女性のほうが圧倒的に多い。これを、2000年～2002年各3月の卒業生の性別構成<sup>2</sup>と比較してみると図16-2に示される。

回答者の性別

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	男性	154	23.0	23.3	23.3
	女性	507	75.8	76.7	100.0
	合計	661	98.8	100.0	
欠損値	無回答	8	1.2		
合計		669	100.0		



これによると、もともと母集団においても女子学生のほうが多く、男子学生の約2倍におよんでいることが推察されるが、本調査回答者の場合、これをさらに上回って男女比率は1:3に近い。これは、

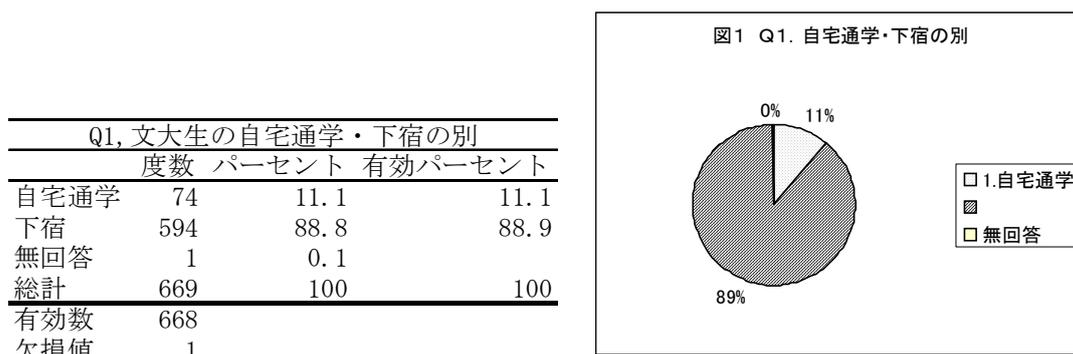
<sup>2</sup> 前掲資料

調査実施当日の男女間での出席状況の違いに起因するものであると考えられる。

### 16.3.2 文大生の学生生活

#### 自宅通学生と下宿生

まず、文大生の自宅通学・下宿の別についてみていこうと思う。図1は、Q1「現在、あなたは自宅から通学していますか、それとも下宿していますか」に対する回答の集計結果である。これによると、「下宿している」と回答した人が全体の9割弱を占めているということがわかる。



都留文科大学の学生の下宿率はきわめて高い。この事実は、文大には北海道から沖縄までの遠方各県からの入学者数が多いことや、大学周辺のアパート数の多さ、最寄りのスーパーには主婦よりも文大生の数のほうが多く見受けられることなどからも実感される。全国各地から学生が集まるのは、文大の入学試験が全国各地の地方会場でも実施されていることや、他の国公立大学ではほとんど行われていない、中期日程の入学試験が行われているということなどとも関連があるのではないと思われる。

(執筆：古宮宏美・小長谷泰右・小寺康輔)

#### 出身地

回答者の出身地をみてみよう。

回答者の出身地

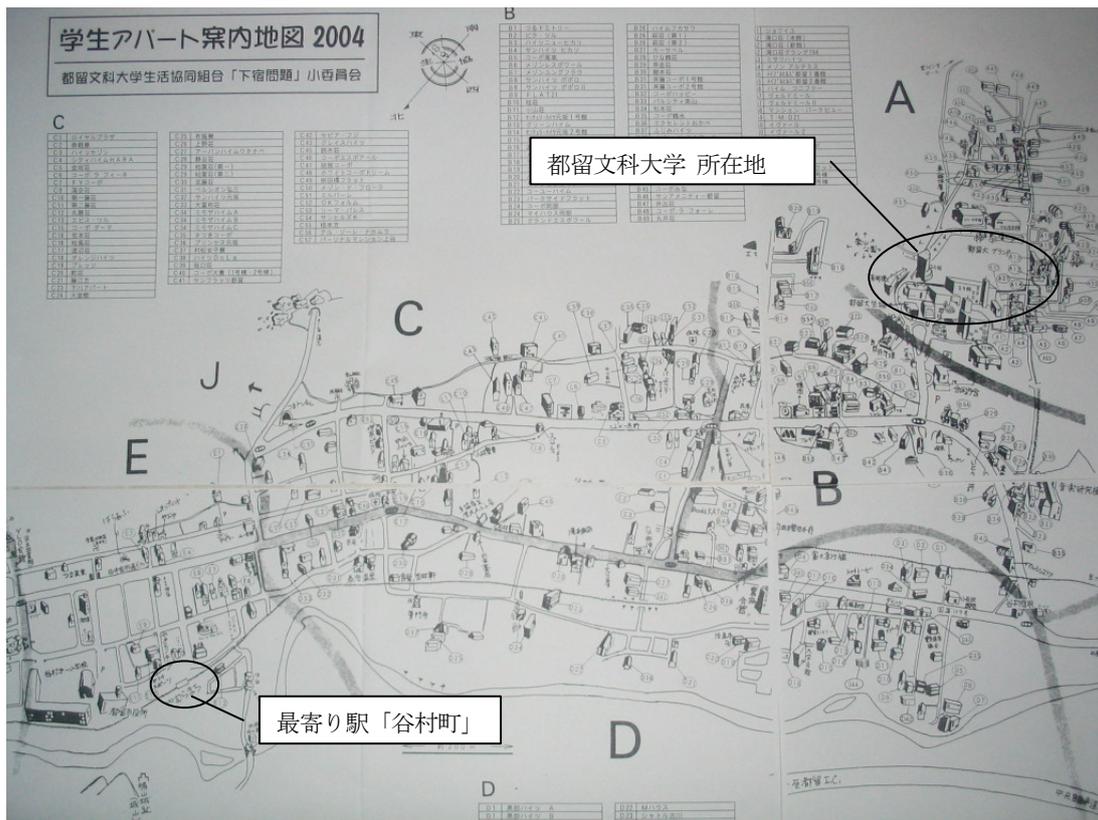
	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効				
山梨県	103	15.4	15.6	15.6
甲信越(山梨県以外)	48	7.2	7.3	22.8
関東	95	14.2	14.4	37.2
北海道	23	3.4	3.5	40.6
東北	94	14.1	14.2	54.8
北陸	60	9.0	9.1	63.9
中部	92	13.8	13.9	77.8
近畿	27	4.0	4.1	81.9
中国	36	5.4	5.4	87.3
四国	21	3.1	3.2	90.5
九州・沖縄	61	9.1	9.2	99.7
国外	2	.3	.3	100.0
合計	662	99.0	100.0	
欠損値	7	1.0		
無回答				
合計	669	100.0		

上の表によると、まず、学生が全国各地からくまなく集まっている点が目を引く。当然ながら、もっとも多いのは大学の地元にあたる山梨県内の出身者であるが、その比率は15.6%に過ぎない。また、

山梨県以外の甲信越、関東、中部など近隣の都県出身者もたしかに多いが、それらを含めても約半数程度（51.1%）である。それ以外のより遠方地域の出身者の場合でも、国外出身者を除けば有効回答者662名のうちそれぞれ20名以上の度数、3%以上の比率を占めている。とくに東北、北陸、九州の出身者が多い点が特筆される。いっぽう、近畿出身者の比率は相対的にみると低い。

### 下宿生活：下宿ブロックと家賃

次に、下宿している学生が、どの地区に住んでいるかについてみていきたい。この「地区」とは、新入生がアパート探しの際に利用する資料に使われるブロック分けである。



（「学生アパート案内地図 2004」都留文科大学学生生活協同組合「下宿問題」小委員会）

都留市街中心は「Eエリア」以東（図中では左方向）に位置する

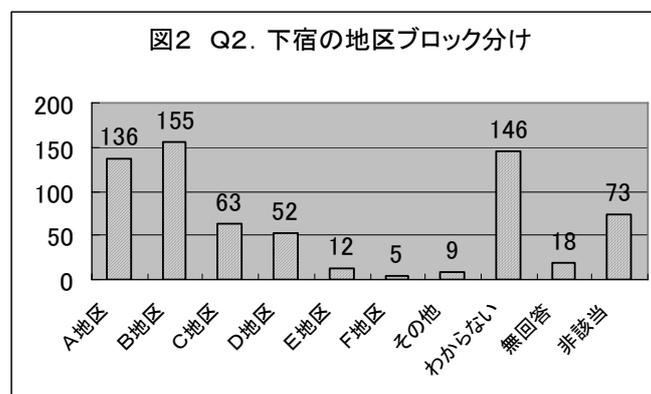


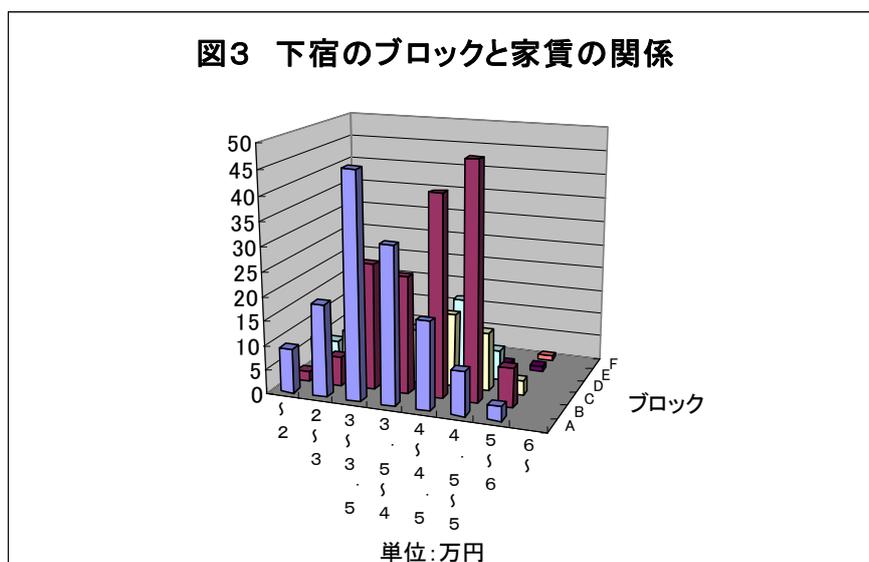
図2は、Q2「あなたの下宿は、いわゆる『ブロック分け』によるとどの地区内にありますか」という

下宿生への質問に対する回答の集計結果である。これによると、B 地区に住んでいる人がもっとも多く、「わからない」と回答した人がその次に多いという結果になった。地区ブロック分けはアパート探しの資料中で用いられている便宜的なものであるから、自分が下宿しているのが何地区なのか日常的には認識していない人が多くなるのではないかと思う。B 地区の次に多いのが A 地区であるが、この差の原因は何であろうか。そのひとつとして次のことが考えられると思う。A 地区は大学まで徒歩約 3～5 分と、大学にもっとも近い地区である。しかし、坂の上に立地しており、スーパーや飲食店、コンビニなどからは少し遠い位置である。それに比べ、B 地区は大学まで徒歩約 5～15 分の距離であり、商店街までの距離も大学までの距離と同じくらいである。このように、大学へ通うことだけでなく、生活全体を考えた場合、B 地区のほうが便利だと考えられるから、A 地区よりも多いのだと思う。また、E 地区、F 地区に住んでいる人が他に比べてかなり少ないのは、大学から離れているためであると考えられる。（櫻井 渚）

下宿の家賃（Q4）について集計すると次の表に示される。

表 Q4 下宿の家賃			
	度数	パーセント	有効パーセント
1. 2万円未満	31	4.6	5.2
2. 2万円台	59	8.8	9.9
3. 30000～34999	127	19.0	21.4
4. 35000～39999	117	17.5	19.7
5. 40000～44999	133	19.9	22.4
6. 45000～49999	99	14.8	16.7
7. 5万円台	27	4.0	4.5
8. 6万円以上	1	0.1	0.2
無回答	4	0.6	
非該当	71	10.6	
総計	669		

だいたい3万円から5万円までに広く分散している。同じ物件条件での全国的な相場から考えると、都留は他の地域より家賃が安めであるという印象を受ける。（小長谷泰右）



下宿ブロックと家賃の関係を比べてみる（図3）と、A 地区よりも B 地区のほうが、家賃の高い物

件が多いことがわかる。これは、A地区のほうが大学に近く、より早い時期に拓けたため、A地区の物件には老朽化したものも多く、そのため家賃も安めの物件が多いのではないかと想像される。

(小寺康輔)

### 下宿生活：仕送りと自炊

Q5「月々の生活資金（奨学金も含める）のうち仕送りの占める割合は月平均でおおよそどれくらいですか」の回答結果をみてみよう。

Q5, 「下宿生の生活における仕送りの割合」					
	度数	パーセント	有効パーセント		
1, なし	61	10.3	10.3	総票数	669
2, 20%未満	28	4.7	4.7	有効数	668
3, 20～39%	35	5.9	5.9	欠損値	1
4, 40～59%	81	13.6	13.6		
5, 60～79%	70	11.8	11.8	下宿生	594
6, 80%以上	319	53.7	53.7	自宅通学生	74
下宿生総度数	594	100.0	100.0	無回答	1

下宿生の、生活資金総額に占める仕送りの割合は、「80%以上」が 53.7 %で半数以上を占めている。この結果だけをみると「親のスネをかじって…」と思われるかもしれないが、アパートの家賃や管理費を含めて考えるとこの数字は妥当といえるかもしれない。筆者は「なし」と答えた人が 10.3 %もいることに驚きを覚えた。アパートの家賃、管理費や共益費、食費や交際費などをすべて自分でまかなっているというのである。おそらく高収入のバイトをしているのだろう。(小谷 朋)

次に男女によって、仕送り（奨学金も含む）の割合に違いがあるか分析してみたいと思う。

性別 (Q36) と「月々の仕送りの割合」(Q5) のクロス表

	1. なし		2. 20%未満		3. 20～39%		4. 40～59%		5. 60～79%		6. 80%以上		無回答	非該当	総計
	度数	比率	度数	比率	度数	比率	度数	比率	度数	比率	度数	比率			
1. 男性	18	11.7	8	5.2	16	10.4	23	14.9	16	10.4	57	37.0	1	15	154
2. 女性	41	8.1	20	3.9	19	3.7	56	11.0	54	10.7	259	51.1	1	57	507
無回答	2		0		0		2		0		3		0	1	8
総計	61		28		35		81		70		319		2	73	669

男性のほうが女性より仕送りの割合が総じて低い<sup>3</sup>。このクロス分析は仕送りそのものの金額水準を取り上げているわけではない。つまり、アルバイトでたくさん稼いでいけば、生活資金総額に占める仕送りの割合は下がるのである。その可能性については、やはり今の社会ではまだ男性のほうが有利かもしれない。また、その他に考えられる理由としては、女性は男性より多少やりくりがうまい人が多く、そのぶん仕送りの額を減らしているということも考えられる。(座馬真代)

Q3「夕食に関して、自炊をする頻度・回数はどれくらいですか」の回答結果をみてみよう。

<sup>3</sup> この関連性は統計的に有意である ( $\chi^2 = 18.3, df = 5, p < 0.01$ )。今回の調査において対象者の抽出は厳密にはランダム・サンプリングによるものではない。したがって、以下に示す統計的検定の結果はあくまでも参考値に過ぎない。

	度数	パーセント	有効パーセント
1. ほぼ毎日	231	34.5	38.9
2. 週に4～5日程度	138	20.6	23.2
3. 週に2～3日程度	144	21.5	24.2
4. 自炊はたまにしかしない	81	12.1	13.6
無回答	3	0.4	100.0
非該当	72	10.8	
総計	669	100	

「ほぼ毎日自炊をしている」という回答が 38.9 %でもっとも多かった。毎日ではないにしても、「週に4～5日程度」「週に2～3日程度」がそれぞれ 23.2 %、24.2 %と、ここまですると 86.3 %に達する。下宿している限り、自炊は切り離せない運命なのだろう。下宿生であるのに「自炊はたまにしかしない」と回答した人が 81 人いたが、これはおそらく食事付の下宿に住んでいるか、スーパーのお惣菜で済ませている、もしくは、アルバイト先のまかないや友人宅でご馳走になっていたりするなどのケースが考えられる。あるいはまた、毎日外食という学生もいるかもしれない。（黒島美佳）

下宿生のなかで、ほぼ毎日自炊をしている人の割合は意外にも少なく、4 割程度である。文大付近は学生街であり、学生をターゲットにした飲食店も多い。加えて、大学寮がないのにもかかわらず、一般的な大学に比べて、学生が「大学周辺」という狭い地域のなかに多く居住している。「5～10分も歩けば友人の部屋」、都留ではこういうことがあたりまえなのである。それゆえに「遊びに行ったついでに夕飯も」などという現象も、それこそ日常茶飯事なのだと考えられる。（小谷 朋）

Q3「自炊をする頻度・回数」と性別（Q36）との関連についてみてみよう。ここでは Q3 の選択肢のうち「ほぼ毎日」「週に4～5日程度」「週に2～3日程度」を合計して「自炊をしている」のカテゴリに集約し、「自炊をしていない」（「自炊はたまにしかしない」）と区別することにする。

仮説：女性のほうが男性に比べて自炊をする頻度・回数は多いのではないか。

Q3					
Q36	1. 自炊をしている		2. 自炊をしていない		総計
	度数	比率	度数	比率	
1. 男性	105	76.6	32	23.4	137
2. 女性	403	89.6	47	10.4	450
総計	508		79		587

検定統計量  $T=15.04$  は棄却域に入る<sup>4</sup>。したがって、「自炊をする頻度」と性別には関連がある。では、学年によって何か違いはあるのだろうか。1年生は2年生以上に比べ、都留のまちをあまり知らない。外食の利用度も違って来るかもしれない。

仮説：1年生は2年生以上に比べ、自炊をする頻度・回数が多いであろう。

<sup>4</sup>  $\chi^2=15.0, df=1, p<0.01$

表 「自炊をする頻度」と「学年」					
Q3					
Q37	1. 自炊をしている		2. 自炊をしていない		総計
	度数	比率	度数	比率	
1. 1年生	159	89.3	19	10.7	178
2. 2年生以上	349	85.3	60	14.7	409
総計	508		79		587

検定統計量  $T=1.7$  は棄却域に入らない。したがって、「自炊をする頻度」と学年の間には関連がない。  
(小長谷 泰右)

### 下宿生活： 市内移動の交通手段

下宿生が市内移動の際に利用する交通手段についてみていこう。図3は、問6「あなたは、市内の移動（通学を除く）におもにどのような交通手段を利用していますか」の質問（下宿生のみ）に対する回答の集計結果である。「徒歩のみ」と「自転車」が圧倒的に多い結果となり、筆者の予想したとおりであった。

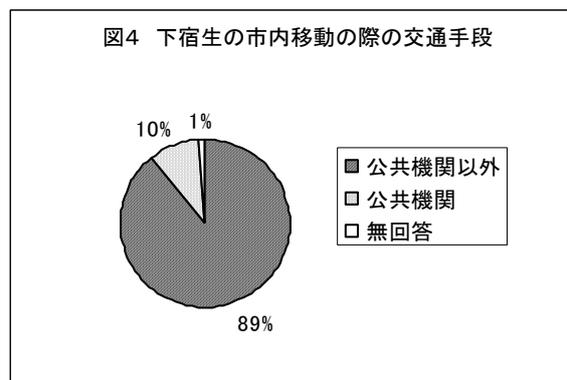
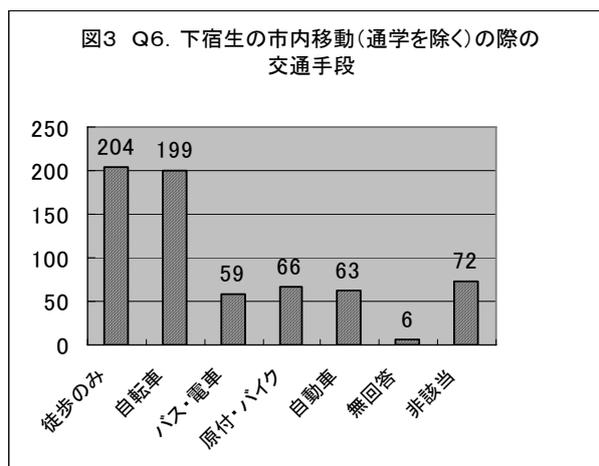


図4は、問6の結果を「徒歩のみ」「自転車」「原付・バイク」「自動車」という公共機関以外と、「バス・電車」という公共機関の2種類に交通手段を分けたグラフである。これによると、市内移動時に公共交通機関を利用する下宿生は1割しかいない。

2004年11月に富士急行線の「都留文科大学前駅」が開業したが、このことによって公共交通機関を利用する人は増えるのだろうか。表1は、問6の集計結果を図4同様に「公共機関以外」と「公共機関」の2種類にまとめたものと、問8「2004年11月に富士急行線の『都留文科大学前駅』が開業しましたが、あなたは、今後、ふだんの生活の中で電車を利用する機会が増えそうですか」（下宿生のみ）に対する回答の集計結果のクロス表である。検定統計量  $7.413688$  は棄却域に入る<sup>5</sup>。よって、これら2つの変数間には関連がある。これによると、どちらの交通手段を利用している人も「今までどおり」と答える人が多い。しかしその比率は、公共機関を利用する人（54.2%）よりも、公共機関以外を利

<sup>5</sup>  $\chi^2=7.4, df=2, p<0.05$

用する人（69.4％）のほうが高い結果となった。

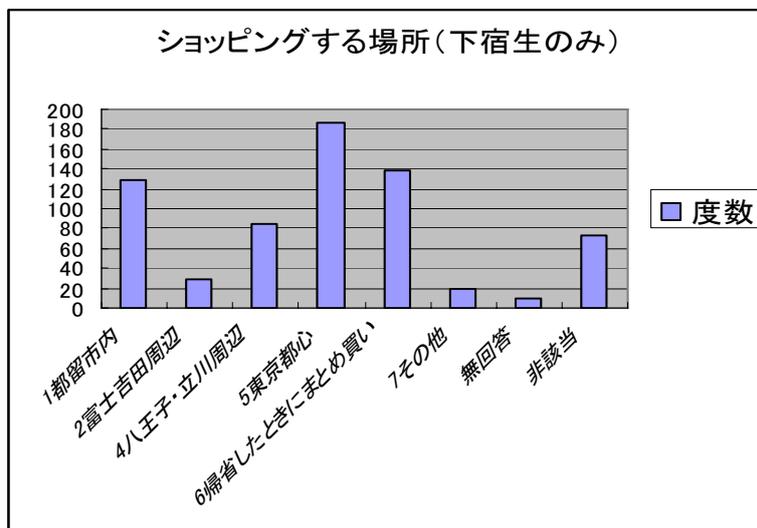
表1 市内移動の際の交通手段と「新駅開業による富士急線の利用機会の頻度の変化」のクロス表

Q6	Q8										
	増えそう		今まで通り		わからない		無回答		非該当		総計
	度数	比率	度数	比率	度数	比率	度数	比率	度数	比率	
公共機関以外	115	21.6	369	69.4	47	8.8	1	0.2	0	0	532
公共機関	22	37.3	32	54.2	5	8.5	0	0.0	0	0	59
無回答	2	33.3	2	33.3	0	0.0	2	33.3	0	0	6
非該当	0	0	0	0	0	0.0	0	0.0	72	100	72
総計	139	20.8	403	60.2	52	7.8	3	0.4	72	10.8	669

市内を走る電車の新駅が大学近くに開業しても、電車の利用機会の見込みを「今までどおり」と答える人が多いのはなぜであろうか。その理由のひとつとして、富士急線の運賃の高さが挙げられるだろう。電車利用によって得られる利便性と運賃の負担を比較考量するならば、今までどおり徒歩や自転車などでじゅうぶんだと考える人が多いのだと思う。実際、筆者自身もそう考える者のひとりである。新駅の利用にしても、今まで谷村町駅や十日市場駅を利用していたところを、それよりも近い新駅で乗車するようになった、という程度の変化で、電車の利用機会そのものはあまり変わらないのだと思う。また、もうひとつの公共機関であるバスの場合は、本数が少ないため、利用者が少ないのだと考えられる。（櫻井 渚）

#### 下宿生活：生活圏

下宿生の生活圏・生活行動範囲を、消費行動を手がかりに探ってみよう。次の図は Q7「あなたがショッピング（食料品・日用品以外）をする場所はおもにどこですか」への回答を集計したものである。



これをみると、「東京都心」がもっとも多く（31.7％）、「帰省した時に実家でまとめて買う」（23.7％）がこれに次ぐ。「都留市内で済ませることがほとんど」という人は全体の4分の1以下（22.0％）である。「東京都心」と「八王子・立川周辺」を合計すると比率は46.0％にのぼり、都内まで行って買い物をするという人が圧倒的に多いのがわかる。多少お金や時間はかかっても、日帰りで遊んで帰ってこられる距離にあるので、都内まで買い物に出かける人が多いのではないかと考えられる。「都留市

内」の比率は筆者の予想を上回るものであったが、大学周辺に個人経営の服飾店・雑貨店などもいくつかあるので、「近場ですませたい」という人に選ばれていると考えられる。いっぽう、「富士吉田市周辺」はわずかに4.8%で、「大月市内」は回答者が皆無であった。（井川絵美・清水優一・座馬真代）

## 学生生活の重点

文大生はどのような学生生活を送っているのだろうか。ふたたび、自宅通学生も含めた文大生全体の分析に戻って考察してみよう。次の表は、Q14「あなたは大学生活の中で、現在、どのようなことに最も重点をおいているとお考えですか」の集計結果である。

表Q14 大学生活の中で最も重点をおいていると考えていること			
	度数	パーセント	有効パーセント
勉強や研究を第一においた生活	102	15.2	15.4
部活・サークル・同好会の活動を第一においた生活	122	18.2	18.5
自分の趣味（車・スポーツ・音楽・旅行・パソコン等）を第一においた生活	87	13.0	13.2
良き友を得たり豊かな人間関係を結んだりすることを第一においた生活	94	14.1	14.2
将来就きたい仕事や就職のために資格取得や大学外の学校に通うことを第一においた生活	27	4.0	4.1
アルバイトをしたり、お金を貯めたりすることを第一においた生活	26	3.9	3.9
特別に重点をおかず、ほどほどに組み合わせた生活	170	25.4	25.7
なんとなく過ぎていく生活	26	3.9	3.9
その他	7	1.0	1.1
無回答	8	1.2	
<b>総計</b>	<b>669</b>	<b>100</b>	<b>100</b>

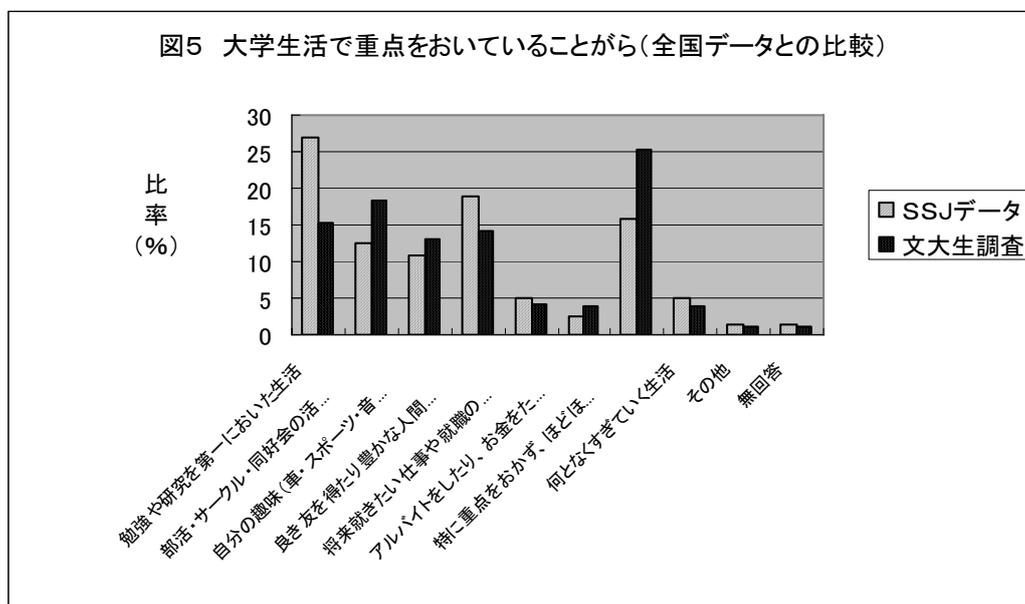
これをみると、約4分の1（25.7%）の対象者が「特別に重点をおかず、ほどほどに組み合わせた生活」を選択している。文大生の少なからぬ部分が、とくに明確な目的意識を設けることなく、ほどよく自然体に近い学生生活を送っているようだ。この選択肢は良い生活状況でも悪い生活状況でも選ぶことができ、そのうえ中立的な印象が与えられるという無難なものである。なかには「これでいいや」と妥協してこれを選んだ人もいよう。そのために選択者が多かったのではないだろうか。次に多いのが「部活・サークル・同好会の活動を第一においた生活」18.5%で、3番目に多いのが「勉強や研究を第一においた生活」15.2%である。これに、「良き友を得たり豊かな人間関係を結んだりすることを第一においた生活」14.2%、「自分の趣味（車・スポーツ・音楽・旅行・パソコン等）を第一においた生活」13.2%が続く。いっぽう、「将来就きたい仕事や就職のために資格取得や大学外の学校に通うことを第一においた生活」4.1%や、「アルバイトをしたり、お金を貯めたりすることを第一においた生活」3.9%、「なんとなく過ぎていく生活」3.9%というようなものは少数意見であるとわかった。（井上真伊子）

「その他」の回答としては、「ひきこもり」「遊ぶ毎日」「病氣療養」「全部頑張っている」「いきあたりばったり」「勉強とバイト」などが挙げられている。

この文大生調査の結果を「第39回学生生活実体調査, 2003」<sup>6</sup>の結果と比較してみると以下のことが指摘できる。全国の大学生は、「勉強や研究を第一においた生活」と答えた人が、文大生の「特別に重点をおかず、ほどほどに組み合わせた生活」と答えた人とほぼ同じ比率で、もっとも多い回答となっていることがわかる。文大生で「勉強や研究を第一においた生活」と回答した人は全国の大学生の半分強に過ぎない。逆に、文大生が重点をおいていることは、勉強や研究よりも、部活やサークルなどの活動や趣味などの学生生活であり、これらは全国の学生に比べて高い比率となっている。文大生の場合、「特別に重点をおかず、ほどほどに組み合わせた生活」の回答がもっとも多く、全国の学生に比べてもその比率が10%近く上回っている点から考えると、何かひとつのことに集中した生活を送るよ

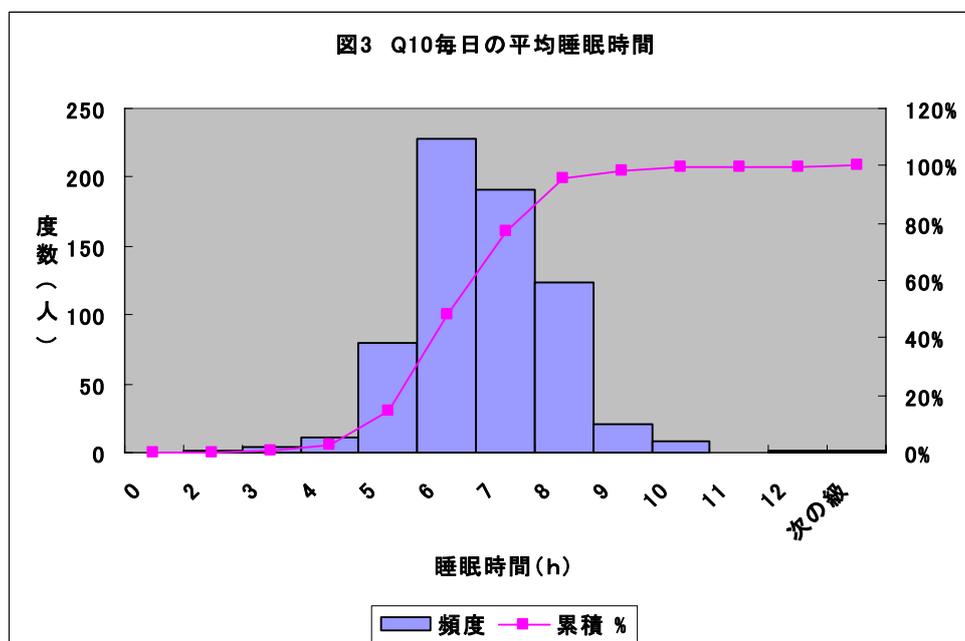
<sup>6</sup> 全国大学生生活共同組合連合会、2003年10月実施、調査対象：全国74大学の学生、抽出サンプル数44,601人、回収サンプル数15,542人。

りも、学生生活のどの面でも楽しみたい、学生だからこそできるさまざまな体験を得たいと考えている学生が多いのではないだろうか。（櫻井 渚）



### 睡眠時間

次の図3は平均睡眠時間(Q10)の集計結果である。平均は6.6時間で、最小値が1.5時間、最大値は14時間である。（佐藤景輔）



他の変数とクロスさせてみると、性別では違いがみられない。自宅通学・下宿の別でみると次の表6に示される。当然に予想されたことであるが、自宅通学生では睡眠時間の短い人の割合が高く、約30%が平均睡眠時間5.5時間以下であった。反対に、下宿生では睡眠時間の長い人の割合が高く、20%

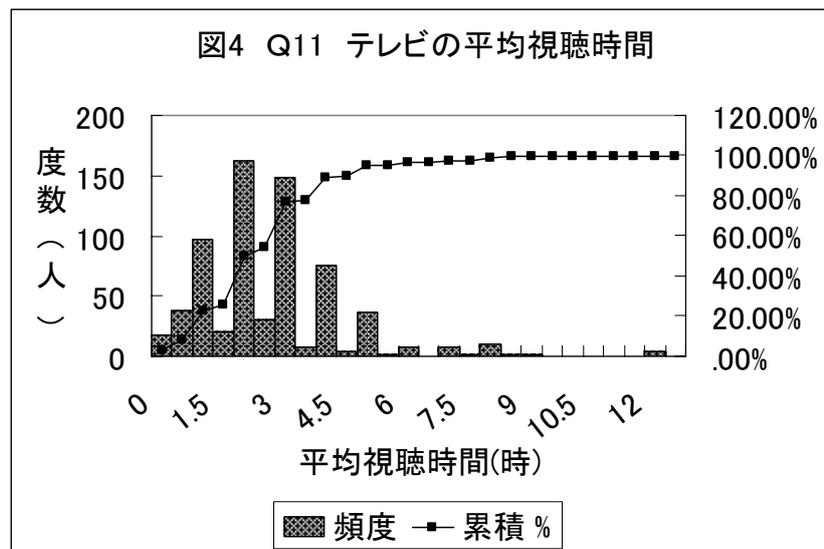
近くが平均睡眠時間8時間以上であるのに対して、自宅通学生では8.2%の割合に過ぎない<sup>7</sup>。自宅通学生の場合、そのほとんどが電車を使って通学しているはずで、中央線、富士急線ともに電車の本数が少なく、ダイヤに合わせて行動しなくてはならず、そのために睡眠時間を削られているのではないか。（齋藤文也・今村吾朗）

表6 自宅通学、下宿の別と平均睡眠時間についてのクロス表

Q1	Q10改 ～5.5時間		6～7.5時間		8時間以上		総計
	度数	比率	度数	比率	度数	比率	
自宅通学	21	28.8	46	63.0	6	8.2	73
下宿	89	15.0	390	65.5	116	19.5	595
無回答	1	100.0		0.0		0.0	1
総計	111	16.6	436	65.2	122	18.2	669

### テレビ視聴時間

図4は問11「あなたの毎日のテレビ視聴時間は平均してどのくらいですか。30分単位でお答えください」に対する回答を集計した結果である。平均値は2.6時間であり、最小値が0時間、最大値は12.0時間である。



自宅通学生と下宿生のあいだでテレビ視聴時間に違いがあるだろうか。下宿している学生は多くが一人暮らしである。ひとりで家にいれば、なんとなくテレビをつける。自宅で家族と生活している学生よりも、下宿で一人暮らしをしている学生のほうがテレビの視聴時間は長いのではないか。次の表3は、これら2つの変数間のクロス表である。ここでは、テレビの平均視聴時間について「2時間未満」「2～4時間未満」「4時間以上」の3カテゴリに分けて集計してみた。平均視聴時間「4時間以上」というのは、1日が24時間であるのだから、その6分の1もテレビを見ているのは「長い」と考えてよいと判断した。

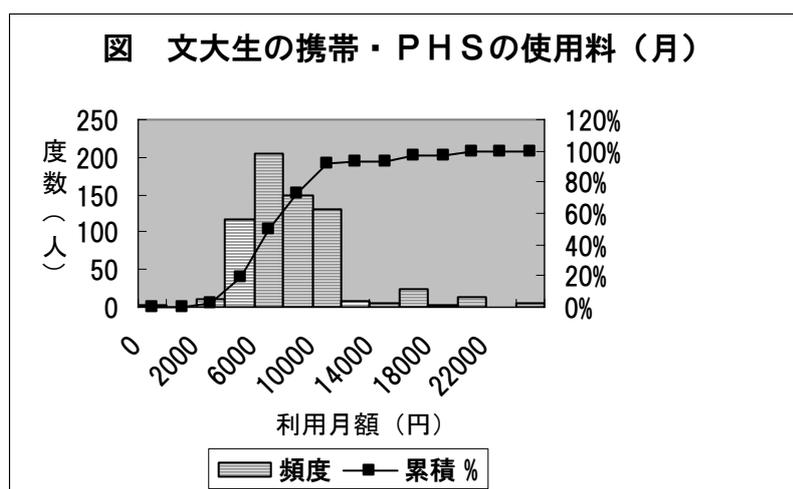
<sup>7</sup> 自宅通学・下宿の別と睡眠時間とのあいだの関連性は統計的に有意である ( $\chi^2 = 11.5, df = 2, p < 0.01$ )。

Q1	Q11						総計
	2時間未満		2～4時間未満		4時間以上		
	度数	比率	度数	比率	度数	比率	
自宅通学	29	39.7	37	50.7	7	9.6	73
下宿	143	24.0	304	51.1	148	24.9	595
無回答	1	100.0					1
総計	173	25.9	341	51.0	155	23.2	669

これによると、自宅通学生・下宿生ともに、約50%はテレビの平均視聴時間が「2～4時間未満」であることがわかる。しかし、「2時間未満」「4時間以上」となると両者のあいだに大きな差がみられる。このことから、これら2つの変数間には関連性があり<sup>8</sup>、下宿している学生のほうが自宅通学の学生より平均してテレビを見る時間が長いといえる。（島尾菜々子）

### 携帯電話

次の図は、問12「あなたの携帯電話・PHSの利用金額は月平均でいくらですか。1,000円単位でお答えください」に対する回答を集計した結果である。



最小値は0円、最大値は50,000円である。平均値は7,328円であるが、筆者自身の生活実感からすれば同世代の平均的利用料よりもやや高く感じられる。文大生の場合、やはり下宿生が多く、実家にいる家族や郷里の友人たちと電話したりするためであろう。（石若文乃）

実際のところ、自宅通学生と下宿生とでは携帯電話の利用料金に違いがあるのだろうか。筆者の仮説としては、下宿生より自宅通学生のほうが携帯電話の料金は高いと考える。下宿の学生は自宅通学者に比べて、家賃や光熱費、食費、交際費などさまざまな生活費用を仕送りやアルバイトの給料でまかなわなければならない、これらの限られた収入のなかでやっていくために、必然的に節約することになり、携帯電話の利用も最小限になると予想する。次の表はこれら2つの変数をクロス集計したものである。ここではQ12（携帯電話・PHSの利用平均月額）に対する回答を3つのカテゴリに分けて、5,000円未満を「低」、5,000円以上10,000円未満を「中」、10,000円以上を「高」としてまとめた。

<sup>8</sup> この関連性は統計的に有意である ( $\chi^2 = 12.3, df = 2, p < 0.01$ )。

表：自宅通学と下宿の別と携帯電話の月利用料金

Q1	Q12						無回答	統計
	1. 低		2. 中		3. 高			
	度数	比率	度数	比率	度数	比率		
1. 自宅通学	24	32.9	45	61.6	4	5.5		73
2. 下宿	106	22.6	310	66.1	53	11.3		469
無回答	1		0		0			1
総計	131		355		57			543

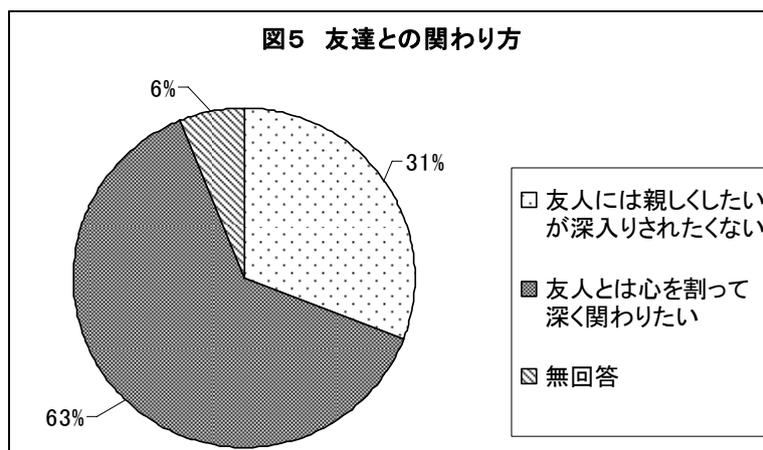
これによると、予想に反して自宅通学者も下宿の学生もあまり違いがないことがわかった。むしろ下宿生のほうが携帯電話を多く利用している<sup>9</sup>。自宅通学生の場合、自宅には固定電話があり在宅中は携帯電話を使わずにすむ。いっぽう、下宿生で固定電話をもっている人は少なく、電話連絡はつねに携帯電話を使ってということになってしまう。これらの理由により上の結果となったのだろう。

また、見方によっては両者間にあまり大差はないと捉えることもできよう。5,6年前まで携帯電話はあまり普及していなかった。それまでは、携帯電話なしでも日常生活に支障はなかったのだが、今となっては、便利な携帯電話は生活になくてはならない道具となった。そのために自宅通学生と下宿生とのあいだにあまり大きな違いが生まれないのだと考えられる。（鶴沼 陵）

### 友人関係

Q15では「あなたの友人関係・友人づきあいは、次にあげる各項目に関してどちらが近いですか。a.とb.の2つの選択肢のうち、どちらか1つを選んでください」の質問により、対象者たちの友人関係に対する意識を尋ねている（章末 単純集計結果参照）。

小問4「a. 友人とは親しくしたいがあまり深入りされたくない/b. 友人とは心を割って深く関わりたい」に関して、筆者の仮説としては、表面的な友人づきあいはつまらないと思うし、文大のように学友どうしがこれだけ近い環境にいるところでは、友だちの家に泊まるということも日常茶飯事であろう。このように友人と接する機会が多いので、多くの人が友人と深く関わりたいと思っているのではないか。次の図5は小問4の集計結果を示したものである。



予想したとおり、「友人とは心を割って深く関わりたい」と思う人は過半数を占め、63.1%の比率である。多くの文大生は一人暮らしをしており、悩みなどを気軽に相談できる友人がほしいのではないだ

<sup>9</sup> この関連性は統計的に有意である ( $\chi^2 = 11.6, df = 2, p < 0.01$ )。

ろうか。しかし、いっぽうでは約3割の人が「深入りされたくない」と考えている。これはおそらく、「親しくしたいがあまりプライベートなことには関わってほしくない」というニュアンスであって、人間づきあいそのものがいやだというわけではないであろう。いずれにしても、友人とは仲良くしたいという気持ちは共通のものだろうと筆者は想像する。（江口 拓郎）

次の表 Q15-3 は、小問3「a. 初対面の人とも臆せず話すことができる/b. 初対面の人にはどうしても気後れしてしまう」の集計結果である。これは、文大生の地域住民との交流にも関連する設問である。むろん、相手が「友人」と「地域住民」とでは接し方やその意識が異なる可能性も大きいが、初対面の人との接触という点では共通点があると思われる。

	度数	パーセント	有効パーセント
初対面の人とも臆せず話すことができる	245	36.6	38.6
初対面の人にはどうしても気後れしてしまう	390	58.3	61.4
無回答	34	5.1	
<b>総計</b>	<b>669</b>	<b>100</b>	<b>100</b>

この結果をみると、半数以上の人（58.3%）が「どうしても気後れしてしまう」を選択している。地域住民との交流も、このことから億劫になってしまいがちなかもしれない。（井上真伊子）

Q15では、大谷信介「友人ネットワークに関する調査」<sup>10</sup>（栗田 1999: 30-32）における該当設問と質問文および選択肢を共通化させることによって、文大生のデータを他大の学生とのあいだで比較することが可能になるよう設計した。同調査では大都市学生のサンプルとして大阪府堺市の桃山学院大学が、地方都市大学生のサンプルとして愛媛県松山市の松山大学（いずれも私立大学）が調査対象に選定されている。Q15の集計結果を桃山学院大学調査および松山大学調査の結果と比較したものが次頁の図 16-3～16-8 である。各大学の学生の構成や出身地の分布、募集実態、立地環境、教育内容などは異なるので単純に比較することはできないが、全体的な趨勢としては、文大生の調査結果は他の2大学のそれらとほぼ同様の傾向を示している。そのなかで、微妙な違いを指摘するならば、友人関係構築の積極性（図 16-4）に関して、桃山学院大対象者の47.6%、松山大対象者の44.5%が「相手から話しかけられて友人となることが多い」を選択したのに対して、文大生対象者の同比率は51.0%である。初対面の人との接触（図 16-5）に関しては、「初対面の人にはどうしても気後れしてしまう」と回答したのは桃山学院大対象者の57.6%、松山大対象者の55.6%に対して、文大生対象者では61.4%である。また、学内での交友行動の固定度（図 16-3）に関して、桃山学院大対象者の35.2%、松山大対象者の29.9%が「場合に応じて異なった人と行動することが多い」を選択したのに対して、文大生対象者の同比率は43.1%とやや高い数値を示しており、学内の単独行動への抵抗感（図 16-8）では、「学内で一人で行動することに全く抵抗を感じない」と回答したのが桃山学院大対象者の39.2%、松山大対象者の47.9%であるのに対して、文大生対象者では67.6%と、その差異が際立っている。

<sup>10</sup> 「友人ネットワークに関する調査」研究代表者・調査主体：大谷信介。桃山学院大学調査の調査対象は、同大社会学部2年生で「社会調査」の受講者全員188名、1994年10月18日～19日に集合法により実施、有効サンプル数125票、有効回収率66.5%。松山大学調査の調査対象は同大学部学生5061名で、人文学部社会学科・英語英文学科の全学生および経済学部・経営学部・法学部1～3年生の全数調査、1993年11月9日～20日に集合法により実施、有効サンプル数2,690票、有効回収率52.8%。

図16-3 学内での交友行動の固定度(Q15-1)

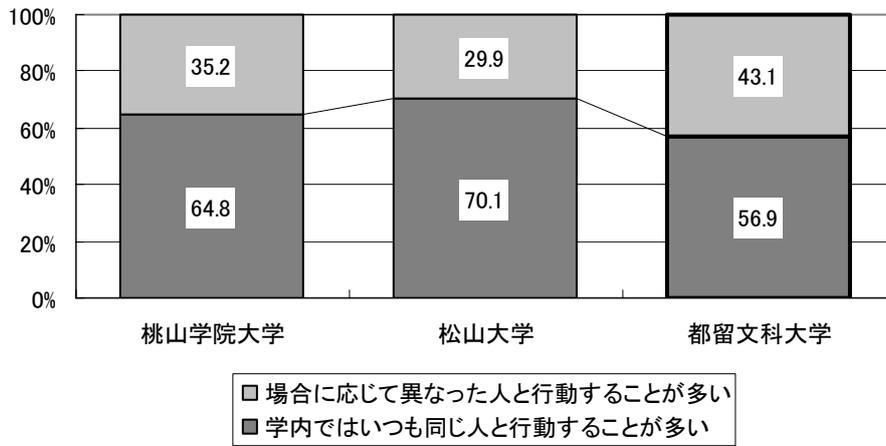


図16-4 友人関係構築への積極性(Q15-2)

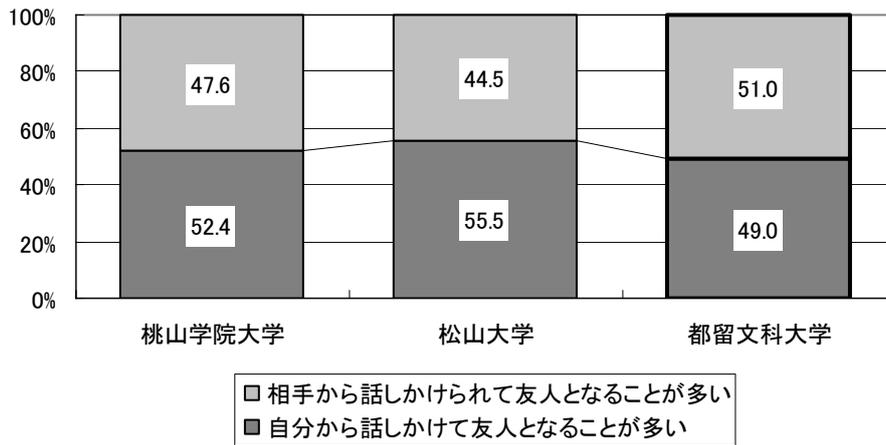


図16-5 初対面の人とのつきあい方(Q15-3)

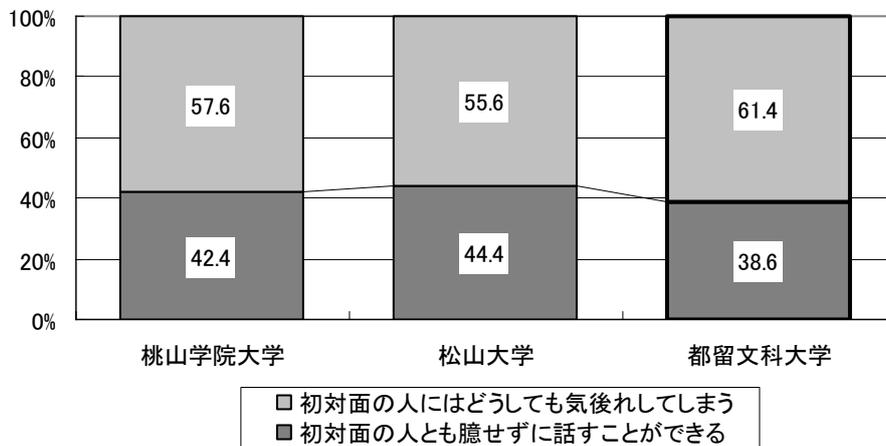


図16-6 友人づきあいの深さに対する考え方(Q15-4)

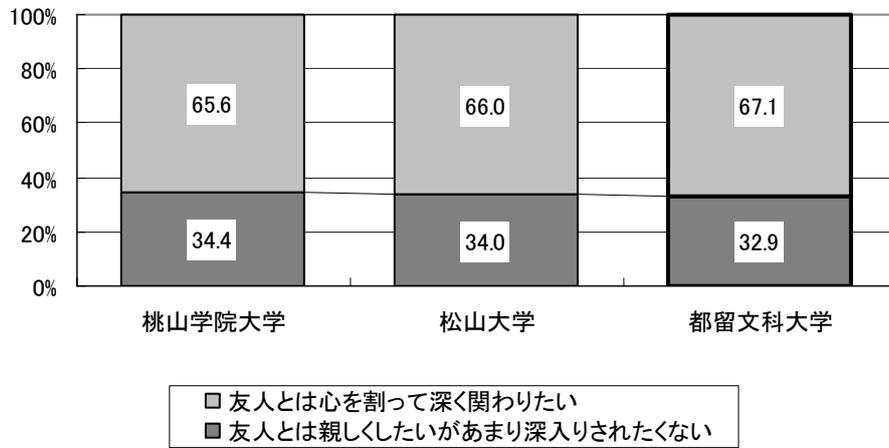


図16-7 交友関係の拡大志向(Q15-5)

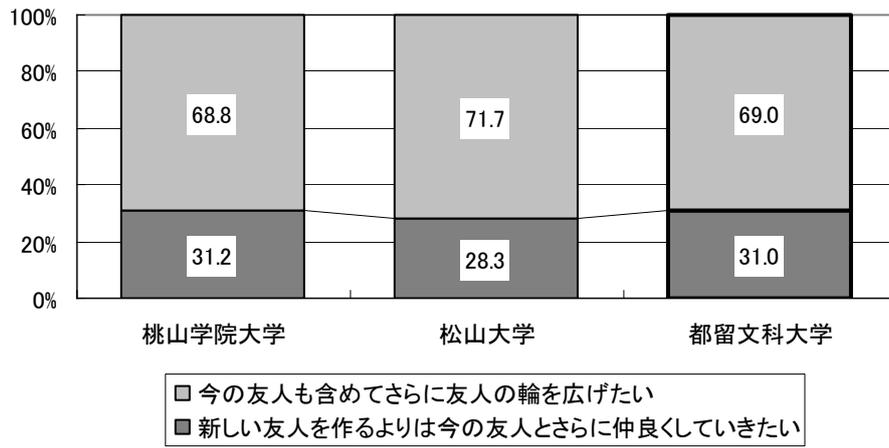
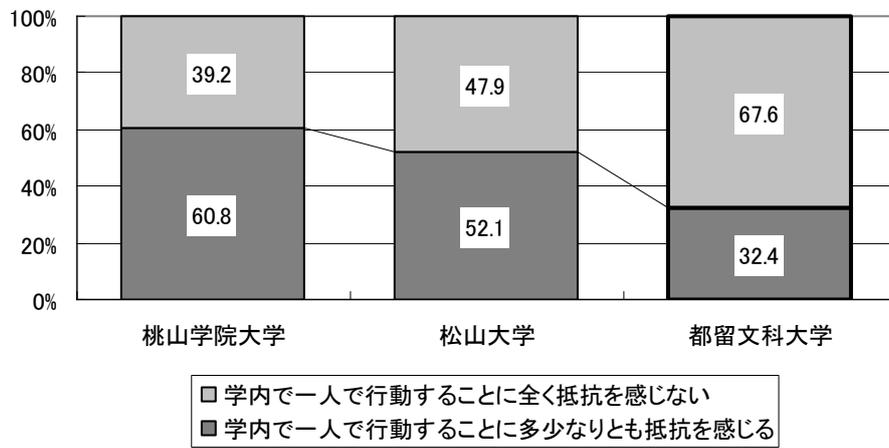


図16-8 学内の単独行動への抵抗感(Q15-6)



これらの結果にみる限り、文大生の友人関係構築の特徴として、初対面の相手に対して気後れせず自分から話しかけることが不得手で、内気な性格の学生がやや多いこと、友人づきあいの深さや広がりなど友人関係そのものに強い関心を示しているものの、交友行動はどちらかというと流動的・開放的で、ひとりで行動することにもさほど抵抗を感じない、という傾向を指摘することができる。

(担当教員)

Q15の結果をそれぞれ他の変数とクロス分析してみよう。次の表4は、Q15-3「a. 初対面の人とも臆せずに話することができる／b. 初対面の人にはどうしても気後れしてしまう」と、Q15-2「a. 自分から話しかけて友人となることが多い／b. 相手から話しかけられて友人となることが多い」をクロス集計したものである。

表4 初対面の人に対する心境 (Q15\_3) と「友人になるきっかけ (15\_2)」のクロス表

Q15_3	Q15_2						総計
	自分から話しかけて友人となることが多い		相手から話しかけられて友人となることが多い		無回答		
	度数	比率	度数	比率	度数	比率	
初対面の人とも臆せずに話することができる	194	79.2	48	19.6	3	1.2	245
初対面の人にはどうしても気後れしてしまう	114	29.2	273	70.0	3	0.8	390
無回答	2	5.9	2	5.9	30	88.2	34
総計	310	46.3	323	48.3	36	5.4	669

多かった組み合わせを順番に挙げると、①「初対面の人とも臆せずに話することができる」「自分から話しかけて友人となることが多い」人が79.2%、②「初対面の人にはどうしても気後れしてしまう」「相手から話しかけられて友人となることが多い」人70.0%、③「初対面の人にはどうしても気後れしてしまう」「自分から話しかけて友人となることが多い」人29.2%、④「初対面の人とも臆せずに話することができる」「相手から話しかけられて友人となることが多い」人19.6%の順となっている。この結果は、当然といえば当然のものであるといえよう。①のケースは積極性のあらわれであり、②のケースは人見知りをしがちな性格の人に該当する。③のケースは「恥ずかしいけど声をかけてみよう」という行動であり、④のケースは話しかけられやすいタイプであると思われる。(志村 渚)

やはり、「初対面の人とも臆せずに話することができる」人は「自分から話しかけて友人となる」ことが多く、「初対面の人には気後れしてしまう」人は「相手から話しかけられて友人となる」ことが多いようである<sup>11</sup>。ここで興味深いのは、周辺度数に着目すると、初対面の人との接し方(Q15-3)に対して、全体では「臆せずに話することができる」という人が245名(36.6%)、「気後れしてしまう」人が390名(58.3%)であるのに対し、友人になるきっかけ(Q15-2)に関しては、2つの選択肢全体の比率が「自分から話しかけて」46.3%、「相手から話しかけられて」48.3%と、ほぼ同比率になっていることである。文大生のなかには、「初対面の人には苦手だが、自分から話しかけて友だちになろう」と勇気を出して頑張っている人が少なからずいるようである。(江口拓郎)

学内でいつも同じ人と行動することが多い人ほど、「新しい友人を作るよりは今の友人とさらに仲良くしていきたい」と思うのではないか。次の表1は、Q15-1「a. 学内ではいつも同じ人と行動する

<sup>11</sup> これら2つの変数間の関連性は統計的に有意である ( $\chi^2=153.2, df=1, p<0.01$ )。

ことが多い／b. 場合に応じて異なった人と行動することが多い」と、Q15-5「a. 新しい友人を作るよりは今の友人とさらに仲良くしていきたい／b. 今の友人も含めてさらに友人の輪を広げたい」との関連をまとめたものである。

**表1 「学内で同じ人と行動」と「今の友人とさらに仲良くしたい」のクロス表**

Q15_1	Q15_5						総計
	今の友人と仲良くしていきたい		さらに友人の輪を広げたい		無回答		
	度数	比率	度数	比率	度数	比率	
同じ人と行動する	125	33.5	240	64.3	8	2.1	373
異なった人と行動する	71	25.1	198	70.0	14	4.9	283
無回答	2	15.4	2	15.4	9	69.2	13
総計	198	29.6	440	65.8	31	4.6	669

これによると、たしかに、「異なった人と行動する」と答えた人よりも「同じ人と行動する」と答えた人のほうが、「今の友人と仲良くしていきたい」と思う傾向が強いようだ<sup>12</sup>。しかし、回答者全体で見ると、「さらに友人の輪を広げたい」と思っている人が65.8%と過半数を占めている。「同じ人と行動する」からこそ、新しい交友関係を築きたいと考え、また、「異なった人と行動することが多い」人もさらに多くの人と関わりをもちたいと思うのではないか。（江口拓郎）

「場合に応じて異なる人と行動することが多い」人は、「学内で一人で行動することに抵抗を感じない」のではないだろうか。次の表6は、Q15-1とQ15-6「a. 学内で一人で行動することに多少なりとも抵抗を感じる／b. 学内で一人で行動することに全く抵抗を感じない」とのクロス表である。

**表6 学内でいつも同じ人と行動するか否かと学内で一人で行動することに抵抗を感じるか否かのクロス表**

Q15_1	Q15_6						総計
	抵抗を感じる		抵抗を感じない		無回答		
	度数	比率	度数	比率	度数	比率	
同じ人と行動	147.0	39.4	216.0	57.9	10.0	2.7	373.0
場合に応じて異なる人	58.0	20.5	212.0	74.9	13.0	4.6	283.0
無回答	1.0	7.7	1.0	7.7	11.0	84.6	13.0
総計	206.0	30.8	429.0	64.1	34.0	5.1	669.0

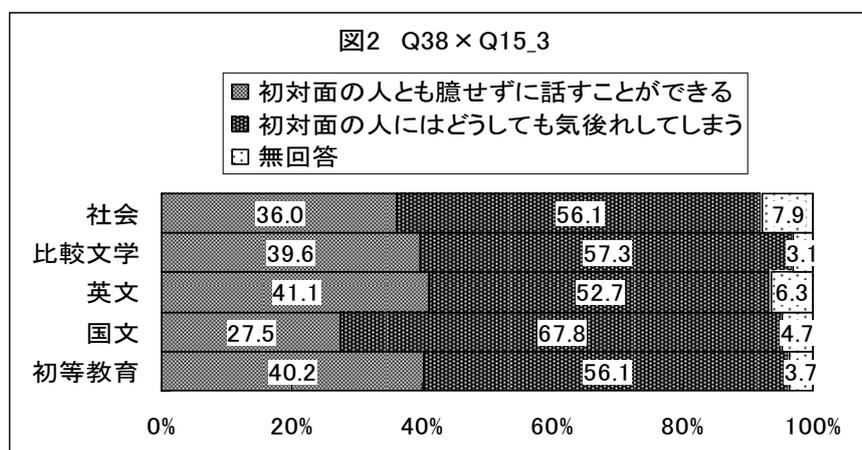
これによると、仮説のとおり、場合に応じて異なる人と行動することが多い人は、学内でひとりで行動することに抵抗を感じないといえる<sup>13</sup>。異なる人と行動することが多い人は、いろいろな人とコミュニケーションをとることができるため、ひとりで行動していてもあまり抵抗を感じないのではないかと筆者は考える。しかし、「いつも同じ人と行動することが多い」と答えた人も、「一人で行動することに抵抗を感じない」という人(57.9%)が、「抵抗を感じる」と答えた人(39.4%)を上回っている。大学では、小学校・中学校・高校のようにホームルームがあるわけではなく、自分の興味や関心に応じて履修科目を選ぶため、すべての授業で席を並べる友人はめったにいない。よって、自然とひ

<sup>12</sup> この関連性は統計的に有意である ( $\chi^2=4.5, df=1, p<0.05$ )。

<sup>13</sup> この関連性も統計的に有意である ( $\chi^2=25.6, df=1, p<0.01$ )。

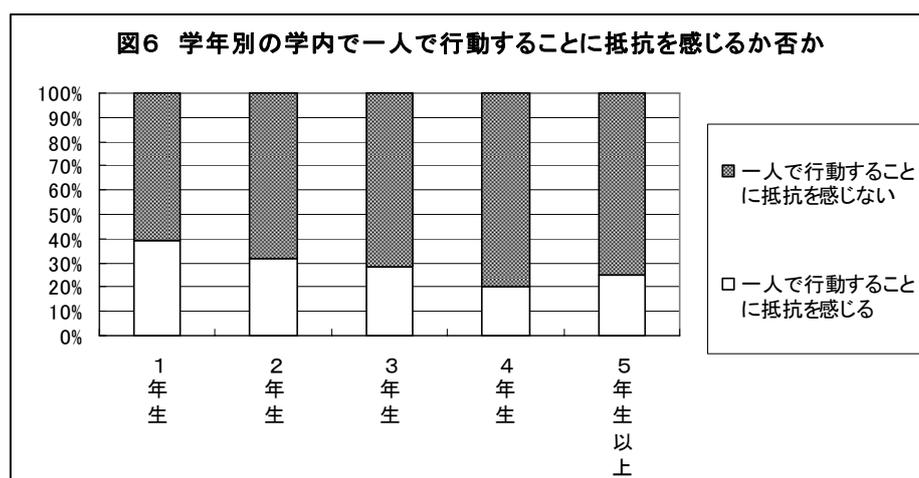
とりで行動する機会が多くなり、また、周りもそうなので、抵抗を感じなくなるのではないかと考える。(神村幸恵)

学科や学年別では違いがあるだろうか。次の図2は、対象者の所属学科(Q38)と初対面の人との接し方(Q15-3)をクロス集計したものである。



どの学科でもほぼ同じような結果となっているが、そのなかでも、国文学科では「どうしても気後れしてしまう」を選んだ人がやや多いようだ。それでも、初対面の人に対する接し方に関して、学科による差はほとんどないといえる。(志村 渚)

大学生活に慣れていない1年生は、ひとりであることに抵抗を感じているのではないか。今回の調査が行われたのは2004年の12月であり、1年生もだいたい大学にも慣れた頃だと思われるが、それでも、学年が若いほど、ひとりであることに抵抗を感じているのではないだろうか。次の図6は、学年とQ15-6をクロス集計した結果である。



これによると、仮説のとおり、学年が上がるごとに学内でひとりで行動することに抵抗を感じなくなっているようである<sup>14</sup>。学年が上がると、自分の将来のために資格を取得するなど、授業の履修計画

<sup>14</sup> この関連性は10%水準で統計的に有意である ( $\chi^2=9.4, df=4, p<0.1$ )。

において入学当初よりも本人の主体的選択が大きく反映されてくるはずだ。そのため、学年が上がるに連れてひとりであることが多くなり、抵抗を感じていた人もそれに慣れてくるのだろう。例外的に「5年生以上」の回答が4年生以下とは異なった傾向を示しているが、5年生以上の回答者のサンプル数がかなり少ない（8名）ので、これは誤差の範囲内であると考えられる。（江口拓郎）

性別ではどうであろうか。「男性と女性では友人関係に対する考え方は違う」という仮説のもとに、以下、Q15の各設問と性別（Q36）とをクロス分析してみよう。まずはQ15-1（学内の交友行動の固定度）と性別のクロス結果を表にした。これによると、若干ではあるが男性のほうが「場合に応じて異なった人と行動」する比率が高いようである<sup>15</sup>。

	同じ人と行動		異なる人と行動		無回答		総計
	度数	比率	度数	比率	度数	比率	
1. 男性	77	50.0	72	46.8	5	3.2	154
2. 女性	291	57.4	209	41.2	7	1.4	507
無回答	5		2		1		8
総計	373		283		13		669

次に Q15-2（友人関係構築への積極性）と性別をクロスさせて表を作った。

	自分から話しかける		相手から話しかけられる		無回答		総計
	度数	比率	度数	比率	度数	比率	
1. 男性	58	37.7	86	55.8	10	6.5	154
2. 女性	247	48.7	235	46.4	25	4.9	507
無回答	5		2		1		8
総計	310		323		36		669

この結果は男性と女性で差が表れたといえるだろう<sup>16</sup>。女性の場合は「自分から話しかけて」（48.7%）と「相手から話しかけられて」（46.4%）の比率はほぼ同水準の数値である。それに比べ、男性の場合はそれらの比率に大きな差がみられ、女性に比べて「相手から話しかけられて」の回答比率が高い。

Q15-3（初対面の人との接し方）と性別の関連をみてみると、男女間で違いはみられない。男性にしても女性にしても、初対面の人に対しては「気後れしてしまう」という人が多い。

	臆することなく話す		気後れしてしまう		無回答		総計
	度数	比率	度数	比率	度数	比率	
1. 男性	54	35.1	89	57.8	11	7.1	154
2. 女性	187	36.9	298	58.8	22	4.3	507
無回答	4		3		1		8
総計	245		390		34		669

Q15-4 「a. 友人とは親しくしたいがあまり深入りされたくない／b. 友人とは腹を割って深く関わり

<sup>15</sup> この関連性は統計的には有意ではない。

<sup>16</sup> この関連性は統計的に有意である ( $\chi^2=5.3, df=1, p<0.05$ )。

たい」と性別をクロス分析してみても、やはり男女間に違いはみられない。男性も女性も「腹を割って深く関わりたい」と考えている人のほうが多い。

	あまり深入りされたくない		腹を割って深く関わりたい		無回答		総計
	度数	比率	度数	比率			
1. 男性	47	30.5	96	62.3	11	7.1	154
2. 女性	160	31.6	319	62.9	28	5.5	507
無回答			7		1		8
総計	207		422		40		669

Q15-5（交友関係の拡大志向）と性別をクロス分析してみると次の表に示される。

	今の友人とより仲良く		友人の輪を広げたい		無回答		総計
	度数	比率	度数	比率			
1. 男性	57	37.0	87	56.5	10	6.5	154
2. 女性	138	27.2	349	68.8	20	3.9	507
無回答	3		4		1		8
総計	198		440		31		669

全体としては、男性も女性も「今の友人も含めてさらに友人の輪を広げたい」のほうが「新しい友人を作るよりは今の友人とさらに仲良くしていきたい」よりも比率が高い。しかし、仔細にみれば、「さらに友人の輪を広げたい」の比率は、男性の56.5%に対して女性は68.8%で、女性のほうが12ポイント以上高く、反対に、「今の友人とさらに仲良くしていきたい」の比率は、男性の37.0%に対して女性は27.2%で、男性のほうが10ポイント近く高い<sup>17</sup>。相対的にみれば、男性が「決まった友人との深い交際」を志向するのに対して、女性は「多くの友人との広い交際」を志向する傾向がより強いといえる。

最後に Q15-6（学内での単独行動に対する抵抗感）と性別との関連をみると、性別で大きな違いはなく、男性も女性も、学内でひとりで行動することに対して「全く抵抗を感じない」とする回答のほうが多い。

	抵抗を感じる		抵抗を感じない		無回答		総計
	度数	比率	度数	比率			
1. 男性	44	28.6	100	64.9	10	6.5	154
2. 女性	158	31.2	326	64.3	23	4.5	507
無回答	4		3		1		8
総計	206		429		34		669

以上の6つのクロス集計の結果を総合すると、一般的な結論としては「男性と女性とでは友人関係に対する考え方に大きな差はない」といえるだろう。とはいえ、その結果は男女間でほぼ完全に一致しているわけではない。微妙な違いを指摘するならば、男性のほうが女性に比べて、新しい友人を作ること、そのために自分から話しかけることに消極的である。友人づきあいのあり方としては、固定的

<sup>17</sup> この関連性は統計的に有意である ( $\chi^2=6.6, df=1, p<0.05$ )。

な友人との深い交際を志向している。その反対に、女性の場合は男性に比べて、さまざまな友人との出会いによって交際が広がっていくことを志向し、同時にまた、自分から話しかけて新しい友人を作ることに積極的である。（石川陽一）

### 就職希望職種

対象者たちは卒業後にどのような職業に就きたいと考えているのだろうか。次の表3は、Q16「あなたは、卒業後にどのような業種や職種に就くことを希望していますか。次の中から1つだけ選んでください」への回答を集計したものである。

	度数	パーセント	有効パーセント
製造・メーカー	9	1.3	1.4
販売・商社・流通	18	2.7	2.7
金融保険	3	0.4	0.5
建設・不動産	4	0.6	0.6
運輸・通信	5	0.7	0.8
食品・外食産業	6	0.9	0.9
情報・IT関連	3	0.4	0.5
マスコミ・出版	73	10.9	11.1
旅行・レジャー産業	29	4.3	4.4
福祉・健康関連	5	0.7	0.8
サービス業	20	3.0	3.0
専門・技術職	19	2.8	2.9
自営・起業	1	0.1	0.2
公務員	111	16.6	16.8
教員（公立・私立）	249	37.2	37.8
その他	24	3.6	3.6
わからない	80	12.0	12.1
無回答	10	1.5	100.0
総計	669	100.0	

やはり教員養成に歴史のある大学だけあって教員を目指している人がきわめて多い（37.8%）。次に公務員が多い（16.8%）。大学が土曜日に公務員試験対策講座を開いていることから、公務員志望の学生が多いことがうかがえる。相対的に民間企業への就職を希望する学生は少ないが、そのなかでは、人文系の大学であることもあって「マスコミ・出版」を希望する学生が多い。また、「わからない」と答えた学生が12.1%と第3順位にあるが、上位の「教員」「公務員」の合計比率（54.6%）と比べると相対的には少ない。もともと教員や公務員を目指して文大に入学した人が多いといえるかもしれない。

（齋藤文也・井川絵美）

性別にみると男女間に大きな違いはみられない<sup>18</sup>。微細な違いを指摘するならば、男性の場合は教員志望者の比率が高く（男性49.0%、女性34.4%）、女性の場合は「マスコミ・出版」の志望者がやや高い（女性12.2%、男性7.7%）。（相沢翔平）

所属学科別にまとめたものが次の表6である。学科ごとに「わからない」を除いた上位2～3位をハイライトで示した。各学科ともに、先に指摘した対象者全体での上位3項目「教員」「公務員」「マスコミ・出版」の組み合わせにほぼ変わりはない。教員養成の専門的課程である「初等教育学科」では、当然ながら「教員」志望者が圧倒的に多数を占めている。教職課程のない「比較文化学科」については、やはり教員志望者が少なく、「旅行・レジャー産業」が第3位にのぼっている。（江尻明徳）

<sup>18</sup> 就職希望職種と性別との関連性は統計的に有意ではない。

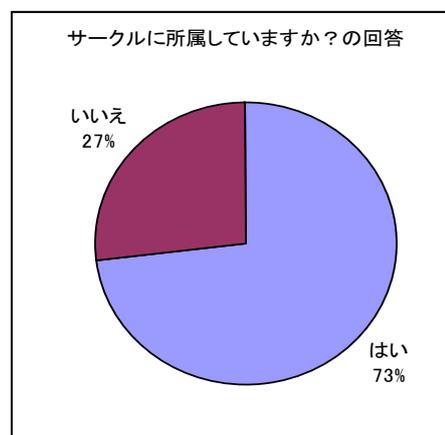
表6 卒業後の希望業種・職種と回答者の所属学科のクロス表

度数		回答者の所属学科					合計
		初等教育学科	国文学科	英文学科	比較文化学科	社会学科	
卒業後の希望業種・職種	製造・メーカー	0	2	0	4	2	8
	販売・商社・流通	3	1	3	6	4	17
	金融保険	0	1	2	0	0	3
	建設・不動産	1	2	0	1	0	4
	運輸・通信	0	0	2	1	2	5
	食品・外食産業	0	3	0	3	0	6
	情報・IT関連	0	2	0	1	0	3
	マスコミ・出版	4	26	15	16	10	71
	旅行・レジャー産業	2	2	9	11	5	29
	福祉・健康関連	1	1	0	1	2	5
	サービス業	0	3	10	6	1	20
	専門・技術職	7	7	1	0	4	19
	自営・起業	0	0	1	0	0	1
	公務員	12	40	11	17	29	109
	教員(公立・私立)	138	36	32	3	37	246
	その他	0	5	6	8	5	24
わからない	18	16	18	17	11	80	
合計	186	147	110	95	112	650	

サークル活動(部活動)

右の図は、Q13「あなたは学内の部活・サークル・同好会などの団体に所属していますか、それとも所属していませんか」に対する回答の集計結果である。この図から、7割以上の学生が部活などのなんらかのサークル活動に参加していることがわかる。(相沢 翔平)

参加状況は属性別に違いがみられるのだろうか。まずは性別でみてみよう。次のクロス表に示されるように、男性のほうが女性よりも部活やサークルに所属している比率が高い<sup>19</sup>。(石川陽一)



	所属している		所属していない		無回答	総計
	度数	比率	度数	比率		
1. 男性	129	83.8	24	15.6	1	154
2. 女性	355	70.0	152	30.0		507
無回答	4		4			8
総計	488		180		1	669

筆者は以前、自宅通学の友人に部活には入っていないのかと聞いてみたところ、「入りたくても帰りの時間を考えると無理だ」という答えが返ってきた。やはり、自宅通学ではサークル活動で帰宅が遅くなったり、活動後にメンバーたちと食事をしたりすると、なかなか難しいと思った。その

<sup>19</sup> この関連性は統計的に有意である ( $\chi^2=12.3, df=1, p<0.01$ )。

予想は正しいのか、クロス分析によって確かめてみたい。次の表2は、Q1（自宅通学・下宿の別）とQ13（学内のサークルなどの団体への所属有無）とのクロス集計の結果である。

Q1	Q13						総計
	所属している		所属していない		無回答		
	度数	比率	度数	比率	度数	比率	
自宅通学	36	49.3	37	50.7		0.0	73
下宿生	451	75.8	143	24.0	1	0.2	595
無回答	1	100.0		0.0		0.0	1
総計	488	72.9	180	26.9	1	0.1	669

これによると、下宿生の場合、サークル・部活などに所属している人の割合（75.8 %）と所属していない人の割合（24.0 %）はおおよそ7:3となっているが、自宅通学生の場合では、それらの比率は50 %前後で拮抗している。この関連性をカイ2乗検定により確かめてみると、検定統計量 $T = 23.43165$ であり、棄却限界は3.84146であるので $T$ は棄却域に入る。よって2つの変数間には関連性があるといえる<sup>20</sup>。やはり、部活やサークルに入ると活動だけでなくその他のつきあいも多くなるので、自宅から通学する学生は活動に参加しにくいであろうと想像される。それでも、この表からわかるように、約半数の自宅通学生が何らかの活動に参加しているということは、参加状況が盛況であることを示していると思う。（北村尚洋・井川絵美）

<sup>20</sup>  $\chi^2 = 23.4, df = 1, p < 0.01$

大学生活で最も重点をおいていることと 学内の部活・サークル・同好会への所属 のクロス表

			学内の部活・サークル・同好会への所属		合計
			所属している	所属していない	
大学生生活で最も重点をおいていること	勉強や研究を第一においた生活	度数 学内の部活・サークル・同好会への所属の%	58 12.0%	44 25.0%	102 15.4%
	部活・サークル・同好会の活動を第一においた生活	度数 学内の部活・サークル・同好会への所属の%	121 24.9%	1 .6%	122 18.5%
	自分の趣味(車・スポーツ・音楽・旅行・パソコン等)を第一にお	度数 学内の部活・サークル・同好会への所属の%	52 10.7%	35 19.9%	87 13.2%
	良き友を得たり豊かな人間関係を結んだりすることを第一においた	度数 学内の部活・サークル・同好会への所属の%	78 16.1%	16 9.1%	94 14.2%
	将来就きたい仕事や就職のために資格取得や大学の学校に通うこ	度数 学内の部活・サークル・同好会への所属の%	17 3.5%	10 5.7%	27 4.1%
	アルバイトをしたりお金をためたりすることを第一においた生活	度数 学内の部活・サークル・同好会への所属の%	18 3.7%	8 4.5%	26 3.9%
	特別に重点をおかず、ほぼほどに組み合わせた生活	度数 学内の部活・サークル・同好会への所属の%	123 25.4%	47 26.7%	170 25.7%
	何となくすぎていく生活	度数 学内の部活・サークル・同好会への所属の%	14 2.9%	12 6.8%	26 3.9%
	その他	度数 学内の部活・サークル・同好会への所属の%	4 .8%	3 1.7%	7 1.1%
	合計	度数 学内の部活・サークル・同好会への所属の%	485 100.0%	176 100.0%	661 100.0%

サークル所属の有無によって学生生活の諸相や友人関係に違いがみられるのだろうか。上の表は、Q14（大学生生活の重点）とQ13（学内のサークルなどの団体への所属有無）をクロス分析した結果である<sup>21</sup>。これをみると、所属の有無にかかわらずもっとも多いのは「特別に重点をおかず、ほぼほどに組み合わせた生活」で、その比率は25.4%、26.7%と、ほぼ同水準である。サークルや部活に所属していない人は、所属している人に比べて学業や自分の趣味に力をいれているようである。所属していない人は、学業や趣味に力を入れるためにサークルや部活に所属しないのかもしれない。サークルや部活に所属している人は、当然のことながら、大学生生活のなかでもサークルや部活などの活動に力を入れる人が多い（24.9%）。また、豊かな人間関係を築くことに重点をおく人（16.1%）も、所属していない人に比べて多い。サークルや部活などに参加することが豊かな人間関係を築くことにもつながっていると考えられる。「何となくすぎていく生活」を選択した人は、サークルや部活への所属の有無にかかわらず少数派であるが、所属していない人（6.8%）のほうが若干、所属している人（2.9%）に比べて比率が高い。部活やサークルに所属している人は、その活動や豊かな人間関係の形成のような、他の学生や人びとと関係を築くことに重点をおいており、所属していない人は、学業や趣味のように自分自身に対する自己啓発や自己実現に重点をおいているようである。（大塚稔宜）

次に、部活・サークルの所属状況と学内での交友行動についてみていこう。仮説としては、同じ部活やサークルに入っている仲間どうしでは、授業の合間や昼食の時間などをともに過ごす人が多いの

<sup>21</sup> これら2つの変数間の関連性は統計的に有意である（ $\chi^2=76.3, df=8, p<0.01$ ）。

ではないだろうか。実際に筆者自身はそうで、昼食の時間は毎週決まった曜日に同じメンバーで学食を利用する。その際に周りを見てみると、毎回同じような集団で昼食をとっている人たちを見かける。そのような生活体験から、筆者は、部活などに所属している人のほうが同じ人と行動する割合が高いという仮説を立てた。次の表は、Q15-1（学内の交友行動の固定度）と Q13（学内のサークルなどの団体への所属有無）をクロス分析したものである。

表 部活動等の所属状況と学内での友人との行動パターンとのクロス表								
Q15_1 学内での友人との行動								
Q13 部活動等に所属しているか	1. いつも同じ人と行動		2. 場合によって異なる人と行動		無回答		総計	
	度数	比率	度数	比率	度数	比率		
1. 所属している	260	53.3	219	44.9	9	1.8	488	
2. 所属していない	113	62.8	64	35.6	3	1.7	180	
無回答					1	100.0	1	
総計	373		283		13		669	

結果は、予想に反して、部活などに所属していない人のほうがいつも同じ人と行動する割合が高かった<sup>22</sup>。（齋藤淳悟）

この結果はどのように解釈できるだろうか。部活などに所属している学生は学内でさまざまな人と行動している。その活動を通して、多くの人と出会えるので学内でも TPO（その場の状況）に応じてさまざまな人と行動することができるのではないか。反対に、部活などに所属していないは多くの人と触れ合う機会が少なく、同じ講義をとっている人となど、狭い範囲の友人と行動をともにしているのではないか。（鶴沼 陵）

別な解釈も可能である。これは、サークルに参加している人は、ある程度サークルと大学内での生活を分けているということであろう。サークルはサークル、学校は学校。その2つの世界によって大学生活が形成されていると思われる。つまり、サークルに参加している人は、サークルと学内でのグループという2つのコミュニティに参加している状態であるといえる。いっぽう、サークルに入っていない人は、学内での交友グループがそのまま大学生活を過ごすうえでの主要なコミュニティとなり、大学生活のなかに多面的なコミュニティをもたない場合が多いので、学内で同じ人と行動する割合が高くなったのであろう。それでも、全体を通して、サークルへの所属の有無にかかわらず「いつも同じ人と行動することが多い」の割合のほうが高いのは、文大生の仲間意識の強さの表れであると思う。

（小野陽一）

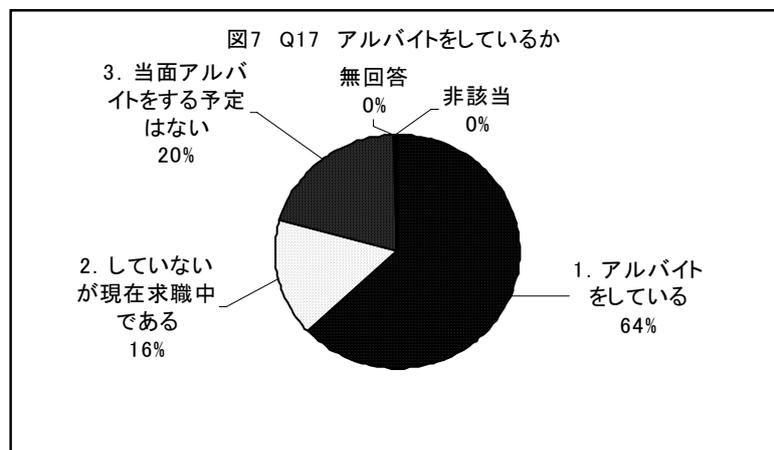
文大の場合、「部活動」というものは基本的に1週間あたりの練習時間が多く、他の活動との掛け持ちというのはなかなか難しい。いっぽう、「サークル活動」のほうは、サークルの種類にもよるが部活動に比べて自由度が高く、他の活動との掛け持ちが比較的容易にできるようだ。したがって部活動に所属している人よりサークル活動に所属している人のほうが交友の幅を広げやすい状況にあり、学内でも多様な友人づきあいができると予想される。追加調査を実施する機会があったならば、「部活動・サークル活動所属の別」という項目を設けてさらに深く分析する必要がありそうだ。

（齋藤淳悟）

## アルバイト

<sup>22</sup> この関連性は統計的に有意である ( $\chi^2=4.8, df=1, p<0.05$ )。

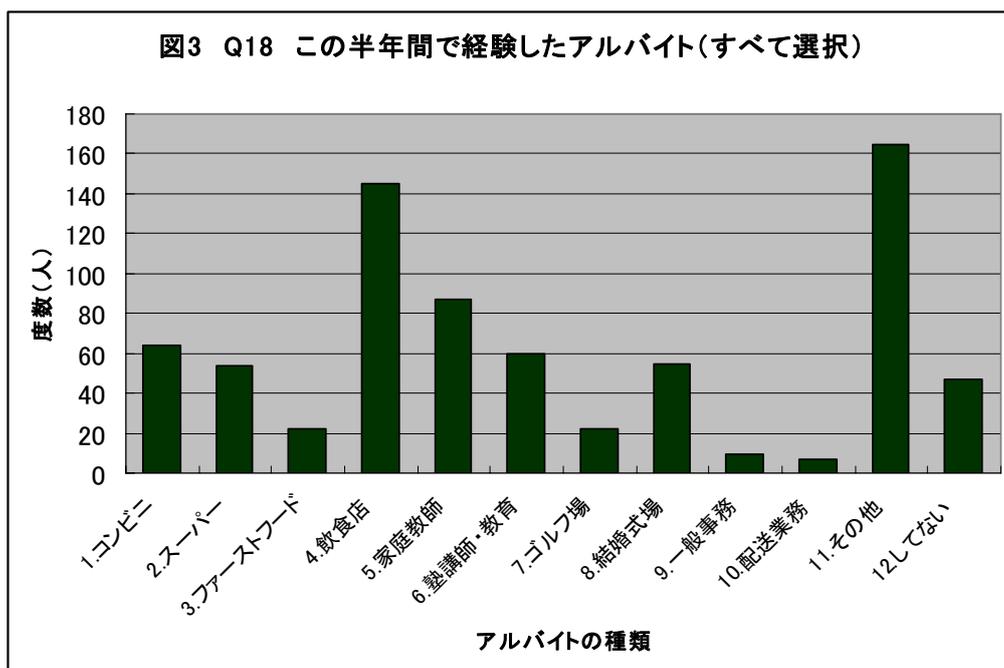
文大生のアルバイト事情についてみていこう。まず、対象者のなかでアルバイトをしている人の割合はどのくらいだろうか。次の図7は、Q17「あなたは現在、アルバイト（単発のものも含めて）をしていますか、それとも、していませんか」の回答の集計結果である。



半数以上の人（63.4%）がアルバイトをしており、目下のところ就業していないが「現在求職中である」という人も2割近く（16.5%）いた。それに対して、「当面、アルバイトをする予定はない」の回答は20.1%の比率であった。設問の設計上、過去の就業経験を把握することはできないが、少なくとも調査実施時点で3分の2に近い対象者がアルバイトをしている。下宿生活をしている人が圧倒的に多い都留文大としては、当然の結果といえるだろう。（大橋美穂）

「する予定はない」という学生が20.1%も占めたのは意外であった。これは、本調査の実施時期も関係しているのではないかと考えられる。12月半ばといえば、卒論や期末レポートなどの追い込みの時期であったり、就職活動の準備が始まる頃であったりするかもしれない。安易にこの時期にアルバイトを始めると、職種によっては長期の休みに帰省できなくなることもあるらしく、時期的にはゆっくりアルバイトをできる状況ではなかったのではないかと考えられる。筆者が耳にしたところでは、学生の求職数に対して大学近辺にはじゅうぶんな雇用機会がないらしい。遠方のバイト先に通うとしたら交通手段の確保がネックになるという事情もある。（黒島美佳）

対象者たちは具体的にどのような職種に就いているのだろうか。次の図3は、Q18「次の中で、この半年間で経験したアルバイトにすべて○をつけてください」の集計結果をグラフ化したものである。



もっとも多かったのは「飲食店（ファースト・フード以外）」で148人（該当者の31.0%）が経験している。都留市内には居酒屋や焼肉店などの飲食店が多いことが理由だと考えられる。次に多いのは「家庭教師」で87人（同18.2%）が経験をしている。これに次いで、「コンビニ」（64人、同13.4%）、「塾講師・その他教育関連」（59人、同12.3%）、「スーパー」「結婚式場」（同数55人、同11.5%）の順となっている。「その他」の自由回答としては「民宿」「ペンション」「ホテル」などの宿泊施設関連や、「富士急ハイランド」「お土産屋」「テーマパーク」などの行楽施設関連のほか、「清掃業」「交通量調査」「カラオケ店」「パチンコ店」などさまざまなものがあった。「家庭教師」と「塾講師・その他教育関連」を合計すると、のべ人数で146人（同30.5%）にのぼる。これは、文大生に将来、教員になることを希望する学生が多いことが関係していると考えられる。ファーストフード店でのアルバイトが少ないのは、都留にはそれらの店が少ないためで、この結果は都留独特のものであるといえる。「その他」の自由回答に関しては、富士五湖周辺の観光産業に関連するものが多いのが特徴的である。なお、本調査の実施時点において「この半年間」には夏休み期間も含まれるので、これらの回答には夏休みに帰省先で経験した職種が含まれている可能性もある。また、帰省先のほか、富士五湖周辺や甲信越地方の民宿やペンションなどに泊り込みでアルバイトに行く人も多いと聞く。（齋藤文也・神田雄太・清水優一）

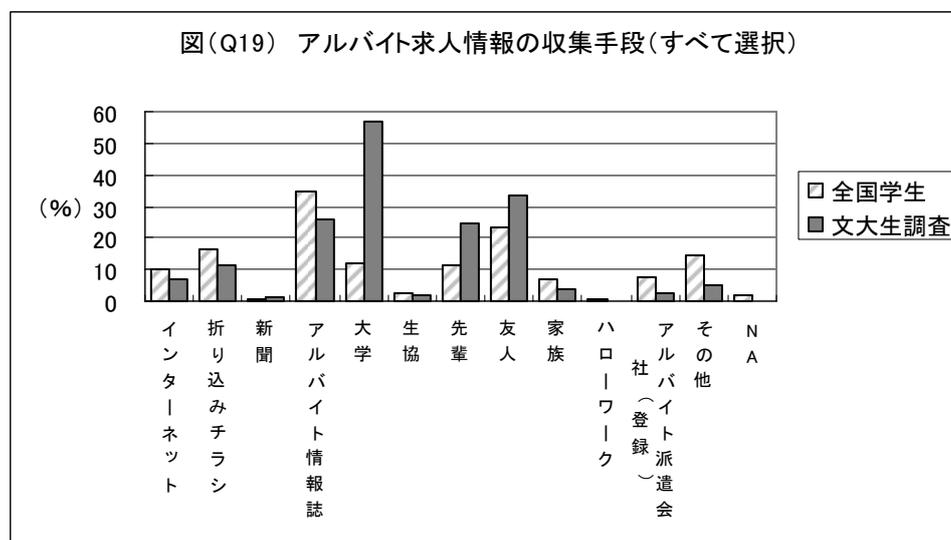
では、それらのアルバイトの仕事をどのような求人情報・手段によって見つけているのだろうか。表16-1は、Q19「アルバイト情報はどのようにして得ていますか。次の中であてはまるものをいくつかも選んでください」の回答の集計結果である。なお、これはQ17（アルバイト就業の有無）で「アルバイトをしている」「していないが、現在求職中である」を選択した人を対象とした設問である。

表16-1 アルバイト求人情報の収集手段(すべて選択)

		応答数		ケースのパーセント
		N	パーセント	
アルバイト求人情報の収集手段(すべて) <sup>a</sup>	インターネット	36	3.9%	6.9%
	折り込みチラシ	60	6.6%	11.5%
	新聞	7	.8%	1.3%
	アルバイト情報誌	137	15.0%	26.2%
	大学	297	32.6%	56.9%
	生協	10	1.1%	1.9%
	先輩	129	14.1%	24.7%
	友人	175	19.2%	33.5%
	家族	20	2.2%	3.8%
	ハローワーク	1	.1%	.2%
	アルバイト派遣会社(登録)	14	1.5%	2.7%
	その他	26	2.9%	5.0%
	合計	912	100.0%	174.7%

a. 2分グループを値1で集計します。

もっとも多いのは、大学の学生課が斡旋する求人情報で(該当者の56.9%)、「友人」(同33.5%)、「アルバイト情報誌」(同26.2%)、「先輩」(24.7%)などがこれに次ぐ。Q19の質問文と選択肢は全国大学生生活協同組合連合会「第39回学生生活実態調査, 2003」<sup>23</sup>における該当設問のそれらを踏襲して設計されている。これによって全国データとの比較を試みたい。その結果を示したものが次の「図(Q19)」である。

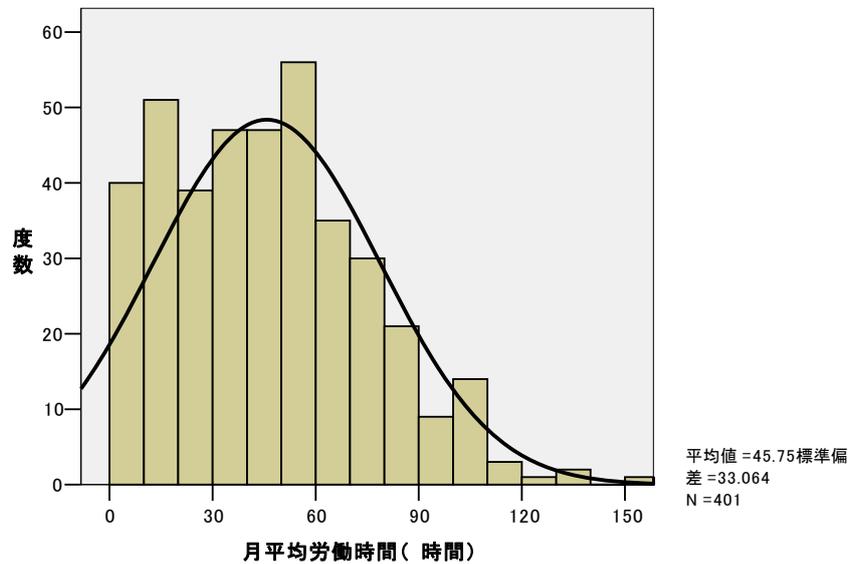


文大生の場合、大学からの斡旋が際立って多い。また、「友人」「先輩」からの人づての紹介が多いのも特徴的である。「アルバイト情報誌」の比率が相対的に低いのは、大学所在地の地域経済環境によるものと思われる。

次に労働時間と給与水準をみてみよう。図16-9は、Q21(アルバイトの月平均労働時間)の集計結果をグラフに表したものである。

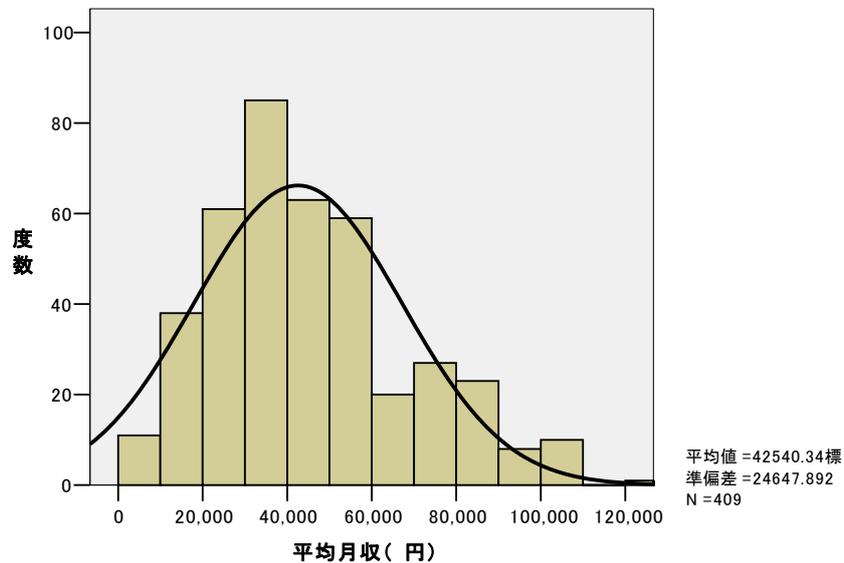
<sup>23</sup> 「第39回学生生活実態調査, 2003」調査実施者：全国大学生生活協同組合連合会、2003年10月実施、調査対象：全国74大学の学生、抽出サンプル数44,601人、回収サンプル数15,542人、回収率34.9%。

図16-9 アルバイトの月平均労働時間



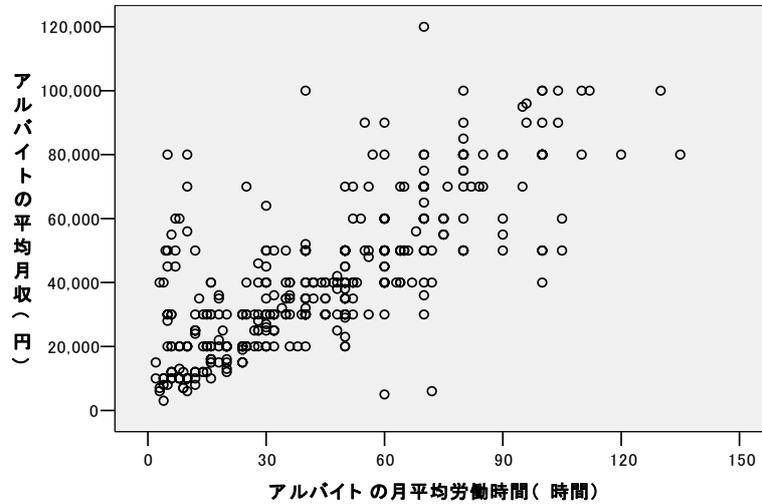
最小値は2時間、最大値は280時間で、平均値は45.8時間（5%トリム平均によると43.2時間）である。もっとも多いのは50～60時間で、次に多いのが10～20時間である。図16-10は、Q20（アルバイトの平均月収）の集計結果をグラフ化したものである。

図16-10 アルバイトの平均月収



最小値は3,000円で、最大値は180,000円である。ちなみに100,000円以上の回答は14ケース（3.2%）あった。平均値は42,540円で、5%トリム平均によると40,918円である。回答数がかつてもっとも多かったもの（最頻値）は「30,000」円（409名中58名）で、これに「40,000」円（53名）、「50,000」円（52名）が続く。労働時間と月収の関係を散布図に描くと図16-11のように示される。（担当教員）

図16-11 アルバイトの月間平均労働時間と平均月収



やはり労働時間も月収も比較的少ない値に集中しているが、一部では100時間をこえる労働時間や100,000円以上の月収を得ている人もいる。労働時間と月収は正の相関関係にあるが、職種によって時給も異なるため、たとえば、一般に高賃金といわれる家庭教師では少ない労働時間で高賃金を得られるが、それ以外の職種では、深夜勤務を除き時給400~700円が相場であり、一定のアルバイト収入を得るためにはそれ相応の労働時間が必要となる。(清水優一)

以下では他の変数との関連性をみていこう。まず、性別ではどうか。表16-2によると、アルバイトの就業有無に男女間での違いはみられない<sup>24</sup>。

表16-2 回答者の性別とアルバイトの有無のクロス表

	アルバイトの有無			合計	
	アルバイトをしている	していないが、現在求職中である	当面、アルバイトをする予定はない		
回答者の性別	男性	度数 95	21	36	152
	回答者の性別の%	62.5%	13.8%	23.7%	
	女性	度数 322	87	97	506
	回答者の性別の%	63.6%	17.2%	19.2%	
合計	度数	417	108	133	658
	回答者の性別の%	63.4%	16.4%	20.2%	

次に学年別ではどうか。表16-3のクロス分析の結果をみると、アルバイトをしている人の割合は2年生でもっとも高く(71.0%)、次いで1年生(61.1%)、3年生(59.7%)、4年生(51.8%)の順となる<sup>25</sup>。大学生活に慣れた2年目を迎えるとアルバイトをする人が1年次に比べてさらに増え、学年が上がり研究活動や就職活動で忙しくなり始めるとアルバイトをする人が減っていく、というストーリーが浮かび上がってくる。本調査が実施された12月半ばは4年生にとって卒業論文の追い込み時期であるが、この時点でも過半数(51.8%)の4年生がアルバイトをしており、23.2%がなおも「求職中」

<sup>24</sup> これら2つの変数間に統計的な有意差はない。

<sup>25</sup> これら2つの変数間の関連性は統計的に有意である( $\chi^2=17.2, df=8, p<0.05$ )。なお、「5年生以上」についてはセル度数が5未満であるので、ここでは分析から除外する。

と回答している。「当面、アルバイトをする予定はない」の回答比率は、2年生を除けば大きな違いはないといえる。（担当教員）

表16-3 回答者の学年とアルバイトの有無のクロス表

	アルバイトの有無			合計	
	アルバイト をしている	していない が、現在求 職中である	当面、アルバ イトをする予 定はない		
回答者の 学年	1年生	度数 124	37	42	203
		回答者の学年の % 61.1%	18.2%	20.7%	
2年生	度数	152	33	29	214
		回答者の学年の % 71.0%	15.4%	13.6%	
3年生	度数	105	23	48	176
		回答者の学年の % 59.7%	13.1%	27.3%	
4年生	度数	29	13	14	56
		回答者の学年の % 51.8%	23.2%	25.0%	
5年生以上	度数	5	2	1	8
		回答者の学年の % 62.5%	25.0%	12.5%	
合計	度数	415	108	134	657
		回答者の学年の % 63.2%	16.4%	20.4%	

部活やサークル所属の有無によってアルバイト就業状況は異なるだろうか。ひとつの仮説としては、部活やサークルに参加していない人のほうが、比較的に時間の余裕があるためアルバイトをしている割合は高いのではないかと考えられる。また別の仮説としては、部活やサークルに所属している人は、部費やコンパ費、運動部によっては遠征費などの出費を準備する必要があるため、部活やサークルに参加している人のほうがアルバイトをしている割合は高い、とも考えられる。次の表5は、Q13（部活・サークル等への参加有無）とQ17（アルバイト就業の有無）をクロス分析した結果である。

表5 部活やサークル、同好会の所属の有無とアルバイトのクロス表

Q13	Q17						無回答	総計
	1.アルバイトを している		2.していないが、 現在求職中である		3.当面、アルバイトを をする予定はない			
	度数	比率	度数	比率	度数	比率		
1.所属している	322	66.0	83	17.0	82	16.8	1	488
2.所属していない	100	55.6	27	15.0	52	28.9	1	180
無回答							1	1
総計	422		110		134		3	669

これによると、部活やサークルに参加している人のほうが「アルバイトをしている」の比率は10%以上高く（66.0%）、参加していない人のほうが「当面、アルバイトをする予定はない」の比率が同じく10%以上高い（28.9%）。「現在求職中」については参加有無にかかわらずほぼ同比率である。また、度数のうえで確認すると、部活やサークルに参加しながらアルバイトもしている人が、669名中322名と半数近くを占めており、多くの学生が学業に加えて部活・サークル活動、アルバイトと多忙な毎日を送っている様子が読み取れる。（齋藤淳悟・大柴有希・江尻明德）

アルバイト就業の有無は自宅通学・下宿の別によって異なるだろうか。一般的に考えると、「下宿生活をしている人は生活費などの負担がかかるため、それを補うために、自宅通学生よりもアルバイトをしている人が多い」という仮説が立てられる。次の表1は、Q1（自宅通学・下宿の別）とQ17（アルバイト就業の有無）をクロス分析した結果である。

Q1	Q17								総計
	している		していないが求職中		していない		無回答		
	度数	比率	度数	比率	度数	比率	度数	比率	
自宅通学	54.0	74.0	5.0	6.8	14.0	19.2	0.0	0.0	73.0
下宿	368.0	61.8	105.0	17.6	119.0	20.0	3.0	0.5	595.0
無回答		0.0		0.0	1.0	100.0		0.0	1.0
総計	422.0	63.1	110.0	16.4	134.0	20.0	3.0	0.4	669.0

これによると、アルバイトを「している」と答えた人の比率は、仮説に反して下宿生（61.8%）よりもむしろ自宅通学生（74.0%）のほうが高い<sup>26</sup>。（大柴有希・神村幸恵）

一見すると、たしかに現在アルバイトをしている人の比率は自宅通学生のほうが高い。しかし、「現在求職中である」を選択した人の比率は、自宅通学生の6.8%に対して下宿生では17.6%と、逆に下宿生のほうが高い。いっぽう、「していない」（「当面、アルバイトをする予定はない」）の比率は、自宅通学生19.2%、下宿生20.0%とほぼ同水準である。ちなみに、「している」と「求職中である」を合計すると、自明ではあるが自宅通学生80.8%、下宿生79.4%とこれも同水準に並ぶ。これらの考察結果をふまえると、アルバイトに対するニーズあるいは必要度の点では、自宅通学生と下宿生とのあいだに違いはないと解釈できるのではないか。下宿生の場合、「現在求職中」の比率が高いのは、都留周辺の地域内ではアルバイト求人の絶対数やそれに関する情報量、求職者の希望条件（勤務時間・時給・立地）を満たすようなアルバイト雇用機会が少ないためだとも考えられるのではないだろうか。

（櫻田俊基・齋藤文也）

下宿生のアルバイト事情をもう少し詳しく分析してみよう。

表16-4 生活資金に占める仕送りの割合とアルバイトの有無のクロス表

			アルバイトの有無			合計
			アルバイト をしている	していない が、現在求 職中である	当面、アルバ イトをする予 定はない	
生活 資金 に占 める 仕送 りの 割合	なし	度数	48	8	5	61
		生活資金に占める 仕送りの割合の%	78.7%	13.1%	8.2%	100.0%
	20%未満	度数	21	5	2	28
		生活資金に占める 仕送りの割合の%	75.0%	17.9%	7.1%	100.0%
	20～39%	度数	31	2	2	35
		生活資金に占める 仕送りの割合の%	88.6%	5.7%	5.7%	100.0%
	40～59%	度数	57	11	13	81
		生活資金に占める 仕送りの割合の%	70.4%	13.6%	16.0%	100.0%
	60～79%	度数	61	1	8	70
		生活資金に占める 仕送りの割合の%	87.1%	1.4%	11.4%	100.0%
	80%以上	度数	149	78	89	316
		生活資金に占める 仕送りの割合の%	47.2%	24.7%	28.2%	100.0%
合計	度数	367	105	119	591	
	生活資金に占める 仕送りの割合の%	62.1%	17.8%	20.1%	100.0%	

下宿生の数は文大生全体の9割弱を占めているのであった（p.233）。では、下宿生のアルバイト就業

<sup>26</sup> これら2つの変数間の関連性は統計的に有意である（ $\chi^2=6.1, df=2, p<0.05$ ）。

の有無は、やはり仕送りの状況から何らかの影響を受けているのだろうか。表 16-4 は、Q5（奨学金を含めた生活資金全体に占める仕送りの割合）とQ17（アルバイト就業の有無）のクロス表である。これによると、アルバイト就業の有無は、大局的にみるならば仕送り比率の「79%以下」と「80%以上」を境に大きく2つの様相にわかれるといえよう。仕送り比率「79%以下」のケースでは「アルバイトをしている」の比率は70～90%の範囲内ではほぼ同様の水準にある。つまり、仕送りの多寡にかかわらず、アルバイトをしている人の割合はほぼ一定で7割以上に達している。いっぽう、仕送り比率「80%以上」のカテゴリでは「アルバイトをしている」の比率は47.2%と半数以下に落ち込み、「求職中である」(24.7%)、「アルバイトをする予定はない」(28.2%)へと分散している<sup>27</sup>。仕送り比率のカテゴリ別に、アルバイト月収(Q20)の測定データの平均値を算出してみると(表 16-5)、

**表16-5 仕送り比率別のアルバイト月収平均額**  
(単位:円, 下宿生)

仕送り比率	単純平均	5%トリム平均
なし	60,234	57,589
20%未満	56,700	56,333
20～39%	43,548	42,348
40～59%	42,821	40,873
60～79%	41,102	40,151
80%以上	33,660	32,410

仕送り比率が高いほどアルバイト月収の平均値は低く、逆に、仕送り比率が低いほどより多くのアルバイト収入を確保していることが確認される。(清水優一・大橋美穂・小長谷泰右)

アルバイトの稼業は学生生活にどのような影響をもたらしているだろうか。生活時間への影響を、まずは睡眠時間との関係でみてみよう。やはり大学生であるからには、授業のある時間帯は勤務が困難であり、週末にあてるか、もしくは平日であれば夕方からの勤務や深夜のアルバイトをしている人が多いと思われる。実際、筆者の周りでもそういう人がたくさんいる。おそらく、アルバイトをしている人のほうが睡眠時間は少ないのではないだろうか。表 16-6 は、Q17（アルバイト就業の有無）とQ10（平均睡眠時間）のクロス表である。Q10のデータについては単純集計の結果から「5.5時間以下」「6.0～7.0時間」「7.5時間以上」の3カテゴリに集約して分析した。これによると、仮説と異なり、アルバイト就業の有無による大きな違いはみられなかった<sup>28</sup>。(佐藤秀幸)

**表16-6 アルバイトの有無と平均睡眠時間(3分割)のクロス表**

			平均睡眠時間(3分割)			合計
			0.0～5.5時間	6.0～7.0時間	7.5時間以上	
アルバイトの有無	アルバイトをしている	度数	75	246	98	419
		アルバイトの有無の%	17.9%	58.7%	23.4%	100.0%
	していないが、現在求職中である	度数	14	66	28	108
		アルバイトの有無の%	13.0%	61.1%	25.9%	100.0%
	当面、アルバイトをする予定はない	度数	22	84	28	134
		アルバイトの有無の%	16.4%	62.7%	20.9%	100.0%
合計		度数	111	396	154	661
		アルバイトの有無の%	16.8%	59.9%	23.3%	100.0%

表 16-7 は、Q17（アルバイト就業の有無）とQ11（テレビ視聴平均時間）のクロス表である。Q11

<sup>27</sup> これら2つの変数間の関連性は統計的に有意である ( $\chi^2 = 73.9, df = 10, p < 0.01$ )。

<sup>28</sup> この関連性は統計的に有意ではない。

のデータについては、同様に単純集計の結果から「1.5 時間以下」「2.0～3.0 時間」「3.5 時間以上」の3カテゴリーに集約して分析した。

表16-7 アルバイトの有無とテレビ視聴平均時間(3分割)のクロス表

			テレビ視聴平均時間(3分割)			合計
			0.0～1.5時間	2.0～3.0時間	3.5時間以上	
アルバイトの有無	アルバイトをしている	度数 アルバイトの有無の%	119 28.6%	203 48.8%	94 22.6%	416 100.0%
	していないが、現在求職中である	度数 アルバイトの有無の%	16 14.8%	60 55.6%	32 29.6%	108 100.0%
	当面、アルバイトをする予定はない	度数 アルバイトの有無の%	38 28.6%	66 49.6%	29 21.8%	133 100.0%
合計	度数 アルバイトの有無の%	173 26.3%	329 50.1%	155 23.6%	657 100.0%	

分析にあたり、「アルバイトをしている人は自由な時間が少ないためテレビ視聴時間は少ない」という仮説を立てたのだが、結果をみると、「アルバイトをしている」人のテレビ視聴時間は、「当面、アルバイトをする予定はない」と答えた人のそれとほぼ等しい傾向を示している。むしろ、「現在求職中である」と答えた人のテレビ視聴時間が、他の2つとはやや異なった傾向を示しており、総じて長いといえる<sup>29</sup>。また、アルバイトをしている学生も、その7割以上(71.4%)が1日に2時間以上テレビを見ていることがわかる。(神村幸恵)

表16-8は、Q17(アルバイト就業の有無)とQ14(大学生活の重点)をクロス分析した結果である。

表16-8 アルバイトの有無と大学生活で最も重点をおいていることのクロス表

			アルバイトの有無			合計
			アルバイトをしている	していないが、現在求職中である	当面、アルバイトをする予定はない	
大学生活で最も重点をおいていること	勉強や研究を第一においた生活	度数 アルバイトの有無の%	49 11.7%	20 18.3%	33 24.8%	102 15.5%
	部活・サークル・同好会の活動を第一においた生活	度数 アルバイトの有無の%	80 19.1%	25 22.9%	16 12.0%	121 18.3%
	自分の趣味(車・スポーツ・音楽・旅行・パソコン等)を第一においた生活	度数 アルバイトの有無の%	51 12.2%	10 9.2%	26 19.5%	87 13.2%
	良き友を得たり豊かな人間関係を結んだりすることを第一においた生活	度数 アルバイトの有無の%	71 17.0%	11 10.1%	12 9.0%	94 14.2%
	将来就きたい仕事や就職のために資格取得や大学の単位取得を第一においた生活	度数 アルバイトの有無の%	16 3.8%	4 3.7%	7 5.3%	27 4.1%
	アルバイトをしたりお金をためたりすることを第一においた生活	度数 アルバイトの有無の%	26 6.2%	0 .0%	0 .0%	26 3.9%
	特別に重点をおかず、ほどほどに組み合わせた生活	度数 アルバイトの有無の%	108 25.8%	29 26.6%	33 24.8%	170 25.8%
	何となくすぎていく生活	度数 アルバイトの有無の%	11 2.6%	10 9.2%	5 3.8%	26 3.9%
	その他	度数 アルバイトの有無の%	6 1.4%	0 .0%	1 .8%	7 1.1%
	合計	度数 アルバイトの有無の%	418 100.0%	109 100.0%	133 100.0%	660 100.0%

就業状況にかかわらず、「ほどほどに組み合わせた生活」の回答が25%前後でもっとも高い比率を占めているが、それ以外の項目でみると、アルバイトをしている人は、大学生活の重点として「部

<sup>29</sup> これは10%水準で統計的な有意差である ( $\chi^2=9.3, df=4, p<0.1$ )。

活・サークル」(19.1%)や「人間関係」(17.0%)を挙げている割合が高い。「求職中」の人では「部活・サークル」(22.9%)や「勉強・研究」(18.3%)の比率が高い。また、「当面、アルバイトをする予定はない」と答えた人では、「ほどほどに組み合わせた生活」と同比率で「勉強・研究」(24.8%)が第1順位を占め、「趣味」(19.5%)がこれに次ぐ<sup>30</sup>。

表16-9 大学生活で最も重点をおいていることとアルバイトの有無のクロス表

			アルバイトの有無			合計
			アルバイトをしている	していないが、現在求職中である	当面、アルバイトをする予定はない	
大学生生活で最も重点をおいていること	勉強や研究を第一においた生活	度数 大学生生活で最も重点をおいていることの%	49 48.0%	20 19.6%	33 32.4%	102 100.0%
	部活・サークル・同好会の活動を第一においた生活	度数 大学生生活で最も重点をおいていることの%	80 66.1%	25 20.7%	16 13.2%	121 100.0%
	自分の趣味(車・スポーツ・音楽・旅行・パソコン等)を第一にお	度数 大学生生活で最も重点をおいていることの%	51 58.6%	10 11.5%	26 29.9%	87 100.0%
	良き友を得たり豊かな人間関係を結んだりすることを第一においた	度数 大学生生活で最も重点をおいていることの%	71 75.5%	11 11.7%	12 12.8%	94 100.0%
	将来就きたい仕事や就職のために資格取得や大学外の学校に通うこ	度数 大学生生活で最も重点をおいていることの%	16 59.3%	4 14.8%	7 25.9%	27 100.0%
	アルバイトをしたりお金をためたりすることを第一においた生活	度数 大学生生活で最も重点をおいていることの%	26 100.0%	0 .0%	0 .0%	26 100.0%
	特別に重点をおかず、ほどほどに組み合わせた生活	度数 大学生生活で最も重点をおいていることの%	108 63.5%	29 17.1%	33 19.4%	170 100.0%
	何となくすぎていく生活	度数 大学生生活で最も重点をおいていることの%	11 42.3%	10 38.5%	5 19.2%	26 100.0%
	その他	度数 大学生生活で最も重点をおいていることの%	6 85.7%	0 .0%	1 14.3%	7 100.0%
	合計	度数 大学生生活で最も重点をおいていることの%	418 63.3%	109 16.5%	133 20.2%	660 100.0%

独立変数と従属変数を入れ替えて分析してみると(表16-9)、「アルバイトやお金をためること」を学生生活の重点としている人が、実際にアルバイトをしているのは当然としても、「人間関係」や「部活・サークル」を重点に挙げている人は、アルバイトをしている割合が高い(それぞれ75.5%、66.1%)。また、「部活・サークル」を重点に挙げている人に関しては「求職中」である割合(20.7%)も高い。学生がアルバイトをする理由として、サークルや人間関係などの人づきあいに費用がかかるということがそのひとつに考えられそうだ。(大橋美穂・担当教員)

アルバイトをしている人に焦点を当てて、実際のコミットメントの度合をベースにして分析してみよう。ここではアルバイトの月収をその指標として用いることにする。表16-10は、Q20(アルバイトの平均月収)とQ14(大学生生活の重点)のクロス表である。アルバイト月収のデータについては、「30,000円未満」「30,000～49,000円」「50,000円以上」の3カテゴリに集約したうえで集計した。カテゴリごとに上位3項目をハイライト表示させた。

<sup>30</sup> これら2つの変数間の関連性は統計的に有意である( $\chi^2=54.9, df=16, p<0.01$ )。

表16-10 アルバイトの平均月収(3分割)と大学生活で最も重点をおいていること のクロス表

		アルバイトの平均月収(3分割)			合計	
		30,000円未満	30,000～49,000円	50,000円以上		
大学生活で最も重点をおいていること	勉強や研究を第一においた生活	度数 アルバイトの平均月収(3分割)の%	16 14.7%	16 10.9%	15 10.1%	47 11.6%
	部活・サークル・同好会の活動を第一においた生活	度数 アルバイトの平均月収(3分割)の%	28 25.7%	31 21.1%	19 12.8%	78 19.3%
	自分の趣味(車・スポーツ・音楽・旅行・パソコン等)を第一にお	度数 アルバイトの平均月収(3分割)の%	8 7.3%	23 15.6%	17 11.4%	48 11.9%
	良き友を得たり豊かな人間関係を結んだりすることを第一においた	度数 アルバイトの平均月収(3分割)の%	16 14.7%	28 19.0%	26 17.4%	70 17.3%
	将来就きたい仕事や就職のために資格取得や大学の学校に通う	度数 アルバイトの平均月収(3分割)の%	6 5.5%	3 2.0%	4 2.7%	13 3.2%
	アルバイトをしたりお金をためたりすることを第一においた生活	度数 アルバイトの平均月収(3分割)の%	0 .0%	5 3.4%	21 14.1%	26 6.4%
	特別に重点をおかず、ほどほどに組み合わせた生活	度数 アルバイトの平均月収(3分割)の%	33 30.3%	33 22.4%	41 27.5%	107 26.4%
	何となくすぎていく生活	度数 アルバイトの平均月収(3分割)の%	2 1.8%	5 3.4%	4 2.7%	11 2.7%
	その他	度数 アルバイトの平均月収(3分割)の%	0 .0%	3 2.0%	2 1.3%	5 1.2%
	合計	度数 アルバイトの平均月収(3分割)の%	109 100.0%	147 100.0%	149 100.0%	405 100.0%

各カテゴリともに、もっとも比率が高いのは「ほどほどに組み合わせた生活」である。ここでは、それ以外の項目に着目してみよう。アルバイト月収の測定データの平均値は42,540円、5%トリム平均によると40,918円であった(p.260)。まず、平均的なコミットメントを示す「30,000～49,000円」のカテゴリをみると、第2順位にあるのは「部活・サークル」(21.1%)で、「人間関係」(19.0%)がこれに次ぐ。より軽度のコミットメントを意味する「30,000円未満」のカテゴリでは、第2順位はやはり「部活・サークル」(25.7%)であるが、第3順位には「人間関係」と「勉強・研究」が同比率(14.7%)で並ぶ。いっぽう、「50,000円以上」のカテゴリでは、第2順位を占めるのは「人間関係」(17.4%)であり、「アルバイトやお金をためること」(14.1%)がこれに続く<sup>31</sup>。

軽微なコミットメント(「30,000円未満」のカテゴリ)にとどまる者のなかには、やはり「勉強・研究」に重点をおく層が一定の割合で含まれている。しかし、他のカテゴリと比較してもその違いはわずかで、5%以内の差に過ぎない。また、その比率は14.7%と、高い水準ではない。

アルバイトに深くコミットしている学生(「50,000円以上」のカテゴリ)に目を転じると、学生生活の重点は「勉強・研究」(10.1%)、「部活・サークル」(12.8%)、「人間関係」(11.4%)などへと拡散し、「アルバイトやお金をためること」の比率(14.1%)が、他のカテゴリの場合と比べて際立って高い。とはいえ、その比率は、「勉強・研究」「部活・サークル」「人間関係」のそれと近似した水準にあり、全体としてみれば、「アルバイトに深くコミットしている学生の大学生活には、より多様なバリエーションがみられる」と結論付けられるだろう。また、「アルバイトの収入が多い人は、勉強や研究に

<sup>31</sup> これら2つの変数間の関連性は統計的に有意である( $\chi^2=41.1, df=16, p<0.01$ )。

はあまり力を入れていないのではないか」という仮説のもとに表 16-10 の結果をみると、「勉強や研究を第一においた生活」の比率は、「30,000 円未満」で 14.7 %、「30,000～49,000 円」で 10.9 %であるのに対して「50,000 円以上」では 10.1 %と大差はなく、この仮説は棄却される。（神田雄太・担当教員）

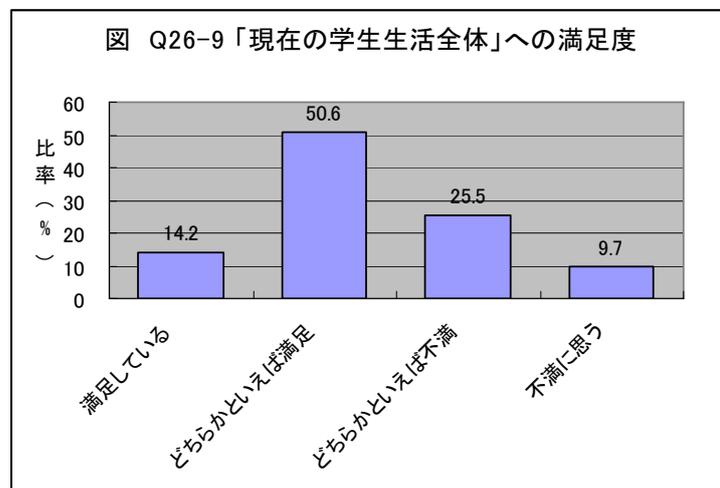
### 16.3.3 文大生の生活意識

#### 生活満足度

Q26 では「次にあげる各項目について、あなたは満足していますか、それとも不満ですか」の質問文により、「現在の生活程度」「同性の友人関係」「異性の友人関係」「いまの住まい」「家庭の人間関係」「現在の余暇の時間量」「余暇の過ごし方」「いま住んでいる土地」「現在の学生生活全体」の 9 項目について、それぞれの満足度を「満足している」「どちらかといえば満足」「どちらかといえば不満」「不満に思う」の 4 選択肢によって尋ねている。

まず、これらのなかでも総合的な生活満足度を問う設問である Q26-9

（現在の学生生活全体）の集計結果をみてみよう（右の図）。「満足している」（14.2 %）、「どちらかといえば満足」（50.6 %）を合計すると、約 3 分の 2（64.8 %）の対象者が学生生活全体に満足している。いっぽう、「どちらかといえば不満」の回答は 25.5 %で、「不満に思う」は 9.7 %の比率である。学生生活全体に対する満足度は総じて高いといえる。（井上真伊子）



Q26-1～8 のより具体的な項目についてみてみよう。

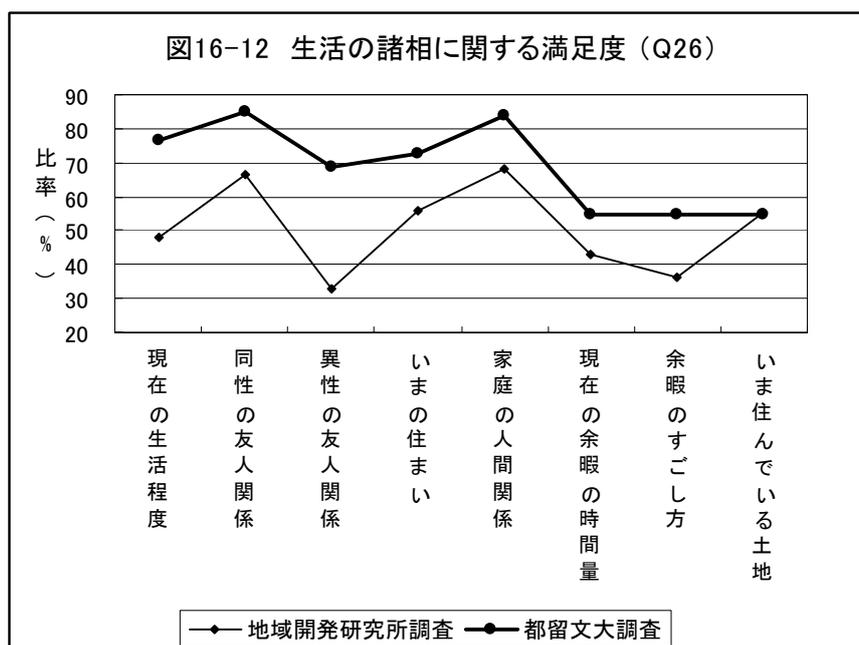


図 16-12 は、各項目の「満足している」「どちらかといえば満足」の合計比率を算出し、それを折れ線（太線）で結んだものである。Q26-1～8 では、地域開発研究所「地方都市青年層のライフスタイルと文化行動」調査<sup>32</sup>（総合研究開発機構編 1983）における該当設問と質問文および選択肢を共通化させることによって、文大生のデータを他の地方都市の青年層とのあいだで比較することが可能になるよう設計した。同調査によるデータを同様の集計方法でまとめた結果を図 16-12 内に併記した。同調査の対象者は山形県内 2 市および宮崎県内 2 市の居住者によって構成されているので、生活環境としては、都留文科大学のある都留市と共通点が多いと考えられる。ただし、その対象者は大学生に限定されているわけではないので、単純に比較することはできない。図 16-12 より、一見して明らかであるのは、文大の対象者は地域開発研究所調査の対象者と比べ、全般にわたって満足度が高いことである。文大のデータを詳しくみてみると、「現在の生活程度」「同性の友人関係」「いまの住まい」「家庭の人間関係」では、「満足している」「どちらかといえば満足」の合計比率が 70% を上回り、とりわけ「同性の友人関係」（85.2%）「家庭の人間関係」（83.8%）では 80% を超えている。いっぽう、「現在の余暇の時間量」「余暇のすごし方」「いま住んでいる土地」に関しては満足度が相対的に低いが、それらの比率はいずれも 50% 以上である。地域開発研究所調査データとの比較でみるならば、文大生の場合、とくに「現在の生活程度」と「異性の友人関係」の項目で満足度の高さが際立っている。反対に、「いま住んでいる土地」に対する満足比率では、文大生 54.6%、地域開発研究所調査 55.1% と、例外的にほぼ同比率に並ぶ。以上の結果をまとめると、文大の対象者たちは人間関係や生活程度、住居環境の点で満足度が高く、とくに、同性・異性を含めた友人や家族との人間関係に関してはきわめて満足度が高いことが特筆される。（担当教員）

学生生活全体の満足度を決める要素となっているものは何だろうか。そのことを Q26-2（同性の友人関係の満足度）と Q26-9（学生生活全体の満足度）をクロスさせることによって、考察してみたい。

表 16-11 同性の友人関係への満足度(2分割)と現在の学生生活全体への満足度(2分割)のクロス表

			現在の学生生活全体への満足度(2分割)		合計
			満足	不満	
同性の友人関係への満足度(2分割)	満足	度数	398	169	567
		同性の友人関係への満足度(2分割)の%	70.2%	29.8%	100.0%
	不満	度数	29	63	92
		同性の友人関係への満足度(2分割)の%	31.5%	68.5%	100.0%
合計		度数	427	232	659
		同性の友人関係への満足度(2分割)の%	64.8%	35.2%	100.0%

表 16-11 によると、同性の友人関係に満足している人は、学生生活全体に対しても満足している割合が高く、同性の友人関係に不満をもっている人は、学生生活全体に対しても不満を感じている割合が高い<sup>33</sup>。学生生活全体の満足度を決定づける要因としては、同性の友人関係に対する満足度が大きなウエイトを占めていることがわかる。では、異性との友人関係に対してはどうかだろうか。表 16-12

<sup>32</sup> 「地方都市青年のライフスタイルと文化行動」調査主体：地域開発研究所、1982年7月20日～8月31日実施、調査対象：山形市、尾花沢市、都城市、串間市に居住する満18～29歳の者、有効サンプル数3,451票、有効回収率76.6%。

<sup>33</sup> この関連性は統計的に有意である ( $\chi^2=51.9, df=1, p<0.01$ )。

は、Q26-2（同性の友人関係の満足度）とQ26-3（異性の友人関係の満足度）のクロス表である。

表16-12 同性の友人関係への満足度(2分割)と異性の友人関係への満足度(2分割)のクロス表

		異性の友人関係への満足度(2分割)		合計
		満足	不満	
同性の友人関係への満足度(2分割)	満足	度数 423 同性の友人関係への満足度(2分割)の % 74.2%	147 25.8%	570 100.0%
	不満	度数 37 同性の友人関係への満足度(2分割)の % 40.2%	55 59.8%	92 100.0%
合計		度数 460 同性の友人関係への満足度(2分割)の % 69.5%	202 30.5%	662 100.0%

表 16-11 の結果と同様に、同性の友人関係に満足している人は、異性との友人関係に対しても満足している割合が高く、同性の友人関係に不満をもっている人は、異性との友人関係に対しても不満を感じている割合がやや高い<sup>34</sup>。同性との友人関係にうまくいっていない人は異性との友人関係もあまりうまくいっていない可能性があるようだ。（井口健太郎）

学生生活の満足度は性別によって異なるだろうか。表 16-13 は、対象者の性別（Q36）とQ26-9（学生生活全体の満足度）のクロス表である。これによると、学生生活全体の満足度に男女間で大きな違いはみられない<sup>35</sup>。（担当教員）

表16-13 回答者の性別と現在の学生生活全体への満足度(2分割)のクロス表

		現在の学生生活全体への満足度(2分割)		合計
		満足	不満	
回答者の性別	男性	度数 105 回答者の性別の % 69.5%	46 30.5%	151 100.0%
	女性	度数 320 回答者の性別の % 63.4%	185 36.6%	505 100.0%
合計		度数 425 回答者の性別の % 64.8%	231 35.2%	656 100.0%

友人関係に対する満足度ではどうであろうか。次の表 1 は、性別と Q26-2（同性の友人関係の満足度）のクロス表である。

表1 性別と「同性の友人関係」のクロス表

Q36	Q26_2 (2分割)						総計
	満足		不満		無回答		
	度数	比率	度数	比率	度数	比率	
男性	122	79.2	30	19.5	2	1.3	154
女性	444	87.6	62	12.2	1	0.2	507
無回答	4	50.0		0.0	4	50.0	8
総計	570	85.2	92	13.8	7	1.0	669

<sup>34</sup> この関連性は統計的に有意である ( $\chi^2=43.2, df=1, p<0.01$ )。

<sup>35</sup> これは統計的に有意差ではない。

同性の友人関係に対して満足している人は男女のいずれでも 80%弱以上の比率を占めているが、とりわけ女性の場合は、その比率は 87.6%に達しており、ほとんどの女子学生が同性の友人関係に満足していることがわかる<sup>36</sup>。

Q26.3						
Q36	1.満足		2.不満		無回答	総計
	度数	比率	度数	比率		
1.男性	105	68.2	48	31.2	1	154
2.女性	352	69.4	154	30.4	1	507
無回答	4				4	8
総計	175		163		6	669

Q26-3 (異性の友人関係の満足度) との関連性をみると (上の表 2)、男女間で違いはみられない。

(小波智志・江尻明徳)

アルバイトの月収の多寡 (アルバイトへのコミットメントの程度) は、学生生活の満足度とどのような関連性にあるだろうか。アルバイトをするということは、何らかの理由でお金が足りないと感じているということの意味するので、そのアルバイトの月収が高ければ高いほど余暇の過ごし方や普段の生活に「満足している」と回答する人が多くなるのではないだろうか。

表16-13アルバイトの平均月収(3分割)と現在の学生生活全体への満足感のクロス表

			現在の学生生活全体への満足感				合計
			満足している	どちらかといえば満足	どちらかといえば不満	不満に思う	
アルバイトの平均月収(3分割)	30,000円未満	度数	24	52	22	12	110
		アルバイトの平均月収(3分割)の%	21.8%	47.3%	20.0%	10.9%	100.0%
	30,000~49,000円	度数	17	69	48	12	146
		アルバイトの平均月収(3分割)の%	11.6%	47.3%	32.9%	8.2%	100.0%
	50,000円以上	度数	15	81	36	15	147
		アルバイトの平均月収(3分割)の%	10.2%	55.1%	24.5%	10.2%	100.0%
合計		度数	56	202	106	39	403
		アルバイトの平均月収(3分割)の%	13.9%	50.1%	26.3%	9.7%	100.0%

表 16-13 は、アルバイトの月収 (Q21 のデータを金額に応じて 3 カテゴリに集約したもの) と Q26-9 (学生生活全体の満足度) をクロス分析した結果である。これを見ると、たしかにアルバイトに深くコミットしている人 (「50,000 円以上」のカテゴリ) では、「どちらかといえば満足」の比率 (55.1%) が高いのであるが、「アルバイトの月収が高ければ高いほど、それに応じて満足度が高い」という解釈は適切ではないといえる。より精確に分析してみると、いずれの金額カテゴリでも、「どちらかといえば満足」がもっとも多く、50%前後の比率であることに変わりはないが、それ以外の傾向として「30,000~49,000 円」の中位カテゴリでは「どちらかといえば不満」の比率 (32.9%) がやや高いこと、そして、軽微なコミットにとどまっている人 (「30,000 円未満」のカテゴリ) は、むしろ、明確な満足感を表明する傾向が強い (21.8%) ことなどが指摘できる。

<sup>36</sup> この関連性は統計的に有意である ( $\chi^2=5.4, df=1, p<0.05$ )。

表16-14 アルバイトの平均月収(3分割)と現在の余暇の時間量への満足感のクロス表

			現在の余暇の時間量への満足感				合計
			満足している	どちらかといえは満足	どちらかといえは不満	不満に思う	
アルバイトの平均月収(3分割)	30,000円未満	度数	26	33	33	18	110
		アルバイトの平均月収(3分割)の%	23.6%	30.0%	30.0%	16.4%	100.0%
	30,000～49,000円	度数	31	50	46	19	146
		アルバイトの平均月収(3分割)の%	21.2%	34.2%	31.5%	13.0%	100.0%
	50,000円以上	度数	17	37	52	42	148
		アルバイトの平均月収(3分割)の%	11.5%	25.0%	35.1%	28.4%	100.0%
合計		度数	74	120	131	79	404
		アルバイトの平均月収(3分割)の%	18.3%	29.7%	32.4%	19.6%	100.0%

アルバイトの月収が多い人ほど、余暇時間の確保に不満を感じる割合が高いのは当然に予想された結果であるが(表 16-14)<sup>37</sup>、表 16-15 の、アルバイトの月収とQ26-7(余暇の過ごし方の満足度)とのクロス分析結果をみると、余暇の過ごし方に対する満足度には、アルバイト月収の多寡による違いはないといえる<sup>38</sup>。

表16-15 アルバイトの平均月収(3分割)と余暇の過ごし方への満足感のクロス表

			余暇の過ごし方への満足感				合計
			満足している	どちらかといえは満足	どちらかといえは不満	不満に思う	
アルバイトの平均月収(3分割)	30,000円未満	度数	23	45	31	11	110
		アルバイトの平均月収(3分割)の%	20.9%	40.9%	28.2%	10.0%	100.0%
	30,000～49,000円	度数	24	55	53	14	146
		アルバイトの平均月収(3分割)の%	16.4%	37.7%	36.3%	9.6%	100.0%
	50,000円以上	度数	27	49	48	23	147
		アルバイトの平均月収(3分割)の%	18.4%	33.3%	32.7%	15.6%	100.0%
合計		度数	74	149	132	48	403
		アルバイトの平均月収(3分割)の%	18.4%	37.0%	32.8%	11.9%	100.0%

ここまでの分析をふまえると、アルバイトと学生生活の満足度との関連性については次のように結論づけられるだろう。アルバイトの月収が多い人は学生生活全体に対してやや高い満足感を示す傾向にあるが、その関連性は直線的な関係ではない。月収の少ないグループでも、むしろ明確な満足感を示す人の割合は高い。アルバイトの月収が多い人ほど、余暇時間の確保に不満を感じる傾向にある。余暇の過ごし方への満足度については、アルバイトとの関連はみられない。(大橋美穂・担当教員)

「学生生活の重点」と満足度との関連性はどうかであろうか。表 16-16 は、Q14(大学生生活の重点)とQ26-9(学生生活全体の満足度)のクロス表である。これによると、「人間関係」を大学生生活の重点にしている人は、学生生活に満足している割合(77.2%)がとくに高い。また、「部活・サークル」を重点におくグループも「満足」の比率(68.6%)が相対的にやや高い。反対に、自然に理解されることではあるが、「将来の仕事や就職」「アルバイトやお金をためること」を重点とする人では、「満足」

<sup>37</sup> この関連性は統計的に有意である ( $\chi^2=18.5, df=6, p<0.01$ )。

<sup>38</sup> この関連性に統計的な有意差はみられない。

と「不満」の比率がほぼ互角となり、「なんとなくすぎていく生活」では、明らかに満足度が低い。文大生にとっては、部活・サークル活動を通じての機会を含めて、濃密な友人関係や豊かな人間関係が学生生活に満足感をもたらす大きな要因となっていることが、改めて確認される。（担当教員）

表16-16 大学生生活で最も重点をおいていることと現在の学生生活全体への満足度(2分割)の対比表

			現在の学生生活全体への満足度(2分割)		合計
			満足	不満	
大学生生活で最も重点をおいていること	勉強や研究を第一においた生活	度数 大学生生活で最も重点をおいていることの%	63 62.4%	38 37.6%	101 100.0%
	部活・サークル・同好会の活動を第一においた生活	度数 大学生生活で最も重点をおいていることの%	83 68.6%	38 31.4%	121 100.0%
	自分の趣味(車・スポーツ・音楽・旅行・パソコン等)を第一にお	度数 大学生生活で最も重点をおいていることの%	54 63.5%	31 36.5%	85 100.0%
	良き友を得たり豊かな人間関係を結んだりすることを第一においた	度数 大学生生活で最も重点をおいていることの%	71 77.2%	21 22.8%	92 100.0%
	将来就きたい仕事や就職のために資格取得や大学外の学校に通うこ	度数 大学生生活で最も重点をおいていることの%	15 55.6%	12 44.4%	27 100.0%
	アルバイトをしたりお金をためたりすることを第一においた生活	度数 大学生生活で最も重点をおいていることの%	11 45.8%	13 54.2%	24 100.0%
	特別に重点をおかず、ほどほどに組み合わせた生活	度数 大学生生活で最も重点をおいていることの%	113 66.9%	56 33.1%	169 100.0%
	何となくすぎていく生活	度数 大学生生活で最も重点をおいていることの%	9 34.6%	17 65.4%	26 100.0%
	その他	度数 大学生生活で最も重点をおいていることの%	4 57.1%	3 42.9%	7 100.0%
	合計	度数 大学生生活で最も重点をおいていることの%	423 64.9%	229 35.1%	652 100.0%

## 社会意識

文大生の社会観や社会的価値意識をみていこう。Q24では「次にあげる考え方についてあなたご自身のお考えをお聞かせください。なお、あなたに該当しないことでも、その立場に立ってお答えください」の質問文により、6項目の価値観について、それぞれに対する賛否を「まったくそう思う」「そう思う」「どちらともいえない」「そうは思わない」「まったくそうは思わない」の5尺度によって尋ねている。取り上げたのは以下の6項目である。

Q24-1「家族の者に多少負担になっても、自分の納得のいく生き方をしたい」（納得の生き方）

Q24-2「困っている人が近くにいたら放っておけない」（人助け意識）

Q24-3「何かをするときは、これまでの慣習にとらわれずに決めたい」（革新志向）

Q24-4「目上の人の言うことには、原則として従うべきである」（権威主義）

Q24-5「自分の考えを主張するより、他の人との和を尊重したい」（協調志向）

Q24-6「たとえ単調でも、安定している生活の方がよい」（安定志向）

図16-13 「家族の者に多少負担になっても、自分の納得のいく生き方をしたい」

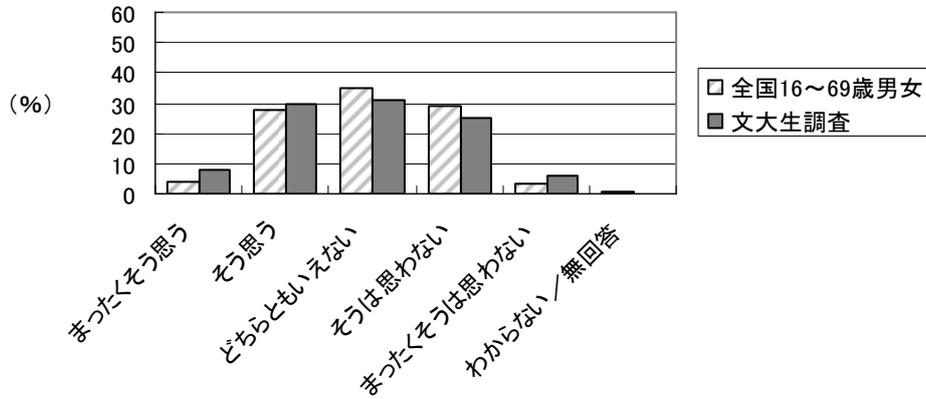


図16-14 「困っている人が近くにいたら放っておけない」

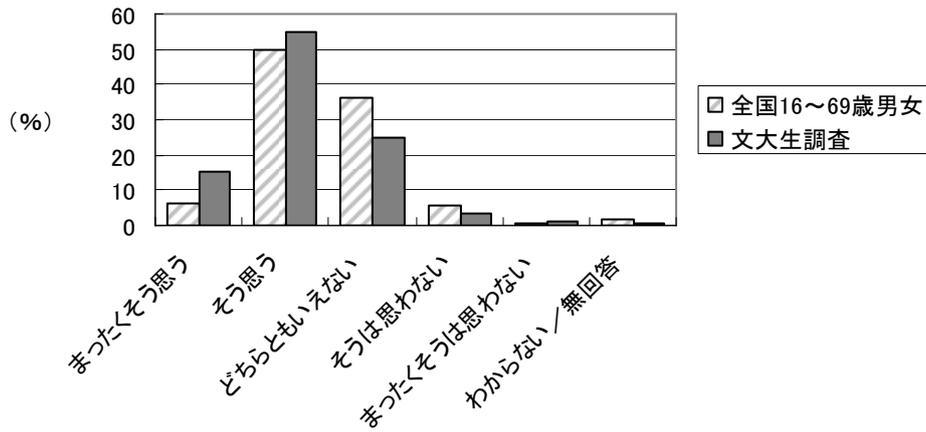


図16-15 「何かをするときは、これまでの慣習にとらわれずに決めたい」

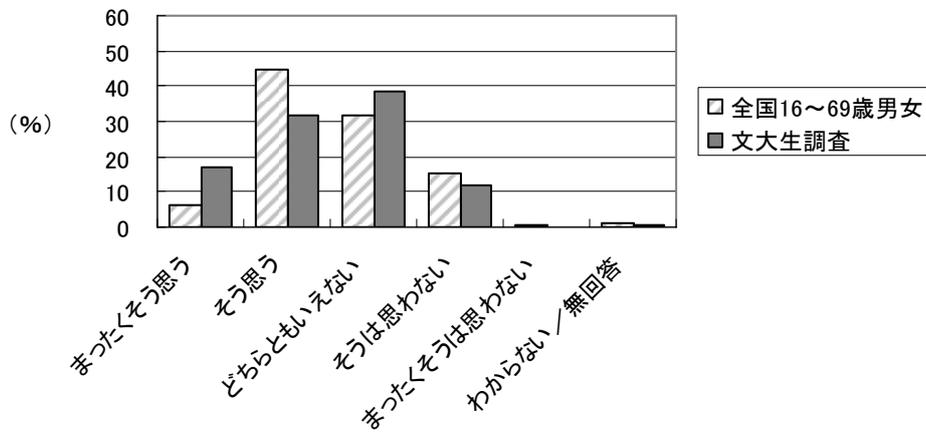


図16-16 「目上の人の言うことには、原則として従うべきである」

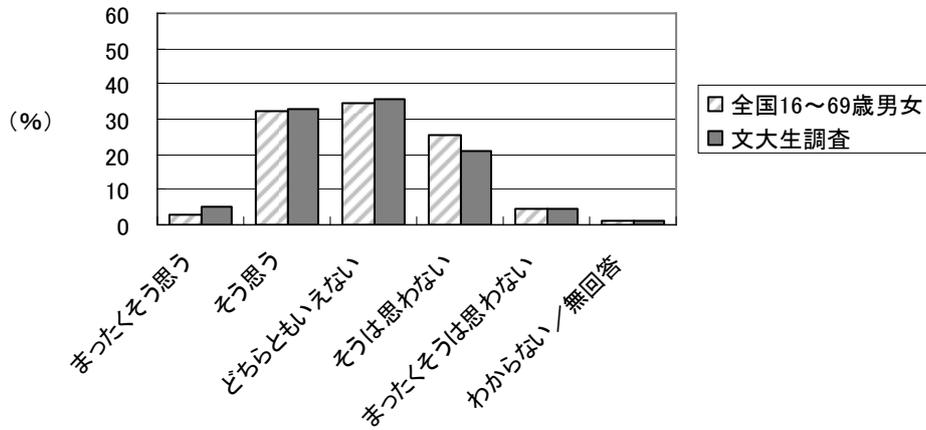


図16-17 「自分の考えを主張するより、他の人との和を尊重したい」

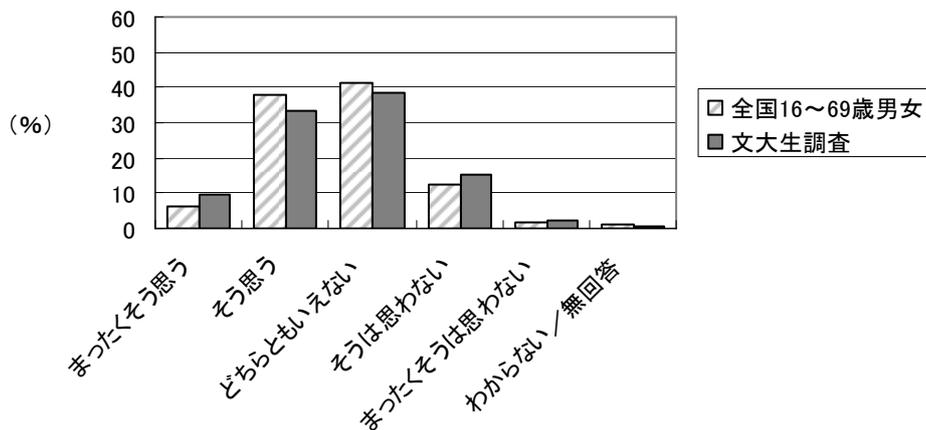


図16-18 「たとえ単調でも、安定している生活の方がよい」

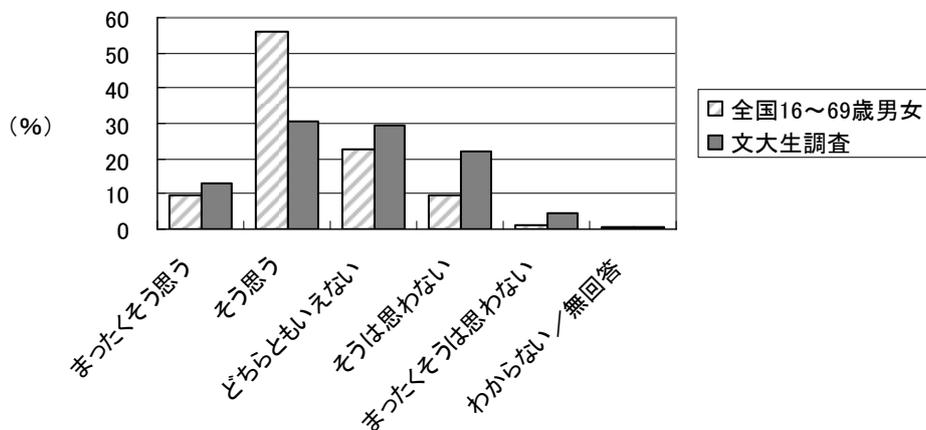


図 16-13～図 16-18 は、Q24 の 6 項目について集計結果をグラフ化したものである。Q24 の質問文と選択肢は生命保険文化センター「生活者の価値観に関する調査, 2001」<sup>39</sup>における該当設問のそれらに合致して設計されている。これによって全国データとの比較を試みたい。図 16-13～図 16-18 には、その全国データの集計結果も併記した。なお、同調査の対象者は「全国の満 16～69 歳の男女個人」であるので、文大調査のデータをその結果と比較する場合には、対象者の年齢層の違い、社会的属性の違い（大学生のみと、大学生を含めた全属性）などに注意する必要がある。

それらの点を留保したうえで、文大生のデータを全国データと比較してみると、Q24-1（納得の生き方）、Q24-2（人助け意識）、Q24-4（権威主義）、Q24-5（協調志向）に関しては、全般的な趨勢としてはほぼ同様の傾向を示しているといえる。わずかな違いを指摘するならば、Q24-2「困っている人が近くにいたら放っておけない」（人助け意識）では、全国データに対して「どちらともいえない」の中間回答の比率(24.8%)が 10 ポイント以上後退し、「まったくそう思う」(15.4%)、「そう思う」(54.9%)の比率がそれぞれ全国比率をやや上回る。「まったくそう思う」「そう思う」の比率を合計すると 70.3%に達する。Q24-5「自分の考えを主張するより、他の人との和を尊重したい」（協調志向）では、全国データに対して、それぞれ 5 ポイント以内の差ではあるが「まったくそう思う」(9.7%)、「そうは思わない」(15.4%)の比率が上回り、「そう思う」(33.6%)、「どちらともいえない」(38.3%)の比率は低い。文大生の場合、協調志向に関してはわずかながら賛否がより明確にわかる傾向にあるようだ。

いっぽう、全国データとの違いが明示的に表れたのはQ24-3（革新志向）とQ24-6（安定志向）である。Q24-3「何かをするときは、これまでの慣習にとらわれずに決めたい」（革新志向）に関しては、全国データでは「そう思う」(45.0%)が第 1 順位であるのに対して、文大生では「どちらともいえない」(38.6%)がもっとも多い。また、「そう思う」(31.7%)が全国データよりも 13.3 ポイント後退するかたわらで、「まったくそう思う」(17.2%)は 11 ポイント上回る。文大生の場合、一部に革新的態度を明確に支持する層がみられるいっぽうで、より中間的な態度を示す人が多い傾向にあるといえよう。Q24-6「たとえ単調でも、安定している生活の方がよい」（安定志向）では、全国データにおいて「そう思う」が過半数(55.8%)を占めるのに対して、文大生のその比率は 30.6%にとどまり、「どちらともいえない」(29.6%)、「そうは思わない」(21.8%)の比率は全国データを上回る。安定志向に関して、文大生のあいだには賛否両論が拮抗する傾向にあるようだ<sup>40</sup>。

図 16-19 は、Q25『全体として、現在の日本の社会は良い社会だと思う』という意見について、あなたはどうかお考えになりますか』への回答を集計したものである。Q25 も、同様に、生命保険文化センター「若者の生活意識に関する調査, 1993」<sup>41</sup>における該当設問の質問文と選択肢を踏襲することによって首都圏データとの比較を試みるものである。図 16-19 には、その首都圏データの集計結果も併記した。なお選択肢は、「わからない」を除くと「そう思う」「まあそう思う」「あまりそうは思わない」「そうは思わない」の 4 尺度である。これによると、首都圏若年層データでは「あまりそうは思わない」(39.7%)と「まあそう思う」(38.0%)が互角の水準に並ぶのに対して、文大生では「あまりそうは思わない」(37.5%)、「まあそう思う」(26.8%)と、「あまりそうは思わない」のほうが明らかに

<sup>39</sup> 「生活者の価値観に関する調査, 2001」調査実施者：生命保険文化センター、2001 年 7 月 13～29 日実施、調査対象：全国の満 16～69 歳の男女個人、標本数 2,500 サンプル、回収数 1,800 サンプル、回収率 72.0%。

<sup>40</sup> 文大生のこれらの傾向は、年齢効果や世代効果によるものである可能性も考えられ、以上のデータだけで判断することはできない。

<sup>41</sup> 「若者の生活意識に関する調査, 1993」調査実施者：生命保険文化センター、1993 年 6 月 19 日～27 日実施、調査対象：首都 50km 圏の 16 歳～26 歳の男女個人、サンプル数 2,000 人、有効回収数 1,188 人、有効回収率 59.4%。

上回っている。「あまりそうは思わない」と「そうは思わない」の比率を合計すると 63.5 %で、これは「そう思う」「まあそう思う」の合計比率 29.5 %の 2 倍以上である。首都圏データと比べると、文大生の場合、現在の日本社会に悲観的なイメージを抱いている人が多いといえる。（担当教員）

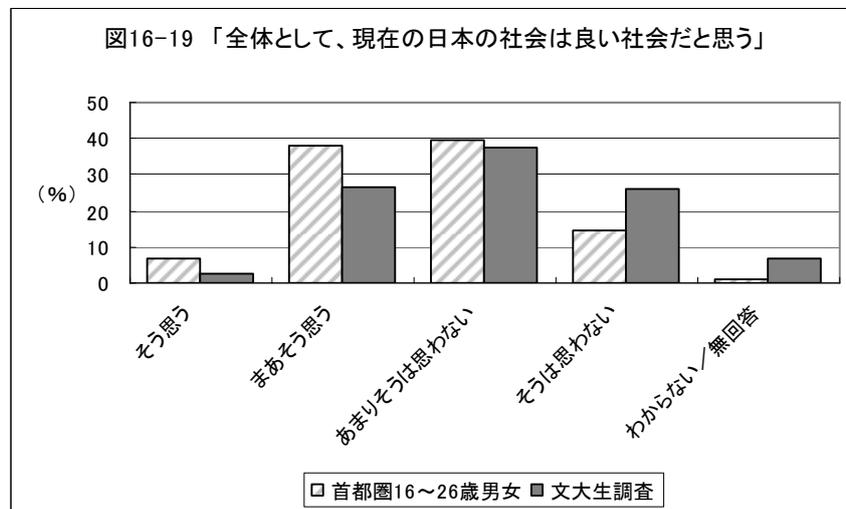


表 16-17 は、Q26-9（現在の学生生活全体への満足度）と Q25（社会肯定評価）とをクロス分析した結果である。Q26-9 のデータは「満足」「不満」の 2 カテゴリに、Q25 のデータについては、「そう思う」と「まあそう思う」、「あまりそうは思わない」と「そうは思わない」をそれぞれ合計し、「わからない」を含めた 3 カテゴリに集約したうえで集計した。

表16-17 現在の学生生活全体への満足度(2分割)と「現在の日本の社会は良い社会だ」(3分割)のクロス表

			「現在の日本の社会は良い社会だ」(3分割)			合計
			そう思う	そうは思わない	わからない	
現在の学生生活全体への満足度(2分割)	満足	度数	143	258	27	428
		現在の学生生活全体への満足度(2分割)の%	33.4%	60.3%	6.3%	100.0%
	不満	度数	52	165	13	230
		現在の学生生活全体への満足度(2分割)の%	22.6%	71.7%	5.7%	100.0%
合計		度数	195	423	40	658
		現在の学生生活全体への満足度(2分割)の%	29.6%	64.3%	6.1%	100.0%

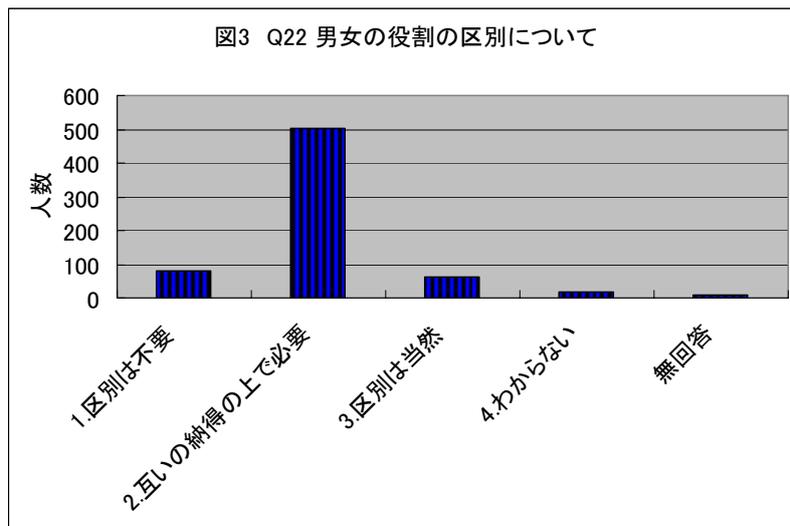
これによると、学生生活への満足度が低いと、日本社会に対する評価も否定的であるという傾向がうかがえる<sup>42</sup>。（北川瑤子）

<sup>42</sup> この関連性は統計的に有意である ( $\chi^2=9.1, df=2, p<0.05$ )。性別、学年、アルバイトの月収、自宅通学・下宿の別、仕送り比率（下宿生）とのあいだで統計的検定を行った結果、社会肯定評価に対して、いずれも統計的な有意差はみられなかった。

## ジェンダー観・結婚観

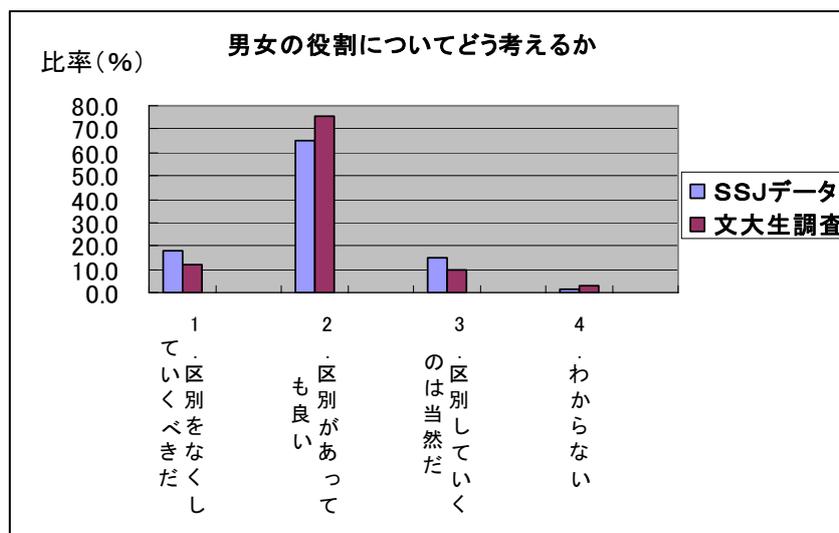
Q22 では「男女の役割について、あなたはどのようにお考えですか。次の中からあなたの考えに近いものを1つ選んでください」の質問文により、対象者のジェンダー観を尋ねている。選択肢は次の4つである。

1. どのような区別も差別につながるので、男女の役割の区別をなくしていくべきだ
2. 男女がお互いに納得していれば、男女の役割の区別があってもよい
3. 男女で性差があるのだから、生活の様々な場面で役割を区別していくのは当然のことだ
4. わからない



上の図3の集計結果によると、「お互いに納得していれば、男女の役割の区別があってもよい」が圧倒的に多数（501名、75.7%）を占めている。（小波智志）

Q22では、前掲の「若者の生活意識に関する調査, 1993」<sup>43</sup>における該当設問の質問文と選択肢を踏襲しているので、首都圏データとの比較が可能である。次のグラフは、その比較集計の結果である。



<sup>43</sup> p.276 注41を参照。

これによると、文大生データ、首都圏データともに「男女の区別があってもよい」の回答が圧倒的に多いのだが、文大生データにおけるその比率（75.7%）は首都圏データの比率 65.3%を 10 ポイント以上、上回っている。ただし、この差は、「若者の生活意識に関する調査」の対象者に同世代の社会人が含まれていることに起因する可能性もあるだろう。実際の職場生活を経験している職業人は、この設問に対してより現実的な反応を示すだろうと想像される。（神田雄太）

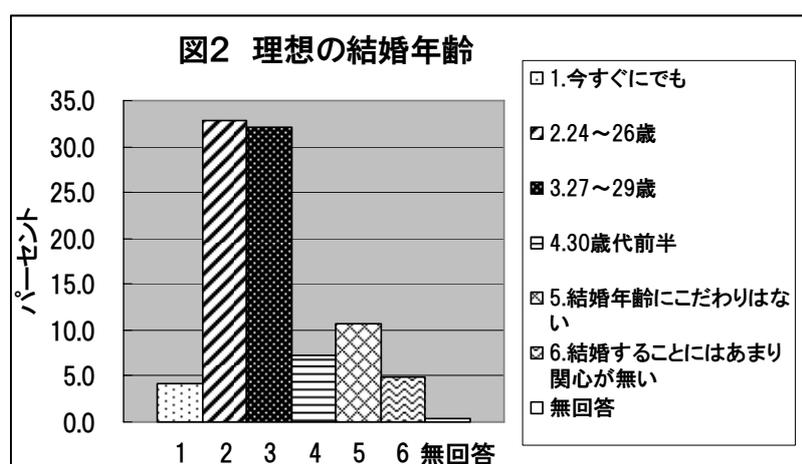
性別ではどうだろうか。仮説としては、性差別による不利益を被るのは女性の場合が多いので、女性のほうが男女間で役割を区別することに否定的な反応が多いだろうと予測される。表 16-18 は、対象者の性別と Q22（男女の役割についての考え方）のクロス表である。

表16-18 回答者の性別と男女の役割についての考え方 のクロス表

	男女の役割についての考え方				合計	
	男女の役割の区別をなくしていくべきだ	お互いの納得があれば区別があってもよい	役割を区別していくのは当然のことだ	わからない		
回答者の性別	男性	度数 18	107	25	2	152
	回答者の性別の %	11.8%	70.4%	16.4%	1.3%	100.0%
女性	度数	61	389	38	15	503
	回答者の性別の %	12.1%	77.3%	7.6%	3.0%	100.0%
合計	度数	79	496	63	17	655
	回答者の性別の %	12.1%	75.7%	9.6%	2.6%	100.0%

分析結果は仮説とはやや異なる様相を呈している。「区別をなくしていくべきだ」の比率は男女間でほとんど違いがない。「お互いに納得していれば男女の役割の区別があってもよい」の比率は男性 70.4%、女性 77.3%と、むしろ女性のほうが高い<sup>44</sup>。この結果をみると、文大の女子学生はどちらかというとなんて伝統的なジェンダー観を示す傾向が強いと結論づけられる。また、男子学生には、男女の役割区別を当然だと考える層がある程度（16.4%）含まれていることがわかる。（小長谷泰右・今福健太）

次の図 2 は、Q23（結婚希望年齢）の集計結果である。



これによると、「24~26歳」の回答が 32.9%、これに次ぐ「27~29歳」が 32.1%で、これら 2 つをあ

<sup>44</sup> この関連性は統計的に有意である ( $\chi^2=11.6, df=3, p<0.01$ )。

わせると 65.0%にのぼる。「30 歳代前半」(7.2%) や「結婚することにはあまり関心がない」(12.4%) の比率は、とくに目立つ水準ではない。(江尻明德・小波智志)

この集計結果は、国立社会保障・人口問題研究所による報告データ(下の図 3-4)とも符合する内容である。

図3-4 年齢階級別、希望する結婚年齢(5年毎の推移)

年齢	男性			女性		
	1987年	1992年	1997年	1987年	1992年	1997年
18～19歳	26.2歳	26.7	26.3	23.6歳	24.2	24.8
20～24歳	26.9	27.3	27.5	24.7	25.2	25.8
25～29歳	29.0	29.6	29.9	27.8	28.5	28.7
30～34歳	33.5	33.7	34.2	32.6	33.3	33.5
総数	27.9歳	28.4	28.8	25.1歳	26.0	26.9

注:対象は図3-2で「いずれ結婚する」と答えた未婚者。

国立社会保障・人口問題研究所「少子化情報ホームページ」より引用

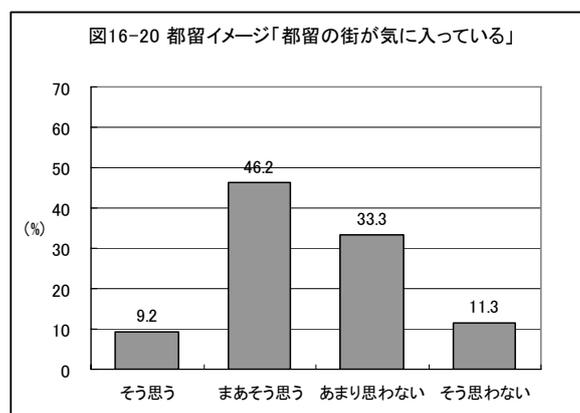
Q23の集計結果によると、文大生は、昨今、社会的な話題にのぼる「晩婚化」や「非婚化」といったイメージからはほど遠いという印象を受ける。(今福健太)

### 16.3.4 文大生と都留の地域社会

本節では文大生と都留の地域社会との関係を取り上げる。文大生は都留のまちに対してどのようなイメージをもっているのだろうか。そして、地域社会とどのような関わり方をしているのだろうか。

#### まちイメージ

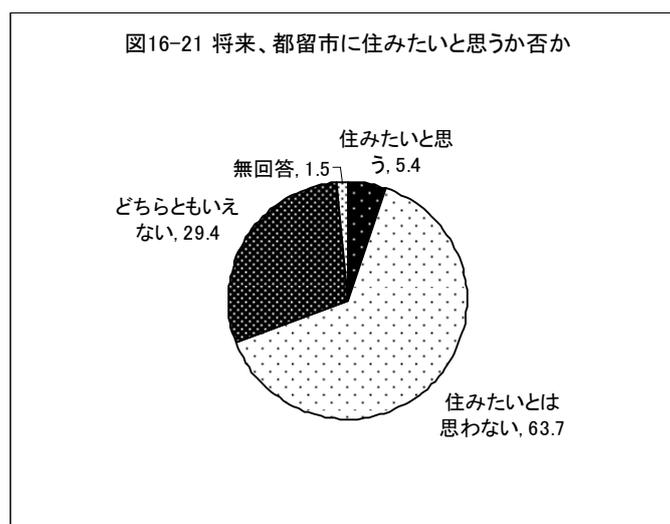
Q33では、「あなたは都留の街についてどのようなイメージをもっていますか。次の各項目についてあなたの考えに近いものをそれぞれ1つずつ選んでください」の質問文によって、対象者たちのまちに対するイメージ評価を「そう思う」「まあそう思う」「あまり思わない」「そう思わない」の4選択肢によって尋ねている。取り上げたイメージ項目は、Q33-1「都留の街が気に入っている」、Q33-2「時間がゆったりと流れている」、Q33-3「人びとが気さくで親しみをもてる」、Q33-4「大学生活を送ってみると入学当初のイメージよりも良い」、Q33-5「暮らしやすいと思う」、Q33-6「買い物や娯楽などの施設が少なく不便である」、Q33-7「さびれた感じがして活気がない」、Q33-8「のんびりし過ぎても足りない」の8項目である。図16-20はQ33-1の集計結果をグラフ化したものである。



Q33-1「都留の街が気に入っている」の設問は、それに続く Q33-2～Q33-8 の設問を包含する内容であり、いわば、まちに対する総合評価と位置づけられる。その集計結果（図 16-20）によると、もっとも多い回答は「まあそう思う」で、その有効比率は 46.2% である。これは、次に多い「あまり思わない」の 33.3% を約 13 ポイント上回っている。「そう思う」(9.2%) と「まあそう思う」を合計すると、過半数 (55.4%) の対象者が都留のまちを気に入っていると答えている。（齋藤峻介）

「気に入っている」と答えた人のほうが、「そうは思わない」（「あまり思わない」と「そう思わない」の合計で 44.6%）と答える人よりわずかに多いが、大差ではない。はっきりと「そう思う」や「そう思わない」と答えるのではなく、「まあそう思う」や「あまり思わない」といった控えめな賛否を選択した人は、合計で約 8 割 (79.2%) にのぼる。つまり、「微妙」であるというのが文大生の捉え方であるようだ。「べつに嫌いというわけではないけれど、はっきりと気に入っているとまでは言えない」といったところだろうか。（今福健太）

そこで、設問の順番を先回りして、Q34「もしも自分の職場が通勤圏内にあるとしたら、将来、都留市に住みたいと思いますか、思いませんか」の集計結果をみてみよう。一般的に考えると、20 歳前後の若者に特定の地域への将来の居住関心を尋ねることは、それ自体、やや消極的な回答傾向を招くものと想像される。質問文の内容も考慮に入れると、Q34 への回答には、対象者たちの、都留のまちに対するイメージ評価の「ホンネ」がより強く反映されるであろう。

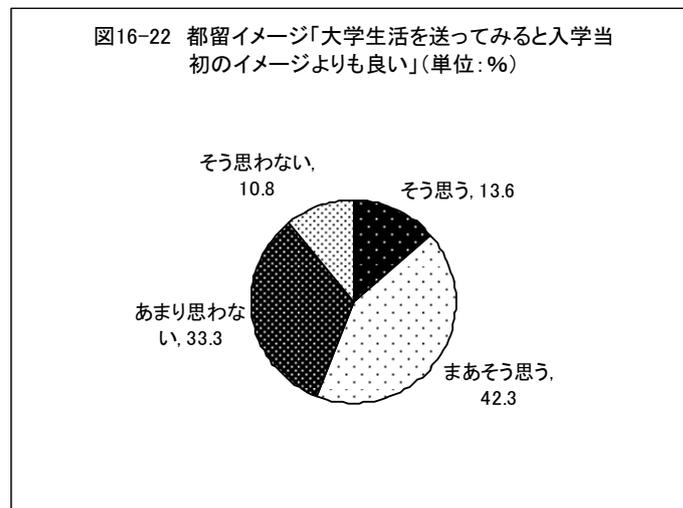


集計結果をみると（図 16-21 数値は比率を示す）、63.7% の対象者が「住みたいとは思わない」と答えている。そのいっぽうで、「どちらともいえない」の回答が 29.4% あり、「住みたいと思う」の回答も 5.4% ある。また、「無回答」は 1.5% とわずかである。（担当教員）

「住みたいとは思わない」の回答が多いだろうと予測していた。結果によれば、たしかにそれは事実である。しかし、その比率は予想ほどの高さではない。「どちらともいえない」の回答が 29.4% もあったのは意外な発見だった。「どちらともいえない」というのは、都留のまちに対してポジティブなイメージもあればネガティブなイメージもあるということだろうか。それとも、関心そのものが薄く、単純に中立的な評価であるということだろうか。あるいはまた、ネガティブな印象はあるが、それは「都留には住みたくない」とまで思うほどのものでもないということだろうか。たしかに都留にはそれなりの魅力もある。住むのにとくに困ることはない。スーパーもあるしコンビニもある。自然が豊富で、水道代も安く、電車や高速道路も通っている。車があればなおさらのこと不自由はないのかもしれない。そのような都留の良さを理解する学生が少なくともわれわれの想像以上に多いことを、こ

の集計結果は物語っている。(佐藤景輔・黒島美佳・江尻明德)

さらに掘り下げて分析してみよう。図 16-22 は、Q33-4「大学生生活を送ってみると入学当初のイメージよりも良い」の集計結果である。



これによると、「そう思う」が13.6%で「まあそう思う」が42.3%と、これらを合わせて55.9%の対象者が「入学当初よりも都留のまちに対するイメージがよくなった(好感度が上がった)」と答えている<sup>45</sup>。大勢としては、実際に都留に暮らし、あるいは通い始めると、都留のまちに対するイメージはプラスの方向に転じるようである。この結果をQ33-1「都留の街が気に入っている」の集計結果(図16-20)と比べてみると、「そう思う」と「まあそう思う」の合計比率はQ33-1で55.4%、Q33-4で上述のとおり55.9%とほぼ同比率である。しかし、その内訳はQ33-1の場合、「そう思う」が9.2%で「まあそう思う」が46.2%であるのに対して、Q33-4では「そう思う」が13.6%で「まあそう思う」が42.3%と、「そう思う」の構成比率が高い。つまり、Q33-1の総合評価と比べた場合、「大学生生活を送ってみると入学当初のイメージよりも良い」に対しては、より明確に肯定する傾向がみられる。

Q33-4の結果を学年別にクロスさせると(表16-19)、学年との関連性はみられない。

表16-19 回答者の学年と都留イメージ「大学生生活を送ってみると入学当初のイメージよりも良い」のクロス表

	都留イメージ「大学生生活を送ってみると入学当初のイメージよりも良い」				合計	
	そう思う	まあそう思う	あまり思わない	そう思わない		
回答者の学年	1年生	32	84	64	23	203
	回答者の学年の%	15.8%	41.4%	31.5%	11.3%	100.0%
2年生	度数	28	80	83	23	214
	回答者の学年の%	13.1%	37.4%	38.8%	10.7%	100.0%
3年生	度数	21	85	55	16	177
	回答者の学年の%	11.9%	48.0%	31.1%	9.0%	100.0%
4年生	度数	8	25	15	7	55
	回答者の学年の%	14.5%	45.5%	27.3%	12.7%	100.0%
5年生以上	度数	1	4	3	0	8
	回答者の学年の%	12.5%	50.0%	37.5%	.0%	100.0%
合計	度数	90	278	220	69	657
	回答者の学年の%	13.7%	42.3%	33.5%	10.5%	100.0%

<sup>45</sup> 数値は有効比率を示している。無回答は9名(1.3%, n=669)であった。

実際に生活してみるとまちへの高感度が上がる（と回答する比率がやや高い）という傾向は、少なくともこの4～5年を通じて文大生のあいだに一貫してみられる現象であると推察される。視点を変えて解釈するならば、ここに示されている「イメージ向上」とは、生活体験の蓄積（学年が上がる）とともに発展的に深まっていくような本質レベルでの認識変化を指しているのではなく、直感的な反応によって捉えられたその場限りでの印象評価であるに過ぎないといえるだろう。

では、まちイメージの総合評価を決定づける要因は何だろうか。Q33-1の集計結果に立ち戻り、他の変数とのクロス分析によって考察してみたい。都留のまちに対する選好度は、実際にそこを生活拠点とする下宿生と、非居住者として通学するだけの立場にある自宅通学生<sup>46</sup>とのあいだに違いはみられるだろうか。

表16-20 自宅通学・下宿の別と都留イメージ「都留の街が気に入っている」のクロス表

			都留イメージ「都留の街が気に入っている」				合計
			そう思う	まあそう思う	あまり思わない	そう思わない	
自宅通学・下宿の別	自宅通学	度数	5	36	26	6	73
		自宅通学・下宿の別の%	6.8%	49.3%	35.6%	8.2%	100.0%
	下宿	度数	56	270	194	69	589
		自宅通学・下宿の別の%	9.5%	45.8%	32.9%	11.7%	100.0%
合計	度数	61	306	220	75	662	
	自宅通学・下宿の別の%	9.2%	46.2%	33.2%	11.3%	100.0%	

自宅通学・下宿の別とのクロス集計結果によると（表16-20）、自宅通学生と下宿生とのあいだに際立った違いはなく、下宿生がとりたてて肯定・否定のどちらかに傾斜しているわけではない<sup>47</sup>。Q33-1「都留の街が気に入っている」への回答は、地域の具体的な生活環境を根拠とした評価ではなく、ここでもやはり、抽象的な地域イメージに過ぎない可能性が高いといえる。（担当教員）

次に学年によって違いはあるだろうか。学年とのクロス表によると（表16-21）、

表16-21 回答者の学年と都留イメージ「都留の街が気に入っている」のクロス表

			都留イメージ「都留の街が気に入っている」				合計
			そう思う	まあそう思う	あまり思わない	そう思わない	
回答者の学年	1年生	度数	19	103	66	16	204
		回答者の学年の%	9.3%	50.5%	32.4%	7.8%	100.0%
	2年生	度数	14	88	80	33	215
		回答者の学年の%	6.5%	40.9%	37.2%	15.3%	100.0%
	3年生	度数	17	81	63	16	177
		回答者の学年の%	9.6%	45.8%	35.6%	9.0%	100.0%
	4年生	度数	10	28	11	7	56
		回答者の学年の%	17.9%	50.0%	19.6%	12.5%	100.0%
	5年生以上	度数	1	5	1	1	8
		回答者の学年の%	12.5%	62.5%	12.5%	12.5%	100.0%
合計	度数	61	305	221	73	660	
	回答者の学年の%	9.2%	46.2%	33.5%	11.1%	100.0%	

<sup>46</sup> 自宅通学者には都留市内の出身者・現住者も含まれているが、本調査のデータによってはその比率を特定できない。Q9（自宅通学者の片道の通学時間）の集計結果から類推するならば、通学時間が30分以内に該当する対象者は13名で、これは自宅通学者の17.6%である。以下では便宜的に、自宅通学生は原則的に市外からの通学者であるとみなすことにする。

<sup>47</sup> これら2つの変数間に統計的な有意差はみられない。

わずかにではあるが、学年によって異なった様相を呈していることがわかる<sup>48</sup>。1年生と3年生はほぼ同様の趨勢である。これに対して2年生の場合、「あまり思わない」(37.2%)、「思わない」(15.3%)の比率が、他の学年に対して高い。これらを合計すると過半数(52.5%)に達し、賛否は逆転する。また、4年生では反対に「そう思う」(17.9%)の比率が高く、「あまり思わない」(19.6%)の比率が低い。「そう思う」と「まあそう思う」(50.0%)を合計すると、7割近い(67.5%)4年生が「都留のまちを気に入っている」と答えている。これらの違いが在学期間の長さによる効果であるのか、それとも学年コーホートの特性の違いによるものなのかは時系列的な追跡調査の結果を待たなければ判断できないが、卒業を目前に控えた(調査実施は12月中旬)4年生のあいだで、肯定意見の比率が7割近くに達する。卒業前の感傷的美化であるにせよ、それが都留のまちに対する愛着の方向へと傾くことの意味は大きい。(齋藤峻介・担当教員)

表16-22 回答者の性別と都留イメージ「都留の街が気に入っている」のクロス表

			都留イメージ「都留の街が気に入っている」				合計
			そう思う	まあそう思う	あまり思わない	そう思わない	
回答者の性別	男性	度数	28	65	42	19	154
		回答者の性別の%	18.2%	42.2%	27.3%	12.3%	100.0%
	女性	度数	32	241	179	55	507
		回答者の性別の%	6.3%	47.5%	35.3%	10.8%	100.0%
合計		度数	60	306	221	74	661
		回答者の性別の%	9.1%	46.3%	33.4%	11.2%	100.0%

性別ではどうか。表16-22のクロス分析結果をみると、ここには明らかな違いがみられる<sup>49</sup>。男性では「そう思う」の比率(18.2%)が女性のそれ(6.3%)と比べて高く、その差は12ポイントに近い(11.9%)。対照的に、女性では「あまり思わない」(35.3%)の比率が男性のそれ(27.3%)を8ポイント上回っている。「そう思う」と「まあそう思う」の合計比率は、男性が60.4%、女性では53.8%と、男性のほうが高い。また、「まあそう思う」と「あまり思わない」の合計比率では、男性の69.5%に対して女性では82.8%と、女性の場合、控えめな賛否に回答が集中する傾向がより顕著である。大局的にみると、男性のほうが女性よりもやや肯定的であるといえる。(担当教員)

生活満足度との関連ではどうだろうか。表16-23は、Q26-9(学生生活全体に対する満足度)とQ33-1(都留のまちに対する選好度)のクロス表である。ここには、表16-22よりもさらに明確な違いが表れている<sup>50</sup>。学生生活に「満足している」と答えているグループでは、Q33-1「都留の街が気に入っている」に対して「そう思う」と答える人の比率が28.7%で、他のグループに対して圧倒的に高い。「まあそう思う」の比率(51.1%)を含めると、79.2%もの人が「都留のまちを気に入っている」と答えている。学生生活に対して「どちらかといえば満足」と答えているグループのなかでは、「まあそう思う」の比率(56.0%)がもっとも高い。「そう思う」と「まあそう思う」の合計では64.4%で、対象者全体でのそれ(55.2%)よりも高い。学生生活に対して「どちらかといえば不満」と答えているグループでは、Q33-1に対して「あまり思わない」の比率(47.0%)がもっとも高く、「そう思う」と「まあそう思う」を合計すると30%台(33.9%)に落ち込む。さらに、「不満に思う」のグループになると、Q33-1に対して「そう思わない」の回答がもっとも多く(40.6%)、「そう思う」と「まあそう思

<sup>48</sup> この関連性は10%水準で統計的に有意である ( $\chi^2=20.8, df=12, p<0.1$ )。

<sup>49</sup> この関連性は統計的に有意である ( $\chi^2=21.6, df=3, p<0.01$ )。

<sup>50</sup> この関連性は統計的に有意である ( $\chi^2=169.9, df=9, p<0.01$ )。

う」の合計では26.2%に過ぎない。このように、学生生活全体に対する満足度が高ければ高いほど「都留のまちを気に入っている」と答え、満足度が低ければ低いほど、それに否定的な反応を示すという傾向が、表16-23から明らかである。（井口健太郎）

表16-23 現在の学生生活全体への満足感と都留イメージ「都留の街が気に入っている」のクロス表

			都留イメージ「都留の街が気に入っている」				合計
			そう思う	まあそう思う	あまり思わない	そう思わない	
現在の学生生活全体への満足感	満足している	度数 現在の学生生活全体への満足感の%	27 28.7%	48 51.1%	16 17.0%	3 3.2%	94 100.0%
	どちらかといえば満足	度数 現在の学生生活全体への満足感の%	28 8.4%	186 56.0%	104 31.3%	14 4.2%	332 100.0%
	どちらかといえば不満	度数 現在の学生生活全体への満足感の%	4 2.4%	53 31.5%	79 47.0%	32 19.0%	168 100.0%
	不満に思う	度数 現在の学生生活全体への満足感の%	0 .0%	17 26.6%	21 32.8%	26 40.6%	64 100.0%
合計	度数 現在の学生生活全体への満足感の%	59 9.0%	304 46.2%	220 33.4%	75 11.4%	658 100.0%	

ここまでのところ、都留のまちに対する選好度は、性別および学生生活全体に対する満足度との関連性が顕著であった。そこで、これら3つの変数間の関連性を3重クロス表にまとめてみよう。表16-24は、性別とQ33-1（都留のまちに対する選好度）とのクロス分析を、Q26-9（学生生活全体に対する満足度）への回答結果によって分類したものである。Q26-9のデータについては、「満足している」と「どちらかといえば満足」、および「どちらかといえば不満」と「不満に思う」のそれぞれを合計して、「満足」「不満」の2カテゴリに集約したうえで集計した。

表16-24 回答者の性別と都留イメージ「都留の街が気に入っている」と現在の学生生活全体への満足度(2分割)のクロス表

現在の学生生活全体への満足度(2分割)				都留イメージ「都留の街が気に入っている」				合計
				そう思う	まあそう思う	あまり思わない	そう思わない	
満足	回答者の性別	男性	度数 回答者の性別の%	25 23.8%	48 45.7%	27 25.7%	5 4.8%	105 100.0%
		女性	度数 回答者の性別の%	29 9.1%	186 58.1%	93 29.1%	12 3.8%	320 100.0%
	合計		度数 回答者の性別の%	54 12.7%	234 55.1%	120 28.2%	17 4.0%	425 100.0%
不満	回答者の性別	男性	度数 回答者の性別の%	1 2.2%	16 34.8%	15 32.6%	14 30.4%	46 100.0%
		女性	度数 回答者の性別の%	3 1.6%	54 29.2%	85 45.9%	43 23.2%	185 100.0%
	合計		度数 回答者の性別の%	4 1.7%	70 30.3%	100 43.3%	57 24.7%	231 100.0%

まず、学生生活に満足しているグループについてみてみよう。ここには性別による傾向の違いが明

確に表れている<sup>51</sup>。男性ではQ33-1「都留の街が気に入っている」に対して「まあそう思う」の比率（45.7%）がもっとも高く、他のケースに対して「そう思う」の比率（23.8%）が際立って高いのが特徴的である。「そう思う」と「まあそう思う」を合計すると、学生生活に満足している男性の69.5%が「都留のまちを気に入っている」と答えている。女性では、「まあそう思う」がもっとも高い点では同じであるが、その比率は58.1%と、単独で過半数を占めている。「そう思う」と「まあそう思う」の合計は67.2%で、男性の場合とほぼ同水準である。

学生生活に不満を抱いているグループでは、傾向そのものとしては男女間で共通であるが、その配分には多少の違いがみられる<sup>52</sup>。男性の場合、Q33-1に対して「まあそう思う」（34.8%）、「あまり思わない」（32.6%）、「そう思わない」（30.4%）の回答が30%強の比率で拮抗する。「そう思う」と「まあそう思う」の合計は37.0%である。女性では、「あまり思わない」（45.9%）の回答が突出し、「そう思う」と「まあそう思う」の合計は30.8%と、男性のそれよりも低い。

ここまでの分析結果を整理しよう。都留のまちに対するイメージを総合的に評価する指標として、まちに対する選好度（Q33-1「都留の街が気に入っている」）に着目してみると、対象者の55.4%が「都留のまちを気に入っている」と答えている（図16-20）。また、55.9%の人が「入学当初よりも都留のまちに対するイメージがよくなった（好感度が上がった）」と答えている（図16-22）。それらには、賛否いずれにせよ控えめな回答が多く、また、「ホンネ」としては6割以上の人が「将来、都留に住みたいとは思わない」と答えていること（図16-21）などから、都留のまちを気に入っているか否かをめぐっては「微妙」であるというのが文大生の捉え方であるようだ。しかし、それらの評価は、具体的な根拠があつてのことではなく、まちに対する直感的・抽象的なイメージとして下されているに過ぎない可能性が高い（表16-19、表16-20）。

まちに対する選好度を決定づける要因は、今回の調査データにみる限りでは、対象者個人の学生生活への満足度である。学生生活全体に対する満足度が高ければ高いほど「都留のまちを気に入っている」と答え、満足度が低ければ低いほど、それに否定的な反応を示すという傾向が明らかである（表16-23）。まちに対する選好度は性別によっても異なる。男女ともに「まあそう思う（気に入っている）」が多数を占めるのであるが、どちらかというとなら男性では肯定評価が、女性では否定評価が多い（表16-22）。学生生活への満足度と性別を組み合わせると（表16-24）、学生生活に満足している学生では、男女ともに7割近くが「都留のまちを気に入っている」と答えている。とりわけ「学生生活に満足している男子」には、「そう思う（気に入っている）」と明確な肯定意見を表明する学生が多く（23.8%）、「学生生活に満足している女子」は、控えめな肯定意見を答える傾向が強い。いっぽう、学生生活に不満を抱いている学生では、男女ともに否定評価（気に入っているとは思わない）が6割以上を占める。そのなかでも、「学生生活に不満を抱いている女子」では否定評価が7割近く（69.1%）に達する点の特徴的である。都留のまちを気に入っているかどうか、それは地域社会に対する直接的・具体的評価によってではなく、学生生活に満足しているか否かという、いわば対象者自身の個人的事情によって決定づけられる<sup>53</sup>。これは、都留の地元住民の目線で考えるならば、ある意味で不幸な構

<sup>51</sup> 学生生活に満足しているグループにおいては、性別とまちへの選好度との関連性は統計的に有意である（ $\chi^2=16.3$ ,  $df=3$ ,  $p<0.01$ ）。

<sup>52</sup> 学生生活に不満を抱いているグループにおいては、性別とまちへの選好度との関連性に統計的な有意差はみられない。

<sup>53</sup> 反対に、都留のまちに対する選好度が、学生生活の満足度を決定づけるという可能性はないだろうか。詳しい分析

造であるといえるかもしれない。(担当教員)

都留を気に入るか否かは、どうやら学生生活全体への満足度によるところが大きいようだ。つまり、これは案外シンプルな話で、各人が学生生活を楽しんでいればそれに伴って、都留というまちも、そのよさが見えてくるのかもしれない。(井口健太郎)

まちに対するイメージの総合評価についてこれまでみてきた。では、具体的にどのようなイメージを抱いているのであろうか。まずは、Q33の各設問の集計データを俯瞰し、それらの傾向を大まかにつかんでいくことにしよう。次頁の図16-23～図16-28は、それぞれ、Q33-2「時間がゆったりと流れている」(図16-23)、Q33-3「人びとが気さくで親しみをもてる」(図16-24)、Q33-5「暮らしやすいと思う」(図16-25)、Q33-6「買い物や娯楽などの施設が少なく不便である」(図16-26)、Q33-7「さびれた感じがして活気がない」(図16-27)、Q33-8「のんびりし過ぎてもの足りない」(図16-28)の集計結果をグラフに表したものである。

図16-23(Q33-2「時間がゆったりと流れている」)をみると、「そう思う」(35.9%)と「まあそう思う」(45.1%)が合計で80%を超える(81.0%)結果となった<sup>54</sup>。そのことは、基本的には肯定的に捉えられているようだ。図16-28(Q33-8「のんびりし過ぎてもの足りない」)を見ると、過半数(51.5%)の人が「思わない」答えている。「のんびりし過ぎてもの足りない」と明言するほどではないようだ。具体的に何が「もの足りない」のかという原因には個人差があると思われるが、「そう思う」が16.2%にとどまっていることからわかるように、文大生は、時間がゆったりと流れていることに関してはそれほど居心地の悪さは感じていないようだ。しかし、図16-27(Q33-7「さびれた感じがして活気がない」)の結果も無視できない。7割強(72.8%)の人が、都留はさびれていて活気がないと感じているようだ。(齋藤峻介)

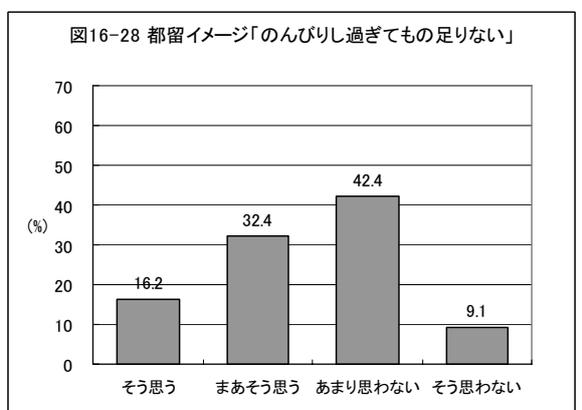
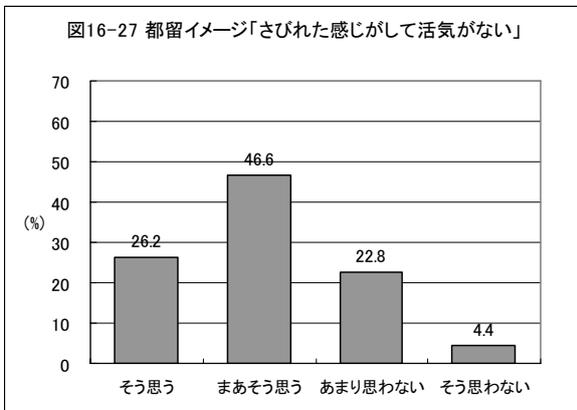
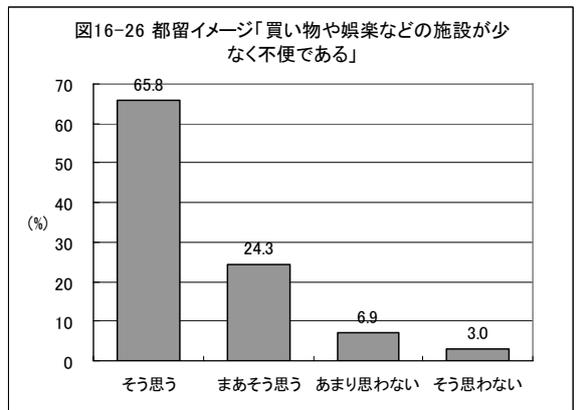
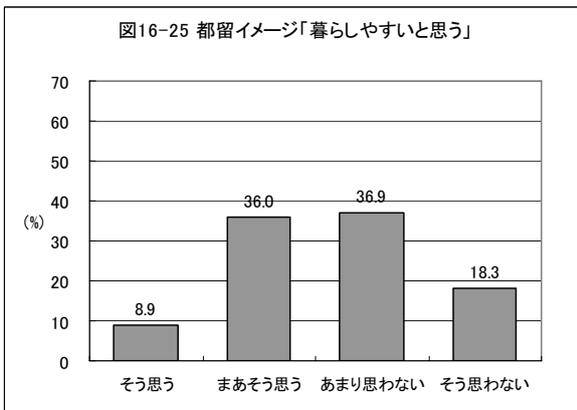
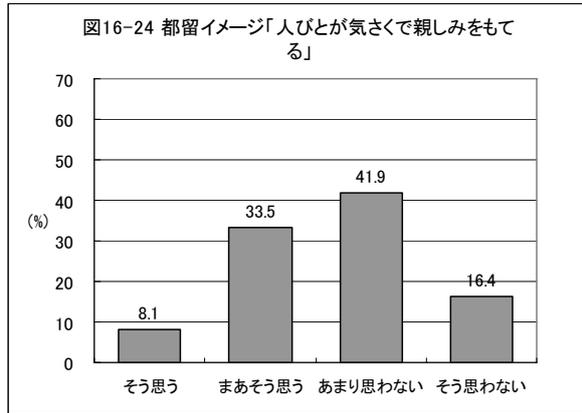
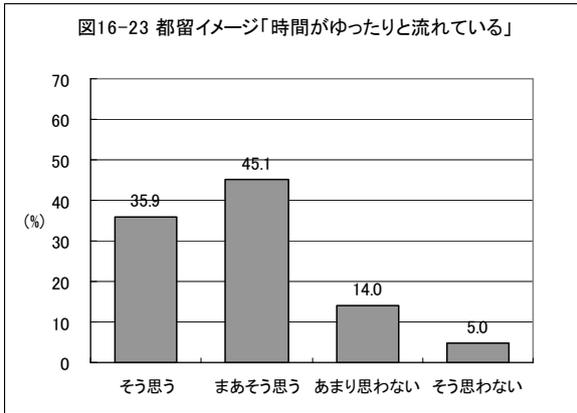
極端な回答が得られたのは図16-26(Q33-6「買い物や娯楽などの施設が少なく不便である」)で、約9割(90.1%)もの人が買い物や娯楽施設に不便を感じている結果となった。その内訳も、「そう思う」という明確な回答が全体の65.8%にも達するという結果である。買い物・娯楽施設の不足に対するこの不満が、まちに「活気がない」というイメージ(図16-27)に結びつく学生がいるいっぽうで、逆に、時間がゆったりと流れているように感じる学生(図16-23)もいるようだ。良く言えば、「都留は学業をするにはもってこいのまちだ」ということだ。(齋藤峻介・今福健太・河西麻利子)

Q33-5「暮らしやすいと思う」(図16-25)に関しては、学生の反応は賛否両論にわかれるようだ。また、Q33-3「人びとが気さくで親しみをもてる」(図16-24)についても、同様に賛否両論がわかれているが、どちらかというところ、これに否定的な回答へと傾斜している。(担当教員)

---

は今後の課題とせざるをえないが、試みに、Q26-9(学生生活全体への満足度)を従属変数とし、pp.269-270の分析結果から、独立変数にQ26-2(同性の友人関係への満足度)、Q26-3(異性の友人関係への満足度)、およびQ33-1(都留のまちに対する選好度)を取り上げて線形重回帰分析を行ってみると、標準化係数の値は、同性の友人関係への満足度が0.262、異性の友人関係への満足度が0.084、まちに対する選好度が0.366となり、まちに対する選好度のほうが友人関係への満足度よりも高い値を示す( $r^2=0.282, p<0.05$ )。これにより、学生生活への満足度を決定づける要因としては、同性の友人関係への満足度にもまして、さらにそれ以上に、まちに対する選好度がより大きな効果を与えているものと想像される。さしあたって本稿では、都留のまちに対する選好度は、対象者個人の学生生活に対する満足度によって規定されているのであるが、その満足度は少なからず、まちに対する選好度によって決定づけられるという循環構造がそこにみられる、という点を指摘しておきたい。

<sup>54</sup> 図16-23～16-28中の数値は有効比率を表している。これらの設問に対する無回答の比率は、最大(図16-28, Q33-8)でも度数8、回答者全体に対する単純比率1.2%にとどまる。



Q33の各項目について、それぞれ他の変数との関連性を考察してみよう。次の表は、学年（Q37）

	Q33-6						総計
	そう思う		そう思わない		無回答		
Q37	度数	比率	度数	比率	度数	比率	
1年生	183	89.7	21	10.3	0	0.0	204
2年生	200	93.0	15	7.0	0	0.0	215
3年生	154	87.0	23	13.0	0	0.0	177
4年生	50	89.3	6	10.7	0	0.0	56
5年生以上	7	87.5	1	12.5	0	0.0	8
無回答	3	33.3	0	0.0	6	66.7	9
総計	597	89.2	66	9.9	6	0.9	669

とQ33-6「買い物や娯楽などの施設が少なく不便である」とのクロス集計の結果である。わずかに、2年生のあいだで「そう思う」の比率が高いが、全体としては学年別にとくに目だった違いはみられない<sup>55</sup>。（齋藤峻介）

自宅通学・下宿の別とクロス集計してみても、大きな違いはみられない（表16-25）<sup>56</sup>。やはり、買い物・娯楽施設の少なさに不満を感じている学生が圧倒的に多く、この不満は下宿生だけでなく自宅通学生も感じているようだ。（河西麻利子）

表16-25 自宅通学・下宿の別と都留イメージ「買い物や娯楽などの施設が少なく不便である」(2分割)のクロス表

			都留イメージ「買い物や娯楽などの施設が少なく不便である」(2分割)		合計
			そう思う	そう思わない	
自宅通学・下宿の別	自宅通学	度数	63	10	73
		自宅通学・下宿の別の%	86.3%	13.7%	100.0%
	下宿	度数	533	56	589
		自宅通学・下宿の別の%	90.5%	9.5%	100.0%
合計	度数	596	66	662	
	自宅通学・下宿の別の%	90.0%	10.0%	100.0%	

次の表は、性別(Q36)とQ33-6「買い物や娯楽などの施設が少なく不便である」のクロス表である。ここには性別による違いが表れている。女性(92.1%)のほうが男性(83.1%)よりも不便に感じている割合が高い<sup>57</sup>。やはり、女性は買い物好きだからであろうか。

Q36	Q33-6						総計
	そう思う		そう思わない		無回答		
	度数	比率	度数	比率	度数	比率	
男性	128	83.1	26	16.9	0	0.0	154
女性	467	92.1	40	7.9	0	0.0	507
無回答	2	25.0		0.0	6	75.0	8
総計	597	89.2	66	9.9	6	0.9	669

次に、Q33-3「人びとが気さくで親しみをもてる」を取り上げよう。次の表は、学年(Q37)とのクロス分析の結果である。

Q37	Q33-3						総計
	そう思う		そう思わない		無回答		
	度数	比率	度数	比率	度数	比率	
1年生	94	46.1	110	53.9	0	0.0	204
2年生	77	35.8	138	64.2	0	0.0	215
3年生	79	44.6	98	55.4	0	0.0	177
4年生	24	42.9	32	57.1	0	0.0	56
5年生以上	2	25.0	6	75.0	0	0.0	8
無回答	0	0.0	3	33.3	6	66.7	9
総計	276	41.3	387	57.8	6	0.9	669

<sup>55</sup> この関連性に統計的な有意差はみられない。

<sup>56</sup> この関連性に統計的な有意差はみられない。

<sup>57</sup> この関連性は統計的に有意である ( $\chi^2=10.6, df=1, p<0.01$ )。

学年 (Q37) と Q33-6「買い物や娯楽などの施設が少なく不便である」とのクロス集計の結果に同じく、Q33-3「人びとが気さくで親しみをもてる」の質問に対して、2年生のあいだで「そう思わない」の比率が高いが、全体としてはやはり学年別にとくに目だった違いはみられない<sup>58</sup>。5年生以上にこれらとは異なった数値が表れているが、対象サンプル数が少ないため、データの信頼性は欠けるだろう。

Q35	Q33-3						総計
	そう思う		そう思わない		無回答		
	度数	比率	度数	比率	度数	比率	
中国	22	61.1	14	38.9	0	0.0	36
近畿	16	59.3	11	40.7	0	0.0	27
山梨県	50	48.5	53	51.5	0	0.0	103
中部	42	45.7	50	54.3	0	0.0	92
関東	41	43.2	54	56.8	0	0.0	95
九州・沖縄	23	37.7	38	62.3	0	0.0	61
北海道	8	36.4	14	63.6	0	0.0	22
北陸	21	35.0	39	65.0	0	0.0	60
東北	32	34.0	62	66.0	0	0.0	94
四国	7	33.3	14	66.7	0	0.0	21
山梨県以外の甲信越	13	27.1	35	72.9	0	0.0	48
国外	1	50.0	1	50.0	0	0.0	2
無回答		0.0	2	25.0	6	75.0	8
総計	276	41.3	387	57.8	6	0.9	669

上の表は、対象者の出身地 (Q35) と Q33-3「人びとが気さくで親しみをもてる」をクロスさせたものである。「そう思う」の割合が高い順に並べた。すると、傾向として、山梨県よりも地理的に南または西の地方の出身者ではその比率が高く、逆に、北または東の地方の出身者では低い傾向にあることがわかる<sup>59</sup>。しばしば、北海道や東北の人たちは人柄が「やわらかい」といわれる。筆者自身も北海道出身なのだが、都留住民の、人との接し方などは少々きついつと感じる。(齋藤峻介)

下宿生の場合、暮らしやすさ (Q33-5「暮らしやすいと思う」) に対する評価には、居住地区、つまり下宿の立地環境が密接に関連しているのではないだろうか。ここで筆者は、「A, B, C 地区では D, E, F 地区やその他の地区に比べて暮らしやすいと感じる人が多い」という仮説を立てる。これは、A, B, C 地区にはスーパーマーケットやコンビニエンスストアなどの商業店舗が集中し、また学校までの距離も近いために、それらの地区に下宿する学生は「暮らしやすい」と感じる割合が高いと考えられるからである。反対に、D, E, F 地区や、その他の、学校から比較的に遠く街の中心から離れた地区に住む学生は、「暮らしにくい」と感じる傾向が高いのではないだろうか。次頁の表 12-26 は、Q2「あなたの下宿は、いわゆる『ブロック』分けによるとどの地区内にありますか」(下宿生対象) と、Q33-5「暮らしやすいと思う」のクロス表である。これによると、都留のまちに対する「暮らしやすさ」の評価には、居住地区による違いはみられないことが示された(「F 地区」「その他」で特異な数値が表れているが、いずれもセル度数が小さいため考察の対象からは除外する)。「暮らしやすさ」への回答は、ここでもやはり、イメージによる印象評価であって、具体的な生活実感を根拠としているのではないといえそうだ。(伊東弦太)

<sup>58</sup> この関連性に統計的な有意差はみられない。

<sup>59</sup> この関連性は統計的に有意である ( $\chi^2=20.8, df=11, p<0.05$ )。

表16-26 下宿の所在「ブロック」地区と都留イメージ「暮らしやすいと思う」(2分割)のクロス表

			都留イメージ「暮らしやすいと思う」(2分割)		合計
			そう思う	そう思わない	
下宿の所在「ブロック」地区	A地区	度数	62	74	136
		下宿の所在「ブロック」地区の%	45.6%	54.4%	100.0%
	B地区	度数	66	87	153
		下宿の所在「ブロック」地区の%	43.1%	56.9%	100.0%
	C地区	度数	26	37	63
		下宿の所在「ブロック」地区の%	41.3%	58.7%	100.0%
	D地区	度数	25	26	51
		下宿の所在「ブロック」地区の%	49.0%	51.0%	100.0%
	E地区	度数	5	7	12
		下宿の所在「ブロック」地区の%	41.7%	58.3%	100.0%
F地区	度数	4	1	5	
	下宿の所在「ブロック」地区の%	80.0%	20.0%	100.0%	
その他	度数	1	8	9	
	下宿の所在「ブロック」地区の%	11.1%	88.9%	100.0%	
わからない	度数	73	70	143	
	下宿の所在「ブロック」地区の%	51.0%	49.0%	100.0%	
合計	度数	262	310	572	
	下宿の所在「ブロック」地区の%	45.8%	54.2%	100.0%	

Q33-2 以下の各イメージ項目と都留のまちに対する選好度（Q33-1「都留の街が気に入っている」）との関連性を検討してみよう。次の表4は、Q33-8「のんびりし過ぎて物足りない」とQ33-1をクロス集計したものである。

Q33_8	Q33_1				総計
	「気に入っている」		「気に入らない」		
	度数	比率	度数	比率	
思う	136	42.4	185	57.6	321
思わない	231	67.9	109	32.1	340
総計	367	55.5	294	44.5	661

これによると、当然に予想された結果ではあるが、Q33-8「のんびりし過ぎて物足りない」に対して「そう思う」と答えた人では、「まちを気に入っている」の回答比率（42.4%）が低く、「そう思わない」と答えた人では、その比率（67.9%）が高い<sup>60</sup>。

次の表3は、Q33-7「さびれた感じがして活気がない」とQ33-1（都留のまちに対する選好度）のクロス集計の結果である。

<sup>60</sup> この関連性は統計的に有意である（ $\chi^2=43.7, df=1, p<0.01$ ）。

Q33_1					
Q33_7	「気に入っている」		「気に入らない」		総計
	度数	比率	度数	比率	
思う	236	48.9	247	51.1	483
思わない	131	72.8	49	27.2	180
総計	367	55.4	296	44.6	663

これによると、前頁の表 4 の結果と同様に、やはり、Q33-7「さびれた感じがして活気がない」に対して「そう思う」と答えた人では、「まちを気に入っている」の回答比率（48.9 %）が低く、「そう思わない」と答えた人では、その比率（72.8 %）が高い<sup>61</sup>。Q33-1の単純集計の結果（図 16-20）を念頭に置きながら、さらに詳しくみると、Q33-7「さびれた感じがして活気がない」に対して「そう思わない」と答えた人のなかで、「まちを気に入っている」と回答した人の比率（72.8 %）は7割以上に達しており、対象者全体でのその比率（55.4 %）を大きく上回っている。また、Q33-7に対して「そう思う」と答えた人の、まちに対する選好度は、たしかに「（気に入っているとは）思わない」のほうが多い（51.1 %）のであるが、賛否の比率は僅差にとどまっている。これらのことから、「さびれた感じがして活気がない」か否かは、まちへの選好度にとって、さほど重要な要因ではないと想像される。

（井口健太郎）

では、Q33-6「買い物や娯楽などの施設が少なく不便である」との関連性はどうか（表 16-27）。

表16-27 都留イメージ「買い物や娯楽などの施設が少なく不便である」(2分割)と都留イメージ「都留の街が気に入っている」(2分割)のクロス表

			都留イメージ「都留の街が気に入っている」(2分割)		合計
			そう思う	そう思わない	
都留イメージ「買い物や娯楽などの施設が少なく不便である」(2分割)	そう思う	度数 都留イメージ「買い物や娯楽などの施設が少なく不便である」(2分割)の %	323 54.1%	274 45.9%	597 100.0%
	そう思わない	度数 都留イメージ「買い物や娯楽などの施設が少なく不便である」(2分割)の %	44 66.7%	22 33.3%	66 100.0%
合計		度数 都留イメージ「買い物や娯楽などの施設が少なく不便である」(2分割)の %	367 55.4%	296 44.6%	663 100.0%

Q33-6の単純集計の結果によると（図 16-26）、対象者の9割（90.1 %）もが、買い物や娯楽施設に不便を感じているのであった。ところが、その圧倒的な不満は、表 16-27によると、必ずしもまちに対するネガティブ・イメージへと結びついているわけではない<sup>62</sup>。Q33-6「買い物や娯楽などの施設が少なく不便である」に対して「そう思う」と回答している人でも、その過半数（54.1 %）がまちを気に入っているのである。

残る他の項目との関連ではどうだろうか。Q33-2「時間がゆったりと流れている」とQ33-1「都留の街が気に入っている」（表 16-28）、Q33-3「人びとが気さくで親しみをもてる」とQ33-1（表 16-29）、

<sup>61</sup> この関連性は統計的に有意である（ $\chi^2=30.4, df=1, p<0.01$ ）。

<sup>62</sup> ただし、この関連性は10%水準では統計的に有意である（ $\chi^2=3.8, df=1, p<0.1$ ）。

表16-28 都留イメージ「時間がゆったりと流れている」(2分割)と都留イメージ「都留の街が気に入っている」(2分割)のクロス表

			都留イメージ「都留の街が気に入っている」(2分割)		合計
			そう思う	そう思わない	
都留イメージ「時間がゆったりと流れている」(2分割)	そう思う	度数 都留イメージ「時間がゆったりと流れている」(2分割)の%	322 60.0%	215 40.0%	537 100.0%
	そう思わない	度数 都留イメージ「時間がゆったりと流れている」(2分割)の%	45 35.7%	81 64.3%	126 100.0%
合計		度数 都留イメージ「時間がゆったりと流れている」(2分割)の%	367 55.4%	296 44.6%	663 100.0%

表16-29 都留イメージ「人びとが気さくで親しみをもてる」(2分割)と都留イメージ「都留の街が気に入っている」(2分割)のクロス表

			都留イメージ「都留の街が気に入っている」(2分割)		合計
			そう思う	そう思わない	
都留イメージ「人びとが気さくで親しみをもてる」(2分割)	そう思う	度数 都留イメージ「人びとが気さくで親しみをもてる」(2分割)の%	206 74.6%	70 25.4%	276 100.0%
	そう思わない	度数 都留イメージ「人びとが気さくで親しみをもてる」(2分割)の%	161 41.6%	226 58.4%	387 100.0%
合計		度数 都留イメージ「人びとが気さくで親しみをもてる」(2分割)の%	367 55.4%	296 44.6%	663 100.0%

表16-30 都留イメージ「暮らしやすいと思う」(2分割)と都留イメージ「都留の街が気に入っている」(2分割)のクロス表

			都留イメージ「都留の街が気に入っている」(2分割)		合計
			そう思う	そう思わない	
都留イメージ「暮らしやすいと思う」(2分割)	そう思う	度数 都留イメージ「暮らしやすいと思う」(2分割)の%	236 79.5%	61 20.5%	297 100.0%
	そう思わない	度数 都留イメージ「暮らしやすいと思う」(2分割)の%	131 35.9%	234 64.1%	365 100.0%
合計		度数 都留イメージ「暮らしやすいと思う」(2分割)の%	367 55.4%	295 44.6%	662 100.0%

Q33-5「暮らしやすいと思う」とQ33-1(表16-30)、のいずれのクロス表においても、それぞれの独立変数に対して「そう思う」と答える人では、「都留のまちを気に入っている」の比率が高く、「そう思

わない」の回答者では、「(まちを気に入っているとは) 思わない」の比率が高い<sup>63</sup>。とりわけ、Q33-3「人びとが気さくで親しみをもてる」とQ33-1(表 16-29)、Q33-5「暮らしやすいと思う」とQ33-1(表 16-30)のクロス表においては、それぞれの独立変数に対して「そう思う」と答える人のなかでの、「都留のまちを気に入っている」の回答比率は70%以上で、表 16-30では80%近く(79.5%)に達している。

ここまでの分析結果を整理すると、Q33の設問間で、都留のまちに対する選好度(Q33-1「都留の街が気に入っている」との関連性がみられる変数は、Q33-8「のんびりし過ぎてもの足りない」(p.291表 4)、Q33-7「さびれた感じがして活気がない」(p.292表 3)、Q33-2「時間がゆったりと流れている」(表 16-28)、Q33-3「人びとが気さくで親しみをもてる」(表 16-29)、Q33-5「暮らしやすいと思う」(表 16-30)である。これらのなかでもとりわけ、Q33-3「人びとが気さくで親しみをもてる」とQ33-5「暮らしやすいと思う」は、まちに対する選好度を決定づける大きな要因になっていると思われる。ここでも人間関係に関する変数が鍵のひとつに含まれていることは興味深い。(担当教員)

最後に、都留のまちに対する選好度(Q33-1「都留の街が気に入っている」と、将来の居住希望(Q34「もしも自分の職場が通勤圏内にあるとしたら、将来、都留市に住みたいと思いますか、思いませんか」)との関連性を確認しておこう(表 16-31)。

表16-31 都留イメージ「都留の街が気に入っている」と将来、都留市に住みたいと思うか否かのクロス表

			将来、都留市に住みたいと思うか否か			合計	
			住みたいと思う	どちらともいえない	住みたいとは思わない		
都留イメージ「都留の街が気に入っている」	そう思う	度数 都留イメージ「都留の街が気に入っている」の%	17 27.9%	21 34.4%	23 37.7%	61 100.0%	
	まあそう思う	度数 都留イメージ「都留の街が気に入っている」の%	17 5.6%	115 37.6%	174 56.9%	306 100.0%	
	あまり思わない	度数 都留イメージ「都留の街が気に入っている」の%	1 .5%	51 23.4%	166 76.1%	218 100.0%	
	そう思わない	度数 都留イメージ「都留の街が気に入っている」の%	1 1.4%	10 13.5%	63 85.1%	74 100.0%	
合計			度数 都留イメージ「都留の街が気に入っている」の%	36 5.5%	197 29.9%	426 64.6%	659 100.0%

分析結果をみると、当然に予想された結果ではあるが、都留のまちを気に入っている人ほど、将来、「都留に住みたいと思う」の比率が高く、そうでない人では、「住みたいとは思わない」の比率が高まるという傾向がみられる<sup>64</sup>。ただし、Q33-1に対して「そう思う」と答えた人の場合でも、「住みたいと思う」の比率は27.9%にとどまる。やはり、都留のまちが気に入っているということと、将来、居住地として都留を選択するということとは、別の次元の問題として捉えられているのだろう。もうひとつ目を引くのは、「都留の街が気に入っている」に対して「そう思わない」「あまり思わない」と答えた人の結果である。筆者自身は、都留のまちを気に入っていないのならば、ほぼ100%に近い比率

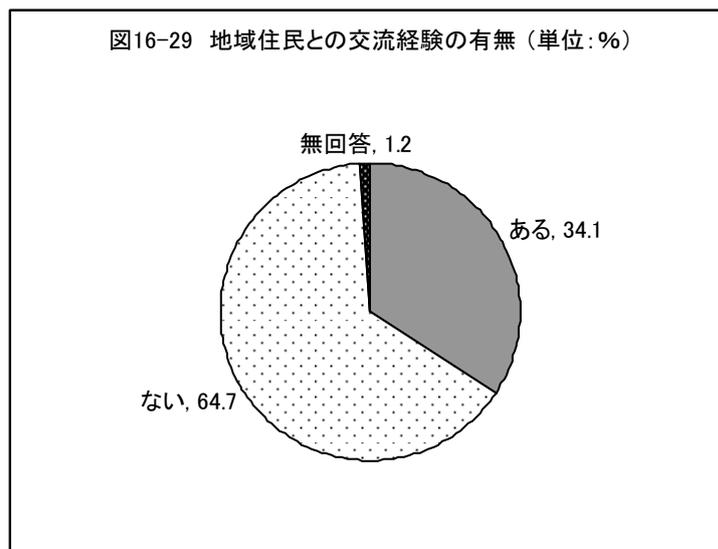
<sup>63</sup> いずれのケースでも、2変数間の関連性は統計的に有意である(表 16-28:  $\chi^2=24.3, df=1, p<0.01$ , 表 16-29:  $\chi^2=71.1, df=1, p<0.01$ , 表 16-30:  $\chi^2=125.8, df=1, p<0.01$ )。

<sup>64</sup> これら2つの変数間の関連性は統計的に有意である( $\chi^2=103.5, df=6, p<0.01$ )。

で「住みたいとは思わない」と答える人が出るだろうと予想していた。しかし集計結果をみると、「そう思わない」と答えた人のケースでも、約15%以上の人「どちらともいえない」もしくは「住みたいと思う」と答えている。それはなぜだろうか。筆者自身の実感から真っ先に想像に浮かぶ可能性として、家賃などの生計維持費があまりかからないというメリットが考えられるのではないだろうか。アルバイトをあまりせず、仕送りに頼るところが多い人（Q17およびQ5の集計結果を参照）でも、そここの生活程度を維持することができるという現実がそのことを証明している。さまざまな観点を考慮に入れながら改めて考えてみると、「都留の街が気に入っている」に対して「そう思う」と答える人の30%近くが、「通勤圏内であれば将来、都留に住みたい」と考えているということは、客観的に判断するならば、この比率はむしろ、地方都市の大学生による回答としては平均的水準あるいはそれ以上の値と解釈されるのではないだろうか。（佐藤秀幸）

### 地域住民との交流

文大生はどの程度、地域住民との交流を体験しているのだろうか。図16-29は、Q32「サークル活動または大学主催の行事を通じて地域住民との交流を経験したことがありますか」の集計結果である。



筆者の実感としては、文大生と都留市民のあいだでは、けっこう盛んに交流がもたれていると思っていたが、結果をみても、「ある」と答えた人（34.1%）は想像よりも少ない。「ない」と答えた人（64.7%）の半数程度にとどまっている。（佐藤景輔）

文大生たちは、その多くが都留市内に下宿しているにもかかわらず、地域に目を向けることをあまりしてないといえるのではないだろうか。これほど多くの学生が大学周辺に下宿しているという現象は都留文科大学の特色であり、また、都留のまちの特色でもあると思う。地域社会とのつながりは、都留文科大学が市立の大学であることから切り離して考えることはできない。しかし、現状はというと、学生たちは市民との交流にあまり積極的ではないのが現実のようだ。（古宮宏美）

自宅通学生と下宿生とのあいだで地域交流経験に違いはあるだろうか。Q1（自宅通学・下宿の別）とQ32（地域交流経験の有無）のクロス集計の結果をみても（表16-32）。これによると、地域交流経験の有無には自宅通学か下宿かによって違いがあり、その経験が「ある」と答えた比率は、自宅通

学者（20.5 %）よりも下宿生（35.8 %）のほうが高い<sup>65</sup>。自宅通学生の場合、やはり、通学時間による制約が大きいのだろう。とはいえ、下宿生の場合でも、地域交流を経験している人は約3分の1にとどまっている。（河西麻利子）

表 16-32 自宅通学・下宿の別と「サークル・行事を通じて地域交流したことがある」

Q1	Q32						総計
	ある		ない		無回答		
	度数	比率	度数	比率	度数	比率	
自宅通学	15	20.5	57	78.1	1	1.4	73
下宿	213	35.8	375	63.0	7	1.2	595
無回答	0	0.0	1	100.0	0	0.0	1
総計	228	34.1	433	64.7	8	1.2	669

次の表 2 は、Q32（地域交流経験の有無）と、Q33-1（都留のまちに対する選好度）とのクロス集計の結果である。Q33-1 のデータに関しては、「そう思う」「まあそう思う」という回答を「都留の街が気に入っていると思う」に、「あまり思わない」「そう思わない」という回答を「都留の街が気に入っていると思わない」とした。

表 2 地域住民との交流の有無と「都留の街が気に入っている」のクロス表

Q32	Q33-1						総計
	都留の街が気に入っていると思う		都留の街が気に入っていると思わない		無回答		
	度数	比率	度数	比率	度数	比率	
交流したことがある	144	63.2	84	36.8	0	0.0	228
交流したことがない	222	51.3	211	48.7	0	0.0	433
無回答	1	12.5	1	12.5	6	75.0	8
総計	367	54.9	296	44.2	6	0.9	669

検定統計量 8.54114 は棄却域に入る。よって、これら 2 つの変数間には関連性がある<sup>66</sup>。これによると、地域住民との交流経験がある人のほうが、「都留の街が気に入っていると思う」と答える傾向が高い（63.2 %）といえる。交流経験がない人では、交流経験のある人に比べて「都留の街が気に入っていると思わない」と答える比率（48.7 %）が高い。地域の人びとと交流することで、都留のまちへの愛着がわいたり、関心が高まったりするためではないだろうか。もうひとつ、表 2 から読み取れる重要な点は、地域住民との交流経験がない人では、都留のまちが気に入っているか否かの比率にあまり差がないことである（「思う」51.3 %、「思わない」48.7 %）。地域交流を経験することは、たしかに、まちに対する選好度を高める効果をもたらすようである。換言すれば、「地域と何らかの関わりがある人（あるいはまた、関わろうとしている人）は、都留のまちを気に入るようになる」、そのような傾向が強いといえる。（櫻井 渚・井口健太郎）

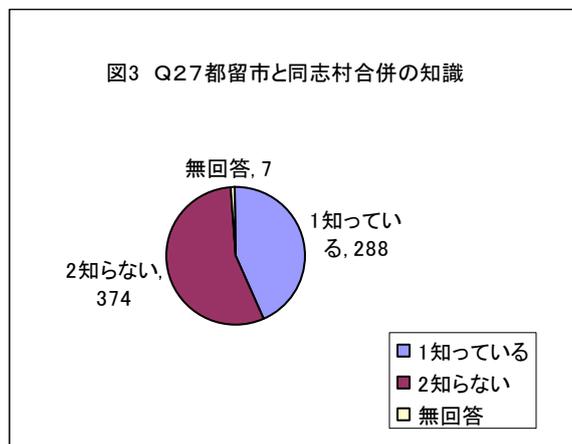
<sup>65</sup> これら 2 つの変数間の関連性は統計的に有意である（ $\chi^2=6.7, df=1, p<0.01$ ）。

<sup>66</sup>  $\chi^2=8.5, df=1, p<0.01$

### 16.3.5 調査班テーマ

#### 地域概況： 地域社会への関心度

都留市では、現在、隣接する道志村との合併に関する協議が進められている（第1章）。この問題を文大生のどれくらいの人知っているだろうか。次の図3は、Q27「現在、都留市と道志村が合併に向けて協議を進めていることを知っていますか」の集計結果をグラフに表したものである。

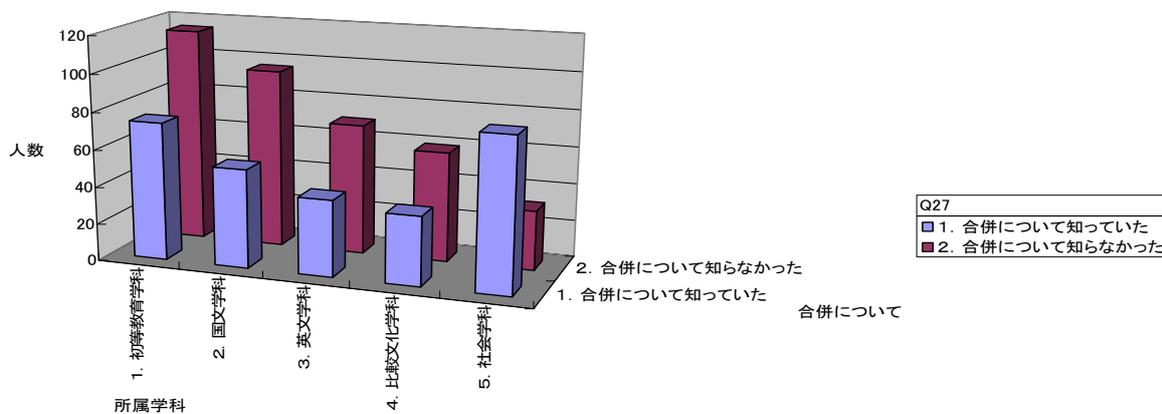


これによると、自分が暮らす（／通う）まちの合併問題について、55.9%の学生が知らないという結果となった。地域の問題に対する関心の薄さが読み取れると言えるのではないだろうか。考えられる背景として、「平成の大合併」によって全国各地で合併協議が盛んな昨今、このような話題はある意味で新鮮味に欠ける…、そういったことも結果に影響しているのかも知れない。

(河西麻利子・古宮宏美・佐野 匠)

所属学科によって地域問題への関心度に違いがあるだろうか。仮説としては、「社会学科に所属している学生は、社会に対する関心自体が高く、行政について学ぶ機会も多いことから、他の学科に所属している人に比べて市町村合併について興味をもち、また、この合併協議についても知っている人が

データの個数 / 調査票番号

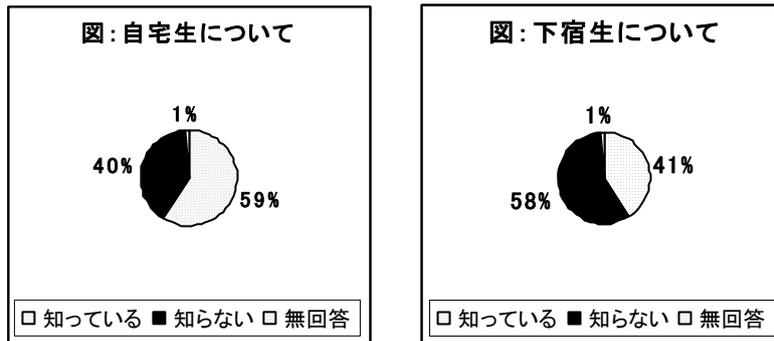


Q38

多いのではないか」と予想される。所属学科とQ27（合併問題の認識）とのクロス分析の結果によると（上のグラフ）、この仮説は証明された<sup>67</sup>。社会科学以外の学科では、「知らなかった」の回答のほが多く、その比率は60～65%の範囲でほぼ一定であるのに対して、予想どおり、社会科学に所属する人では、「知っている」の回答のほが多く、しかもその比率（71.9%）は圧倒的高さである。

（小長谷 泰右）

自宅通学・下宿の別によって違いがみられるだろうか。Q1（自宅通学・下宿の別）とQ27（合併問題の認識）をクロス分析してみると（次の2つの図）、



むしろ、下宿をして都留市に住んでいる学生よりも、自宅から通ってきている学生のほうが、まちの合併問題について知っているという現実がみえてくる。有効比率でみると、自宅通学生では「知っている」の回答が59.7%、「知らなかった」は40.3%であるのに対して、下宿生では、「知っている」が41.6%、「知らなかった」は58.4%である。2つの回答は、自宅通学生と下宿生とのあいだで、ほぼ同比率で逆転するかたちとなっている。

なぜ、このような分析結果となったのだろうか。可能性としてまず思い浮かぶのは、下宿生の新聞購読率の低さである。新聞をとってれば、地元紙はもとより、全国紙でも地方版や「地方版」を通じて都留市の合併問題に関する記事を目にする機会があるだろうし、折り込みで市の広報誌を入手することもあるだろう。その新聞購読率が、データによって確かめたわけではないが生活実感からすれば、下宿生のあいだではかなり低いと思われる。下宿生の場合、テレビのニュースをあまり観ない、ということもあるだろう。一人暮らしをしていると、どうしても自分の興味のある番組ばかり観てしまい、ニュースやいわゆる教養番組を観ることから遠ざかってしまう。実際、筆者自身もそのひとりである。また、都留市に住んでいるということがあまりにも当たり前のことになりすぎて、興味がわかなくなってしまうというのも原因のひとつに数えることができるだろう。さらに重要なのは、自宅通学者にはいっしょに暮らす家族がいるということである。たとえ興味のないことでも、家族との会話や団らんの時間に、地域に関することが話題にのぼれば、自然と耳に入ってくるであろう。これらの事情の違いが、上に述べた、合併問題に対する20%近い認識の差を生んだと考えられる。

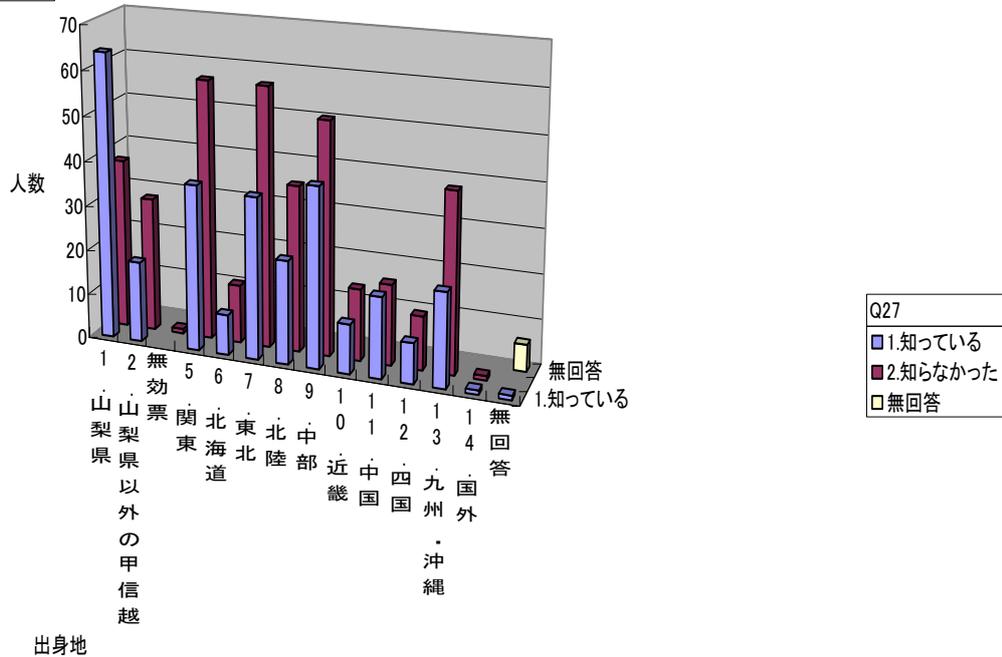
（座馬真代・石若文乃・河西麻利子）

まちの合併問題について、55.9%の学生が知らないという結果には、学生の8割以上が山梨県外の出身者によって占められているという大学固有の事情も影響しているのではないだろうか。つまり、合併協議などといった話題は地元の人にとってこそ重要であり、それだけに地元出身者はその情報に触れる機会も多いと考えられるということだ。この仮説を裏付けるのが次のグラフである。

<sup>67</sup> これら2つの変数間の関連性は統計的に有意である ( $\chi^2=45.6, df=4, p<0.01$ )。

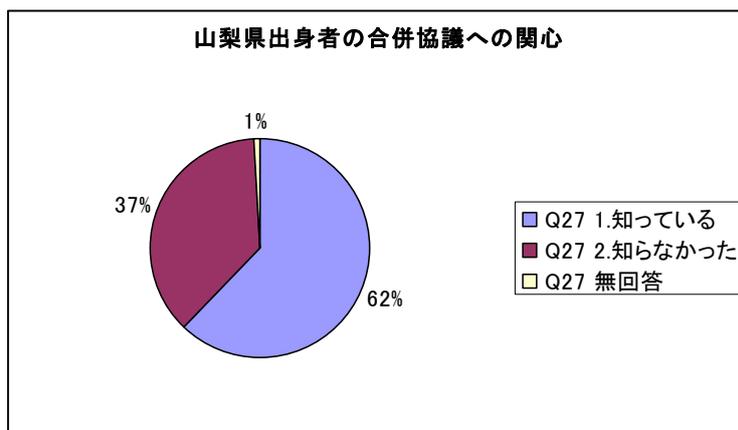
### 出身地と合併協議への関心の比較

データの個数 / 調査票番号



Q35

上の図は、対象者の出身地（Q35）とQ27（合併問題の認識）をクロス集計してグラフにしたものである。これによると、都留市と道志村の合併問題を「知っている」と答えた人が「知らなかった」人を上回ったのは、山梨県出身のグループただひとつである<sup>68</sup>。



山梨県出身者のみを取り出して、Q27 への回答を集計してみると（上の円グラフ）、地元出身者のあいだでの合併問題に対する関心の高さがわかる。視点を変えて解釈するならば、まちの合併問題につい

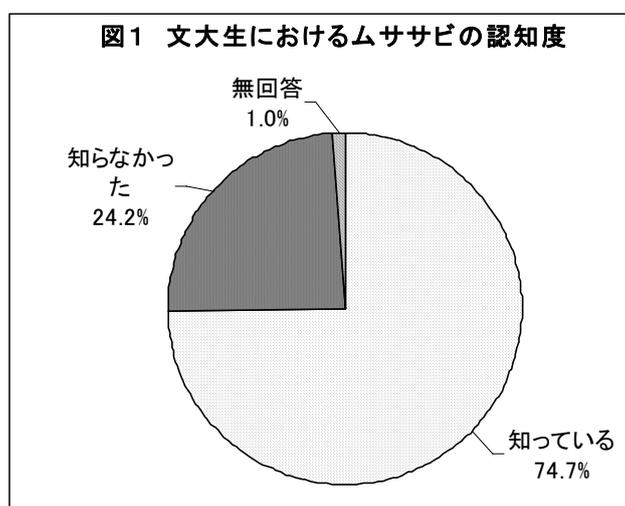
<sup>68</sup> これら2つの変数間の関連性は統計的に有意である ( $\chi^2=21.5, df=11, p<0.05$ )。

て過半数の学生が知らないという結果には、文大生固有の傾向（地域の問題に対する関心の薄さ）というよりも、対象者の出身地別構成がより直接的に反映されている、と考えることもできるだろう。  
（佐野 匠）

### 自然と観光： 自然環境・観光資源への関心度

本調査では、都留の自然環境に対する文大生の関心や意識を直接的に問う設問は設けられていない。それを代替するものとして、Q28（ムササビ生息の認識）の設問を取り上げることにしよう。

都留市商工会の「ポイントカード」にムササビが描かれていたり、「うらやま観察会」などの市民活動が大学内でも紹介されたりしている。また、学内にはムササビを観察するサークルやゼミなどもある。そういったことを考えると、多くの文大生が、都留にムササビが生息していることを知っているのではないか。次の図1は、Q28「都留の自然環境を象徴するものとして、ムササビの生息が有名ですが、あなたはそのことを知っていますか」の集計結果をグラフに表したものである。



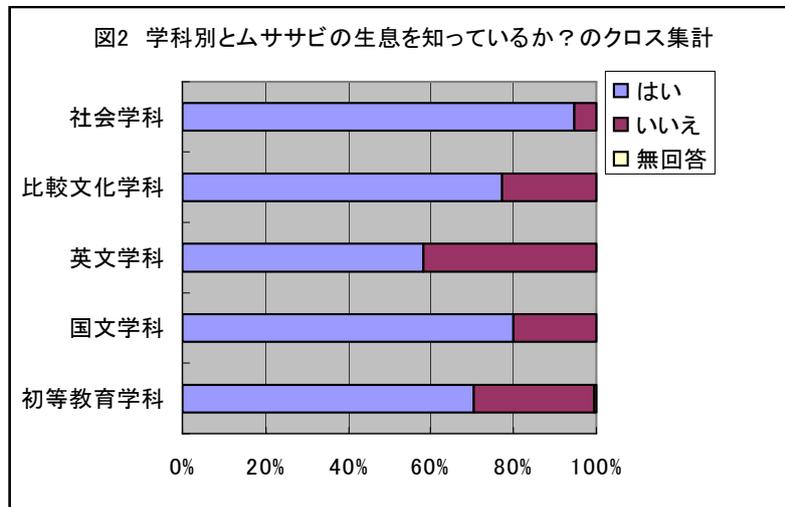
これによると、「知っている」と答えた人が全体の約75%を占めており、やはり多くの文大生がムササビの生息のことを認識しているようである。（江口拓郎・井川絵美・小野陽一・神村幸恵・北川瑠子）

学年とクロスさせると、次の表1のように表される。学年が上がるにつれて、「知っている」の回答比率が高くなる傾向がうかがえるが、とくに際立った違いではない<sup>69</sup>。（江尻明德・北川瑠子）

		Q28				
Q37	1. 知っている		2. 知らなかった		無回答	総計
	度数	比率	度数	比率		
1. 1年生	149	73.0	55	27.0		204
2. 2年生	155	72.1	59	27.4	1 0.5	215
3. 3年生	140	79.1	37	20.9		177
4. 4年生	47	83.9	9	16.1		56
5. 5年生以上	8	100.0				8
無回答	1		2		6	9
総計	500		162		7	669

<sup>69</sup> この関連性に統計的な有意差はみられない。

学科別にみると（次の図2）、やはり、地域社会について学ぶ機会が多い社会学科で、知っている人の比率が94.7%と突出している。もっとも低い英文学科でも6割近く（58.0%）の人がムササビの生息について知っている<sup>70</sup>。（相沢翔平・江口拓郎・北川瑤子・佐藤景輔）



自宅通学生と下宿生によってムササビ生息の認識に違いがあるだろうか。クロス集計の結果をみると（表16-33）、自宅通学・下宿の別による違いはみられない。県外出身者がほとんどを占める下宿生でも、75.0%の人が知っている。（河西麻利子・石若文乃・小野陽一）

表16-33 自宅通学・下宿の別と「ムササビの生息の認識」のクロス表

Q1	Q28						総計
	1 知っている		2 知らない		無回答		
	度数	比率	度数	比率	度数	比率	
1 通学	54	74.0	19	26.0	0	0.0	73
2 下宿	446	75.0	142	23.9	7	1.2	595
無回答	0	0.0	1	100.0	0	0.0	1
総計	500	74.7	162	24.2	7	1.0	669

次に、都留市内の観光資源に対する文大生の関心度を探ってみよう。Q29では「次にあげる都留市内の観光地・行楽施設のうち、あなたが訪れたことのあるものをすべて選んでください」の質問文により、市内のおもな文化・スポーツ施設、観光地、行楽施設などへの訪問経験を複数選択により尋ねている。実際の訪問経験としたのは、学生生活のアクティブさの度合をみる意図にもよる。選択肢として提示したのは、任意に選んだ次の12のスポットと「いずれも訪ねたことがない」である。

1. ミュージアム都留
2. 情報未来館
3. ふるさと会館
4. 商家資料館
5. 田原の滝
6. 都留市総合運動公園楽山球場
7. 勝山城跡
8. リニア見学センター
9. 尾県郷土資料館
10. 鹿留溪谷
11. 宝の山ふれあいの里
12. 芭蕉月待ちの湯
13. いずれも訪ねたことがない

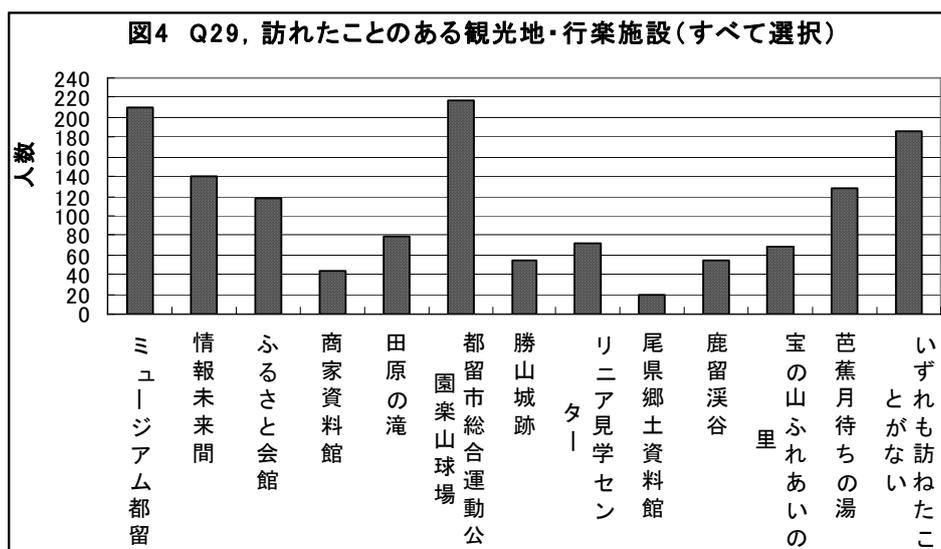
<sup>70</sup> この関連性は統計的に有意である ( $\chi^2=45.5, df=4, p<0.01$ )。

次の表 29 はその集計結果をまとめたものである。無回答は度数 17 で、対象者全体（n=669）に対する比率は 2.5%である。したがって、表 29 に示される比率は、ほぼそのまま対象者全体の回答を反映しているとみなすことができる。また、それをグラフに表すと下の図 4 のように示される。

	度数	パーセント	ケースのパーセント
ミュージアム都留	210	15.1	32.2
情報未来館	140	10.1	21.5
ふるさと会館	118	8.5	18.1
商家資料館	43	3.1	6.6
田原の滝	79	5.7	12.1
都留市総合運動公園楽山球場	217	15.6	33.3
勝山城跡	55	4.0	8.4
リニア見学センター	71	5.1	10.9
尾県郷土資料館	19	1.4	2.9
鹿留溪谷	55	4.0	8.4
宝の山ふれあいの里	68	4.9	10.4
芭蕉月待ちの湯	128	9.2	19.6
いずれも訪ねたことがない	185	13.3	28.4
合計	1388	100.0	

有効数	652
欠損値	17
合計	669



集計結果にしたがって、度数の高い順番に各選択肢を並べ替えると、次のように示される。

- |                 |             |
|-----------------|-------------|
| ① 都留市総合運動公園楽山球場 | ⑦ リニア見学センター |
| ② ミュージアム都留      | ⑧ 宝の山ふれあいの里 |
| ③ 情報未来館         | ⑨ 勝山城跡／鹿留溪谷 |
| ④ 芭蕉月待ちの湯       | ⑩ 商家資料館     |
| ⑤ ふるさと会館        | ⑪ 尾県郷土資料館   |
| ⑥ 田原の滝          |             |

Q29 に対する有効数（いずれか1つでも回答した人の人数）は 652 であり、総度数（すべての回答のべ個数）は 1,388 である。これら 2 つから、それぞれ「いずれも訪ねたことがない」の度数（185）

を差し引いた数によって、該当者 1 人当たりの選択個数を計算すると、残る 12 の選択肢のうち平均して 1 人当たり 2.6 箇所への訪問経験をもっていることになる。(北村尚洋・江口拓郎・北川瑠子)

もっとも多くの人が訪れたことがあるのは「楽山球場」(33.3%)である。次に多いのは「ミュージアム都留」(32.2%)である。若干の開きがあつて「情報未来館」(21.5%)、「芭蕉月待ちの湯」(19.6%)、「ふるさと会館」(18.1%)と続いている。反対に、訪れたことのある人が少ないのは「尾県郷土資料館」(2.9%)、「商家資料館」(6.6%)、「勝山城跡」「鹿留溪谷」(同率で 8.4%)などである。施設・スポットによって度数に開きがみられる。楽山球場やミュージアム都留には 200 人を超える対象者が訪れたことがあるのに対して、商家資料館では 40 人強、もっとも少ない尾県郷土資料館では 20 人にも満たない。また、「いずれも訪ねたことがない」の回答は 28.4%にのぼる。

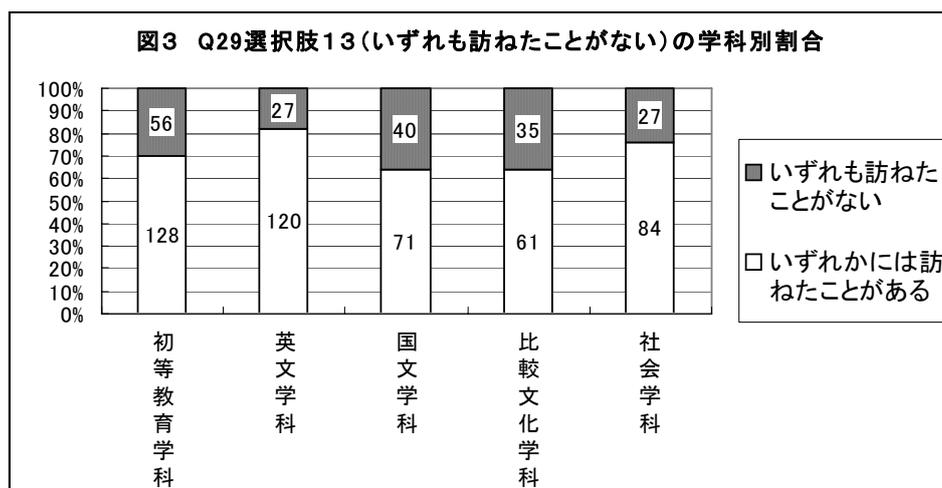
楽山球場は、体育の授業やサークル活動などでの利用頻度が高いため、多くの文大生が訪れているのではないかと。第 2 順位のミュージアム都留は、駅に近い場所にあるためではないだろうか。それらの 2 つは、やはり、大学に近いことも理由のひとつと考えられる。情報未来館への訪問経験が多いのは市立図書館と同じ建物内にあるためではなかろうか。(江尻明德・江口拓郎・北川瑠子)

芭蕉月待ちの湯を訪れたことがある人が意外に多いと思った。この施設は山間地にあり、都留市内から離れているので、行ったことがある人は少ないと思っていた。少し遠いが、大きなお風呂などがあることから日ごろの疲れを取るために行く人がいるのだろう。(北村尚洋・神村幸恵・相沢翔平)

全国的な注目が集まる場所にもかかわらず、リニア見学センターを訪れたことのある人が意外にも少ない。同センターは大学から遠く、次世代の乗り物といっても、なかなか試乗できるチャンスが少ないことも理由として考えられるかもしれない。尾県郷土資料館や鹿留溪谷の場合、地理的位置が市街地から離れており、駅からも距離があることがネックになっていると思われる。

(江尻明德・井川絵美・北川瑠子)

ちなみに、Q29 の選択肢のうち、「いずれも訪ねたことがない」に対する回答だけを取り出して学科別にみると、次の図 3 のように示される。



※ここでは選択肢 13 に印がなかったものを、「いずれかには訪ねたことがある」とした。

これによると、国文学科、比較文化学科で「いずれも訪ねたことがない」という人がやや多く、英文学科、社会学科でその割合が低い。(相沢翔平)

Q29の集計結果から、文大生は、都留市にいながら市内にある観光地を訪ねたり、文化・行楽施設を利用したりすることがあまりないという傾向がうかがえる。上位に挙げられた楽山球場やミュージアム都留にしても、対象者の3割程度しか訪れていないのである。これらの訪問経験のなかには、授業や実習、フィールドワークなどによる、いわば非自発的な機会も少なからず含まれていると想像される。実用的な行楽施設は訪れたことがあるのだが、自然や文化を目玉とする観光施設に対する関心がとくに弱いようだ。また、「いずれも訪れたことがない」と答えた人が3割近くを占めていることも注目すべきことである。

これらの理由として考えられるのは、まず、観光地・行楽施設が不便な場所にあるという点である。尾県郷土資料館や宝の山ふれあいの里、芭蕉月待ちの湯、鹿留溪流などは山の奥地にあるため、車やバスを利用しなければ行くことはできない。文大生のほとんどが下宿で、バイクや自動車などの所有は例外的であり、下宿生の7割近くが徒歩や自転車を移動手段としている(p.238)。それに対して、市内の自然や歴史を活かした観光スポットは大学から離れているものが多い。交通手段が限られている状況のなかで、わざわざバスや電車を利用してまで訪ねるだけの価値を見出せないと思っているのだろう。(江口拓郎・神村幸恵・井川絵美・相沢翔平・小野陽一・源田明子・小林由佳)

しかし、街中であってアクセスが容易な施設でも、商家資料館や勝山城跡など、歴史的・文化的な性格をもつ施設に対して訪問経験が少ない。やはり、何といても大学生は遊び盛りの年齢である。その「遊びたい」という欲求が、現実には、市内の観光地や行楽施設では満たされないということなのだろう。(源田明子・小林由佳)

### 歴史：地域の歴史に対する関心度

第8～9章で都留の歴史について考察した。そこに示されたように、由緒ある土地がらであることが、都留のまちの大きな特色として挙げられる。では、文大生は都留の歴史に対してどの程度の関心や知識をもっているのだろうか。Q30では「次にあげる都留の歴史に関することからのうち、あなたが耳にしたことがあるものをすべて選んでください」の質問文により、都留の歴史に関することらに対する認識を複数選択により尋ねている。選択肢として提示したのは「秋元氏」「お茶壺道中」「谷村城址」「松尾芭蕉」「勝山城跡」の5項目と「どれも知らない」である。次の表1は、その集計結果をまとめたものである。無回答は度数12で、対象者全体(n=669)に対する比率は1.8%である。したがって、この場合も、表1に示される比率は、ほぼそのまま対象者全体の回答を反映しているとみなすことができる。

	度数	パーセント	ケースのパーセント
	104	6.9	15.8
	360	24.0	54.8
	237	15.8	36.1
	446	29.7	67.9
有効数	657	263	17.5
欠損値	12	90	6.0
合計	669	1500	100.0

集計結果をみると、前節で考察したQ29（市内観光地・行楽施設への訪問経験）の結果よりも、全般的に高い比率を示している<sup>71</sup>。第1順位の「松尾芭蕉」の回答比率は67.9%で、もっとも低い「秋元氏」では、15.8%の比率である。また、「どれも知らない」の回答は13.7%である。認識度の高いものから降順に並べると、「松尾芭蕉」（67.9%）、「お茶壺道中」（54.8%）、「勝山城跡」（40.0%）、「谷村城址」（36.1%）、「秋元氏」（15.8%）の順となる。

これらのなかで、「松尾芭蕉」の認識度が突出して高い。それ以外では「お茶壺道中」の比率の高さが目立つが、これは、毎年秋に行われる「産業まつり」で当時の道中行列のようが演じられ、八朔まつりの大名行列と並んで都留市の観光イベントとなっていることが、認識度の高さにつながっているものと思われる。（志村 渚・源田明子・小林由佳・大柴有希・北村尚洋・石川陽一）

「秋元氏」「お茶壺道中」「谷村城址」「勝山城跡」の4つは、歴史的事実としては相互に関連が深いことがらである。もしも、都留の歴史についてある程度の知識をもつ人であれば、これら4つの項目間に認識度の違いはさほど生じないものと想像される。しかし集計結果をみると、上述の事情もあってか「お茶壺道中」の知名度が高いとしても、「谷村城址」と「勝山城跡」の知名度は40%以下の比率にとどまっている。「秋元氏」にいたっては、耳にしたことがあるのはわずか15.8%にすぎない。これらの認識度のバラつきから判断すると、4つのことがらは、ひとつの脈略に結び付けられる関連事項としてではなく、それぞれに切り離されたいわば断片的知識として、「なんとなく耳にしたことがある」という程度に受け止められている可能性が高いのではないだろうか。いっぽう、「松尾芭蕉」に対する認識度が際立って高いのはなぜだろうか。考えられる可能性としては2点挙げられる。第一に、松尾芭蕉は誰もが知っているであろう有名な俳人である。そのような有名人が「かつて都留（当時は谷村）に滞在していたことがある」と聞けば、記憶に残りやすいと思われる。そのために「耳にしたことがある」と回答する人は増える。もうひとつの理由として、誰もが知るほどの知名度のゆえに、設問の趣旨から外れて回答比率が底上げされた可能性も考えられる。選択肢のなかで「松尾芭蕉」の文字から受けるインパクトがあまりにも強く、「都留の歴史に関することがらのうち」という質問の意図を忘れて反射的に選んでしまった人も少なくないのではないか。たとえば、もしも仮にその選択肢が「松尾芭蕉が谷村で詠んだ句」であったとすれば、はたして同じような回答比率が得られたであろうか。「松尾芭蕉」に対する認識は、必ずしも具体的史実に関連付けられて理解されているとは限らない、という可能性も否定できないのである。（大橋美穂）

都留の歴史的事がらに対する認識度は学年によって異なるだろうか。Q30の選択肢ごとに回答数をそれぞれ学年別に集計し、各学年の回答者数に対する比率を算出すると、次の5表に示される。

Q31-1 秋元氏	度数	パーセント	Q31-2 お茶壺道中	度数	パーセント
1年	22	10.8	1年	108	52.9
2年	33	15.3	2年	100	46.5
3年	34	19.2	3年	109	61.6
4年	10	17.9	4年	37	66.1
5年以上	4	50.0	5年以上	5	62.5
無回答	1		無回答	1	
総計	104		総計	360	

<sup>71</sup> Q29では認識度（観光地・行楽施設を知っているか否か）ではなく実際の訪問経験を尋ねているので、ここでは単純に比較することはできない。

Q31-3 谷村城址	度数	パーセント
1年	60	29.4
2年	68	31.6
3年	78	44.1
4年	24	42.9
5年以上	6	75.0
無回答	1	
総計	237	

Q31-4 松尾芭蕉	度数	パーセント
1年	127	62.3
2年	145	67.4
3年	128	72.3
4年	39	69.6
5年以上	6	75.0
無回答	1	
総計	446	

Q31-5 勝山城址	度数	パーセント
1年	61	29.9
2年	79	36.7
3年	81	45.8
4年	34	60.7
5年以上	6	75.0
無回答	2	
総計	263	

全体としてみれば、学年が上がるに連れて、各項目に対する認知度も高くなるように思われる。

(石川陽一)

Q30の選択肢のうち、「どれも知らない」に対する回答だけを取り出して学年別にみると、次の表2のように示される。これによると、「どれも知らない」を選んだ人は、1年生15.2%、2年生15.3%、3年生10.7%、4年生8.9%と、学年が上がるに連れて比率が低くなる傾向がうかがわれるが、その差はわずかな範囲にとどまる<sup>72</sup>。(志村 渚・大橋美穂)

表2 回答者の学年と「Q30でどれも知らないと答えた人」のクロス表

Q37	Q30 6						総計
	どれかは知っている		どれも知らない		無回答		
	度数	比率	度数	比率	度数	比率	
1年生	170	83.3	31	15.2	3	1.5	204
2年生	180	83.7	33	15.3	2	0.9	215
3年生	157	88.7	19	10.7	1	0.6	177
4年生	51	91.1	5	8.9	0	0.0	56
5年生以上	7	87.5	1	12.5	0	0.0	8
無回答	2	22.2	1	11.1	6	66.7	9
総計	567	84.8	90	13.5	12	1.8	669

学科別ではどうだろうか。次の表3は、Q30の選択肢のうち、「どれも知らない」に対する回答だけを取り出して学科別に集計した結果である。これによると、初等教育学科、英文学科、比較文化学科の3学科では、「どれも知らない」を選んだ人の比率はいずれも17%台である。それに対して、社会学科では10.5%と低く、さらに国文学科では5.4%にまで下がる。地域社会について学ぶ機会が多いと思われる社会学科の結果は自然に理解されるところだとしても、それ以上に国文学科で「どれも知らない」の回答が少ないのは、やはり、国文学を専攻する人は日本の歴史についても関心が高い、ということなのであろう<sup>73</sup>。(志村 渚・大柴有希)

<sup>72</sup> 試みに統計的検定を行ってみると、この関連性に有意差はみられない。

<sup>73</sup> 試みに統計的検定を行ってみると、この関連性は有意である ( $\chi^2=14.4, df=4, p<0.01$ )。

表3 所属学科と「Q30でどれも知らないと答えた人」のクロス表

Q38	Q30_6						総計
	どれかは知っている		どれも知らない		無回答		
	度数	比率	度数	比率	度数	比率	
初等教育	154	81.5	33	17.5	2	1.1	189
国文	140	94.0	8	5.4	1	0.7	149
英文	92	82.1	19	17.0	1	0.9	112
比較文化	79	82.3	17	17.7	0	0.0	96
社会	100	87.7	12	10.5	2	1.8	114
無回答	2	22.2	1	11.1	6	66.7	9
総計	567	84.8	90	13.5	12	1.8	669

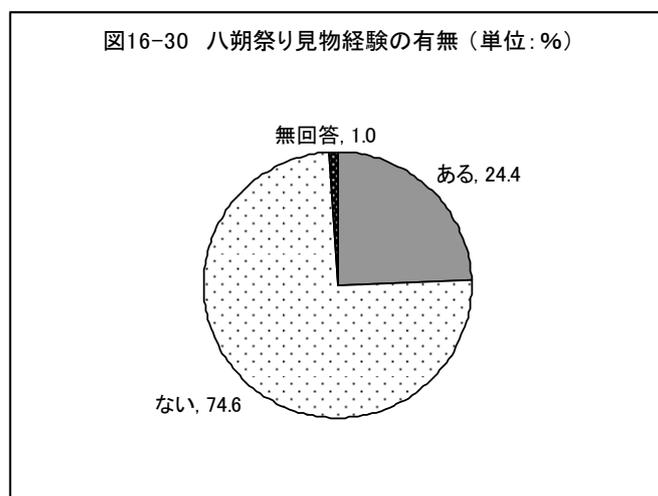
Q30の選択肢のうち、「どれも知らない」に対する回答だけを取り出し、それをQ35（対象者の出身地）のデータによって山梨県出身者とそれ以外の地域の出身者とに分けて比べてみると、次の表②のように示される。

表② 出身県別と「都留の歴史に対する認知」のクロス表							
Q30_6	Q35						総計
	どれかは知っている		どれも知らない		無回答		
	度数	比率	度数	比率	度数	比率	
山梨県出身	92	89.3	10	9.7	1	1.0	103
県外出身	475	83.9	80	14.1	11	1.9	566
総計	567		90		12		669

やはり、「どれも知らない」の回答は、山梨県出身者のほうが、それ以外の地域の出身者よりも少ない。しかし、その差はわずかなものにとどまる。（大柴有希）

### 祭りや伝統行事：地域行事への関心度

Q31では、「都留には八朔祭りというお祭りがありますが、見物に行ったことがありますか」の質問文により、八朔祭りの見物経験を尋ねている。図16-30は、その集計結果をグラフ化したものである。



これによると、祭り見物に出かけた経験をもつ人は約4分の1(24.4%)にとどまる。八朔祭りは都留の年間行事としては最大規模のイベントで、山梨県内あるいは全国的にも有数の伝統行事である。祭り期間中は、屋台巡行や大名行列、「ふるさとまつり」のイベント、通りを埋め尽くす見物客の波と露天屋台など、街中がにぎわう。文大生であれば、おそらく、名前だけなら誰でも聞いたことはあるだろう。しかし、実際に見に行くこととなると、7割以上(75.4%)の学生が、その経験がないと回答している。一般的に、伝統行事というものは若者ウケしない場合が多いが、この八朔祭りに関して例外ではないようだ。祭りが開催される9月1日というのは、文大生にとっては夏休み期間の真っ只中であり、市外からの自宅通学者はもちろんのこと、学生の9割近くを占める下宿生のほとんどがそれぞれの地元へ帰省している時期なのである。また、帰省せずに都留に残っていても、部活・サークルの活動やアルバイトなどのために予定が埋まってしまう人もいるであろう。祭りの開催時期と大学の夏休み時期が重なることが、祭りに訪れる学生数が少ない要因のひとつになっていると考えられる。(齋藤淳悟・佐藤景輔・黒島美佳・児嶋隆志・古宮宏美・河西麻利子・佐野 匠・北村尚洋)

もうひとつ考えられることがある。それは大名行列(八朔祭り)にしてもお茶壺道中にしても、これまで、文大生がそれらの伝統行事に関わることでできる機会がほとんどなかった、ということだ。夏休み前に大学構内で大名行列の参加者募集のポスターが張られていて、今年も何人かの学生がそれに参加した。しかし、たとえば、大名行列の注目の的である「お姫様」は、昨年まで地元の人しかかなれない役であった。今年(2004年)はその役が、オーディションによって初めて文大生から選ばれた。そのことに象徴されるように、以前に比べてだいぶ学生の参加が進んでいるのではないかと思われる。しかし、少なくとも現状では、祭りを見に行ったことがある人のほとんどが、おそらく露店目当てか、もしくは「知り合いが大名行列に出演するから(応援に)」などの理由によるものであって、祭りそのもの、あるいは地域行事に対する興味や関心から自発的に行ったことがある、という人はごく少数なのだろう。(源田明子・小林由佳・井口拓也)

Q31(八朔祭りの見物経験)の集計結果を他の変数とのあいだでクロス分析してみよう。まず、所属学科によって違いがあるだろうか。社会学科ではこの「社会調査・地域調査」の科目を含め、地域社会について学ぶ授業やフィールドワークなども多い。社会学科の学生は他の学科に比べて見物経験が多いのではないだろうか。

Q38	Q31						
	1.ある		2.ない		無回答		総計
	度数	比率	度数	比率	度数	比率	
1.初等教育学科	46	24.3	143	75.7	0	0.0	189
2.国文学科	34	22.8	115	77.2	0	0.0	149
3.英文学科	31	27.7	81	72.3	0	0.0	112
4.比較文化学科	26	27.1	70	72.9	0	0.0	96
5.社会学科	26	22.8	87	76.3	1	0.9	114
無回答		0.0	3	33.3	6	66.7	9
総計	163	24.4	499	74.6	7	1.0	669

表 16-34 の分析結果をみると、仮説に反して、学科間ではほとんど違いがみられない<sup>74</sup>。

(児嶋隆志・黒島美佳・井口拓也)

表 3 学年の別と八朔祭へ見学へ行ったことがあるかの有無のクロス表

Q37	Q31						総計
	1. ある		2. ない		無回答		
	度数	比率	度数	比率	度数	比率	
1. 1年生	37	18.1	166	81.4	1	0.5	204
2. 2年生	52	24.2	163	75.8	0	0.0	215
3. 3年生	49	27.7	128	72.3	0	0.0	177
4. 4年生	18	32.1	38	67.9	0	0.0	56
5. 5年生以上	7	87.5	1	12.5	0	0.0	8
無回答	0	0.0	3	33.3	6	66.7	9
総計	163	24.4	499	74.6	7	1.0	669

学年別にみても（上の表 3）、ここには明確な違いが表れている。学年が上がるにつれ、見物に行ったことのある学生の比率が高くなっている<sup>75</sup>。大学に在学している期間が長ければ、それだけ祭りの開催を迎える回数も増えるわけで、この集計結果は自然に理解されるものである。（黒島美佳）

都留のまちに対する選好度（Q33-1）は祭りの見物経験に何か影響を与えているだろうか。まちを気に入っている人のあいだでは、おそらく、祭りを見に行ったことのある人が多いであろう。表 16-35 は、Q33-1（都留のまちに対する選好度）と Q31（八朔祭りの見物経験）のクロス表である。Q33-1 のデータについては「都留の街が気に入っている」に対して「そう思う」「そう思わない」の 2 つのカテゴリに集約したうえで分析した。

表 16-35 都留イメージ「都留の街が気に入っている」(2分割) と 八朔祭り見物経験の有無 のクロス表

			八朔祭り見物経験の有無		合計
			ある	ない	
都留イメージ「都留の街が気に入っている」(2分割)	そう思う	度数 都留イメージ「都留の街が気に入っている」(2分割)の%	111 30.2%	256 69.8%	367 100.0%
	そう思わない	度数 都留イメージ「都留の街が気に入っている」(2分割)の%	52 17.6%	243 82.4%	295 100.0%
合計		度数 都留イメージ「都留の街が気に入っている」(2分割)の%	163 24.6%	499 75.4%	662 100.0%

分析結果をみると予想どおりで、都留のまちを気に入っている人では、見物に行ったことが「ある」の比率（30.2%）が高く、そうでない人では、その比率（17.6%）は低い<sup>76</sup>。ただし、「都留のまちを気に入っていて、八朔祭りにも行ったことがある人」の場合でも、その比率は 30.2%にとどまる。

(鶴沼 陵)

<sup>74</sup> この関連性に統計的な有意差はみられない。

<sup>75</sup> この関連性は統計的に有意である ( $\chi^2=24.1, df=4, p<0.01$ )。

<sup>76</sup> この関連性は統計的に有意である ( $\chi^2=14.0, df=1, p<0.01$ )。

独立変数と従属変数を入れ替えてまとめ直してみると（次の表1）、八朔祭りに行ったことがある人では、「都留の街が気に入っている」に対して「そう思う」（68.1%）の比率が高く、「そう思わない」（31.9%）の2倍以上の値である。いっぽう、見物経験のないグループでは、「都留の街が気に入っている」に対して「そう思う」51.3%、「そう思わない」48.7%と、まちの選好度に関する2つの立場が拮抗し、また、対象者全体での結果からも大きく乖離はしていない。この結果から八朔祭りを見に行った経験をもつ人は、少なからず都留のまちを気に入る傾向があると考えられる。（井口健太郎）

Q44_1-1					
Q31	「気に入っている」		「気に入らない」		総計
	度数	比率	度数	比率	
ある	111	68.1	52	31.9	163
ない	256	51.3	243	48.7	499
総計	367	55.4	295	44.5	663

地域住民との交流経験（Q32「サークル活動または大学主催の行事を通じて地域住民との交流を経験したことがありますか」）とQ31（八朔祭りの見物経験）とをクロス分析してみよう。

Q32地域住民との交流の経験	Q31八朔祭りに行ったことがあるかどうか						
	行ったことがある		行ったことがない		無回答		総計
	度数	比率	度数	比率	度数	比率	
経験がある	86	37.7	142	62.3			228
経験がない	76	17.6	357	82.4			433
無回答	1	12.5			7	87.5	8
総計	163		499		7		669

集計結果をみると（上の表）、やはり、地域住民との交流経験があるのとないのとでは、八朔祭りの見物経験は大きく異なるようである<sup>77</sup>。対象者全体でみると、そもそも地域住民との交流を経験したことのある学生は決して多くはないが（34.5%）、そんななかでも、地域住民との交流経験がある学生は、その経験がない学生よりも、八朔祭りを見に行ったことのある人の比率が高い（「交流経験なし」の17.6%に対して、「交流経験あり」では37.7%）。また、地域住民との交流の経験がない学生の8割以上（82.4%）が、「八朔祭りに行ったことがない」と回答している。（齋藤淳悟・佐野 匠）

八朔祭りの見物経験の有無は、自宅通学生と下宿生とのあいだで異なるだろうか。自宅通学生の場合、祭りの開催が夏休み期間中であるとはいえ、普段の通学時間・経路と変わらないのであるから、遠方の郷里に帰省中である下宿生よりも、祭り見物に出かける可能性が高いのではないだろうか。次頁の表1は、Q1（自宅通学・下宿の別）とQ31（八朔祭りの見物経験）のクロス表である。この分析結果をみると、仮説に反して、むしろ下宿生のほうが八朔祭りに行ったことのある人の割合が高いように見受けられる。下宿生には、たしかに実家に帰省中である人が圧倒的に多いと思われるが、部活やサークル活動、アルバイト、就職活動などさまざまな理由で都留に残っている人も多いのだろう。そういう下宿生たちが、「（八朔祭りとは） どういうものか観てみよう」「街のにぎわいに誘われて」な

<sup>77</sup> これら2つの変数間の関連性は統計的に有意である（ $\chi^2=32.8, df=1, p<0.01$ ）。

どの好奇心に駆られて、祭り見物に出かけているのだろうか。

Q31							
Q1	ある		ない		無回答		総計
	度数	比率	度数	比率	度数	比率	
自宅通学	14	19.2	59	80.8		0.0	73
下宿	149	25.0	439	73.8	7	1.2	595
無回答		0.0	1	100.0		0.0	1
総計	163	24.4	499	74.6	7	1.0	669

しかしこれだけでは詳しいことはわからないし、確かな根拠がほしいので統計的検定をやってみよう。

帰無仮説 H0：自宅・通学の別と八朔祭りに行くことは独立である

対立仮説 H1：自宅・通学の別と八朔祭りに行くことは関連がある

	B 1	B2	合計	
A 1	14	59	73	
A 2	149	439	588	
	163	498	662	
T11	T21			
0.878766	0.123035		検定統計量	1.330716
T12	T22			
0.303811	0.025104		棄却限界	3.841455

検定統計量  $T=1.330716$  は、棄却域  $3.841455$  には入らない。したがって仮説 H0 は棄てられないので、自宅通学・下宿の別と祭りの見物経験の有無とは関連があるとはいえない。つまり、八朔祭りを見に行ったことがある人の割合は、自宅通学であるか下宿であるかにかかわらず違いはないことが証明された。（北村尚洋・児嶋隆志・石若 文乃）

山梨県出身者にとっては、県下に名をとどろかせるほど有名な祭りであるので、他県の出身者よりも見物経験の割合が高いのではないだろうか。Q35（出身地）のデータを「山梨県」とそれ以外の2カテゴリに集約して、Q31（八朔祭りの見物経験）とクロスさせてみよう。

Q31					
Q35	1. 行ったことがある		2. 行ったことがない		総計
	度数	比率	度数	比率	
1. 山梨県	21	20.4	82	79.6	103
2. 山梨県外	142	25.5	415	74.5	557
総計	163		497		660

検定統計量  $T=1.2183$  は棄却域に入らない。したがって、出身地（山梨県／それ以外）と八朔祭りの見物経験には関連性がなく、仮説は立証されなかった。（小長谷 泰右・佐野 匠）

## 参考文献・資料

栗田宣義編、1999、『データブック／社会学：調査でわかる日本社会』川島書店

国立社会保障・人口問題研究所「少子化情報ホームページ」(<http://www.ipss.go.jp/syoushika/syindex.asp>,  
2005年3月8日)

総合研究開発機構編、1983、『地方都市青年層のライフスタイルと文化行動』総合研究開発機構

東京大学社会科学研究所「SSJ データアーカイブ」ホームページ (<http://ssjda.iss.u-tokyo.ac.jp/>, 2005年  
3月26日)

### 16.3.6 個人レポート

## 「期限付きの市民」としての文大生

今永 達也

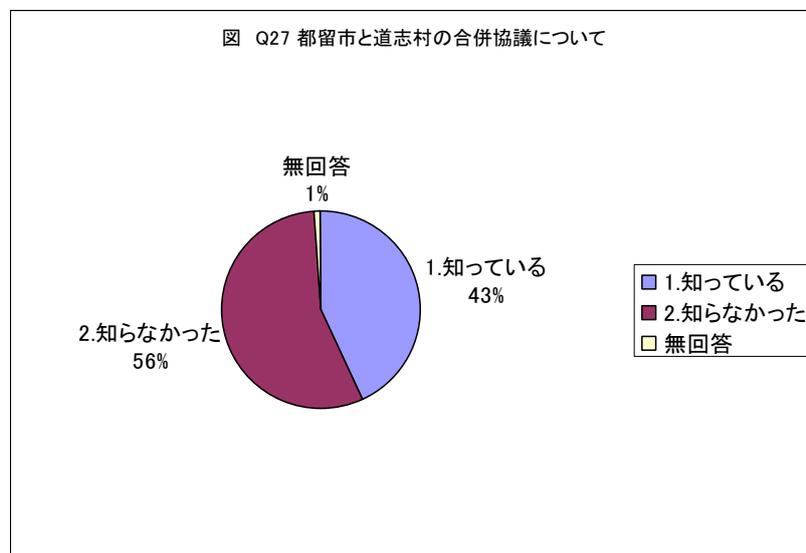
はじめに

私の前期の調査班は地域概況班であり、この「文大生の学生生活と意識に関する調査」というアンケート調査においては Q27 の都留市と道志村の合併に関する設問が最もあてはまるとされる。よって私はこの設問とそれに関連する設問の分析を行いたい。

仮説

私はこの設問を通して、文大生の都留市に対する関心を読み取りたい。私の身近な人達は都留が生活を送る上で不便だと入学当初は言っていたが、時間が経つにつれ、そのような不満はあまり聞かれなくなった。この現象には、もちろん慣れや諦めなども含まれているとは思いますが、原因の最たるものは、大学生活の4年間を送る上では特に問題はないという感覚をこの土地から得ることができたからではないだろうか考える。つまり簡単な言葉で言い直すなら、「都留市に不満はあるが4年間の腰掛けなら別に構わない」とでも言うのだろうか。以下、いくつかの設問の分析を通してこの仮説を証明してみようと思う。

分析



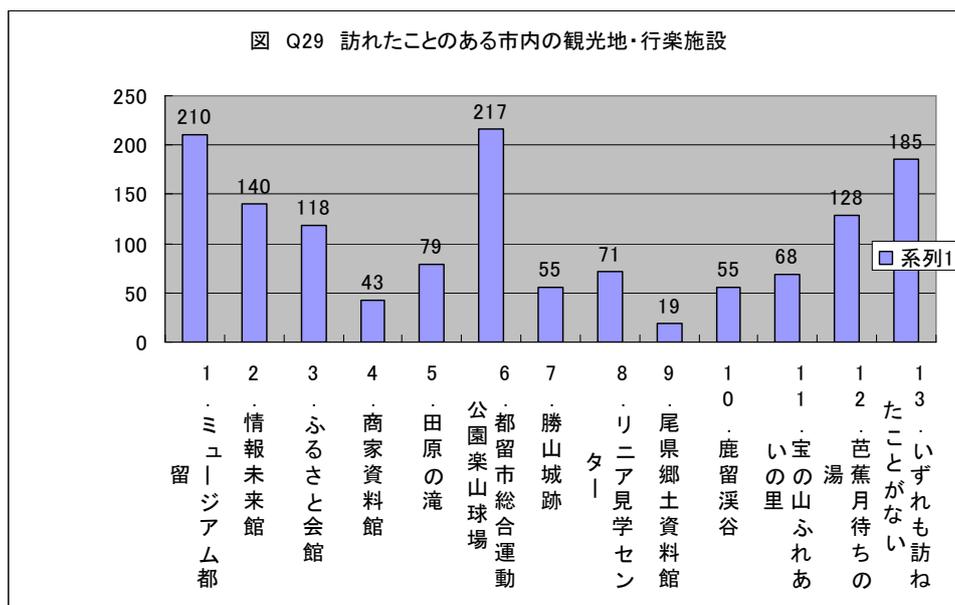
Q27「現在、都留市と道志村が合併に向けて協議を進めていることを知っていますか」という設問の結果である。市町村合併は市民の生活に大きな影響を及ぼすものであり、新聞やテレビなどのメディアによる「協議が開始されてから市民アンケート調査の実施までに半年以上経っている」との報道を考えると、この認識率は低いと言える。

社会科学の学生は、地方自治系の授業で市町村合併については勉強するので、それを考慮に入れたクロス集計を行うと以下のようなになる。

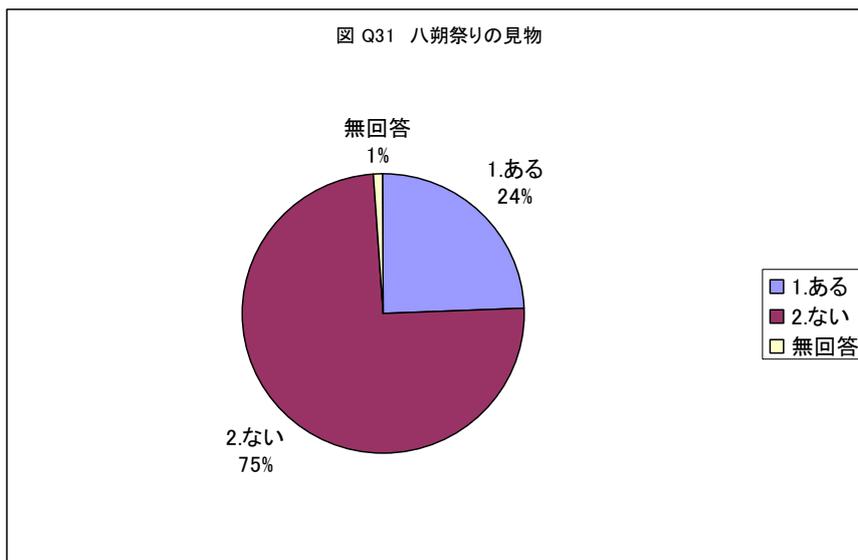
表 1 所属学科と都留市と道志村の合併協議を知っているかのクロス表

Q38	Q27						総計
	1.知っている		2.知らなかった		無回答		
	度数	比率	度数	比率	度数	比率	
1.初等教育学科	74	39.2	115	60.8	0	0.0	189
2.国文学科	53	35.6	96	64.4	0	0.0	149
3.英文学科	41	36.6	70	62.5	1	0.9	112
4.比較文化学科	37	38.5	59	61.5	0	0.0	96
5.社会学科	82	71.9	32	28.1	0	0.0	114
無回答	1	11.1	2	22.2	6	66.7	9
総計	288	43.0	374	55.9	7	1.0	669

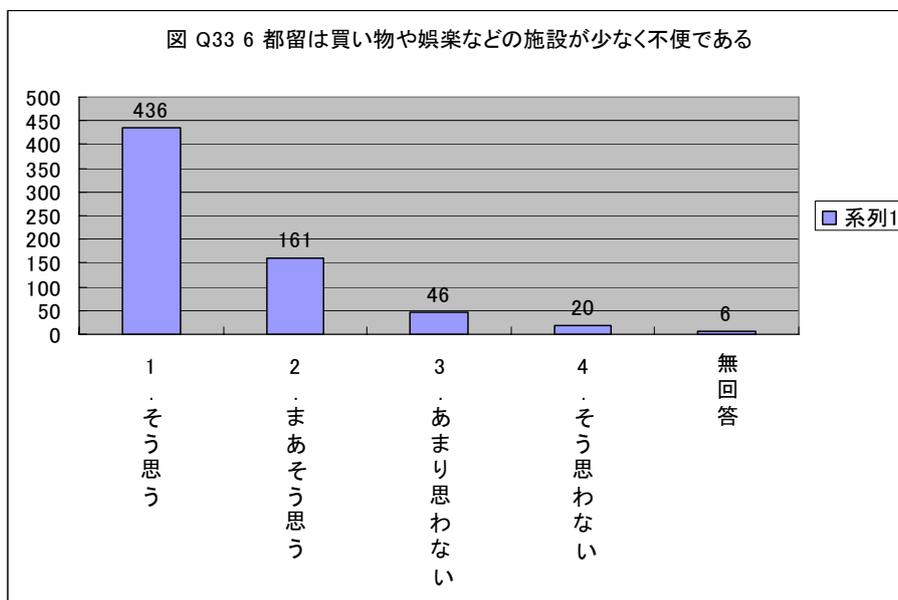
社会学科の「知っている」の比率 71.9%が、他学科の 40%弱に比べて圧倒的に高い。よって社会学科の結果を除いて考えると、「知っている」比率はもう少し低いものと考えられる。いずれにしても文大生が都留市の行政にあまり興味がないことは言えそうである。

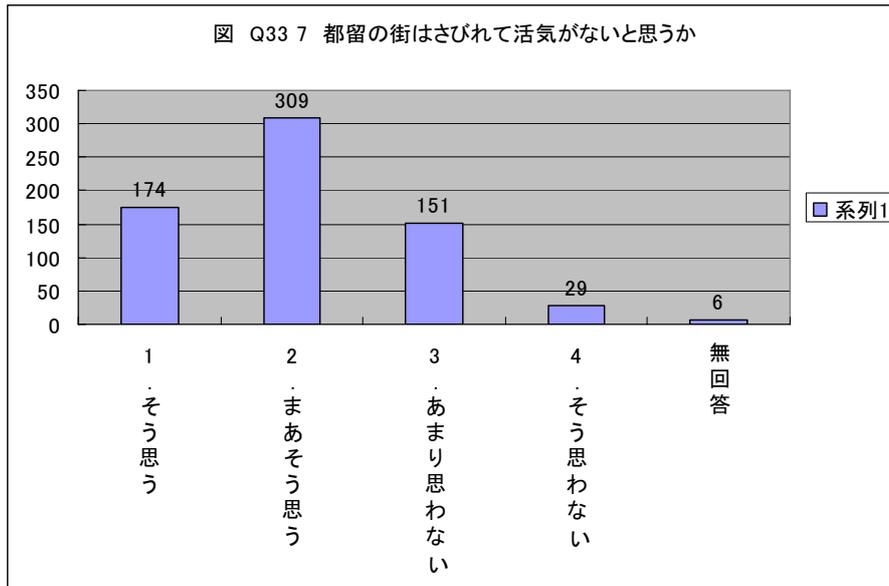


Q29についても文大生の都留市民としての意識の低さがうかがえる。例えば、Q29のなかから数の多いものを順に挙げていくと、都留市総合運動公園 楽山球場、ミュージアム都留、情報未来館、芭蕉月待ちの湯、ふるさと会館となる。楽山球場は体育の授業で訪れたり、部活・サークルで訪れたりしただけだろうし、情報未来館、ふるさと会館も、例えば社会調査などの授業で訪れたただけだろう。月待ちの湯は、都留市に対する関心というより、ただ温泉に浸かりに訪れたただけだと判断できる。商家資料館、尾県郷土資料館、勝山城跡、鹿留溪谷など、市民であれば訪れているような施設を訪れていないことから、文大生は「都留市民」ではなく、4年間という長期にわたる「お客様」だということができる。

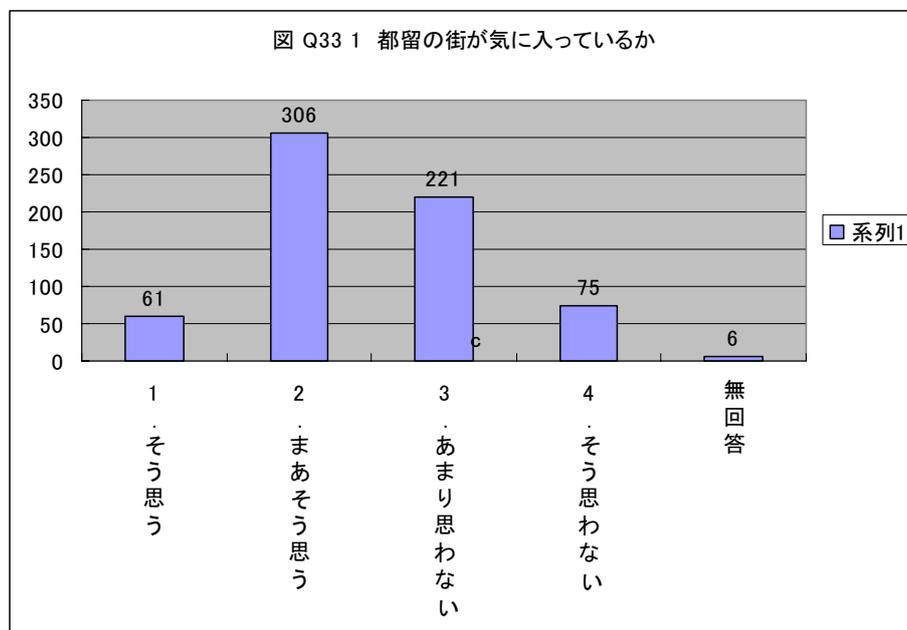


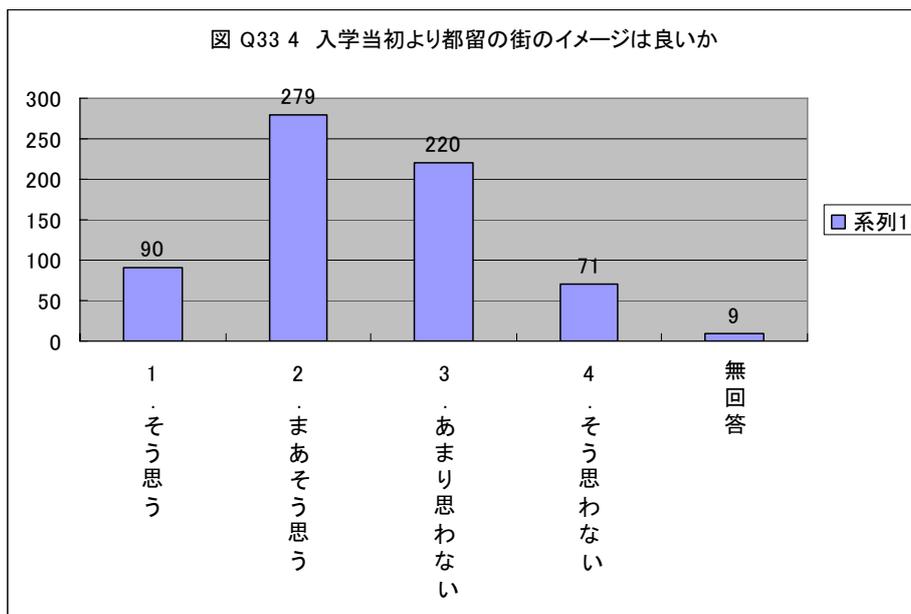
Q31 からも文大生のお客様ぶりが読み取れる。Q31 の八朔祭りといえば都留市の年間最大のイベントである。このお祭りは9月のはじめにあるので、ちょうど夏休みで帰省している学生が多いことは確かであるが、都留市民のほとんどが参加するお祭りなのだから、都留に関心があれば一度くらいは見に行ってもよさそうなものである。



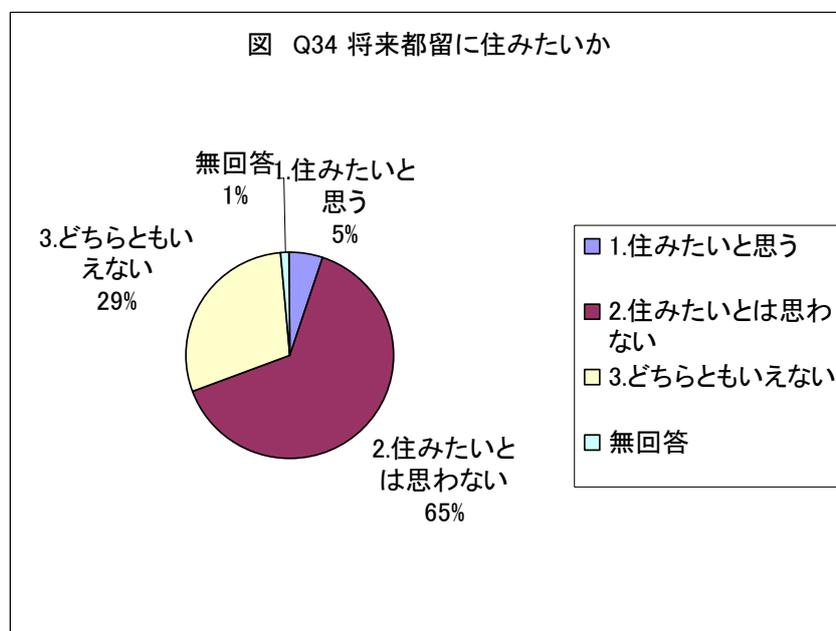


Q33-6, Q33-7の結果である。都留に対して学生が市民としての興味を持ってないのは、この設問が何よりも雄弁に語っているように見える。街に活気というか若さがないのである。ブランドものの服や最先端の電化製品など若者が好むものがほとんどないのである。その代わりにあるのは自然や城下町の雰囲気を残す町並みなど、気持ちが安らぐような、普通、歳をとってから恋しくなるものばかりである。





Q33-1, Q33-4 の結果である。上に述べたような、気持ちが安らぐようなものが揃っているからこそ、このような結果が出るのではないかと思う。基本的に都留に対するイメージはよく、まあまあ気に入っている人が多いのである。しかし先述したように、あくまで4年間の期限付きで気に入っているに過ぎないことを強調しておきたい。それを証明するのが以下の Q34 の結果である。



このように、実に 65%の人が住みたくないと言い、住みたいという明確な希望がある人はたったの 5%である。

## 結論

私は仮説において「文大生は都留に多少の不満はあるが、4年間という限られた時間を過ごす上でなら特に問題を感じていないのではないか」と書いた。私のこの仮説は証明されたのではないかと考える。何故かという、それはQ27で、合併という市民としての重大事を半数以上の学生が知らない点、Q29で、授業以外では市内の観光地や行楽地にほとんど訪れたことのない点、Q31で、八朔祭りという都留市最大のイベントを75%の学生が見物に行ったことがない点などから、まず文大生に「都留市民」としての意識の欠如が読み取れるからである。そしてQ33-6, Q33-7とQ33-1, Q33-4では、都留という街が若者向けの活気を持っていないことを不満に感じながらも、基本的には都留という街を気に入っているということ、しかしこれは4年間という期限付きのものであるということ、Q34の「将来都留に住みたいか」という設問に対する答えが証明しているからである。以上のことから冒頭の仮説は正しいと考える。

## 文大生と都留のまち

大久保 江莉

課題1：前期各班調査に関連する設問についての分析・考察

課題2：都留文科大学生と地域住民との関係について

はじめに

都留文科大学に入学し、私は、①学生がまちづくりに積極的である、②水資源を利用したまちづくりを目指す団体がある、③地域住民と積極的に交流を図るためにさまざまな活動をしている団体がある、など、学生と「まちづくり」が非常に密接な関係を持っているということを感じた。しかし、これは私が社会学科に所属し、「まちづくり」に興味があるために感じているだけのことも知れない。そのため、今回の「文大生の学生生活と意識に関する調査」を通じて、社会学科の学生だけでなく、文大生全体がどれだけ都留という土地に興味を持ち、都留のまちを知っているかについて私は興味を持った。前期のインタビュー調査では、地域の方から水資源の利用法や都留のまち並みの変化などとともに、文大生の印象を聞くことが出来た。本稿では、文大生全体が都留の土地柄や人びとにどのような印象を持っているか、都留のまちのことをどれほど知っているかについて分析し、それを通じて都留のまちの今後の展望を考察していきたい。なお、前期の調査班で案出し、今回の調査票で採用された設問は、私たち調査班の前期調査項目とは全く異なった内容を取り上げているため（「Q3：自炊の頻度」がそうである）、「まち並み・水」に関わる他班からの設問を中心にピックアップして分析・考察している。また、私の興味のある分野は「学生と地域住民との関係」であるため、課題1と課題2がほぼ同じ内容になってしまう可能性が高いために、同時に分析・考察している。

\*今回の調査の結果、文大生のほとんどは下宿であるため（「下宿：通学＝4：1」の割合であった）おもに下宿生の生活に着目して分析・考察している点を考慮していただきたい。

### 1 文大生はどれだけ都留のまちにくり出しているのか

都留のまちの特徴として、「公共交通機関が発達していない」という点があげられる。そのため、都留市民（文大生は除く）のおもな移動手段は車である。図1は文大生の日常の移動手段の度数分布表とケースのパーセントを円グラフにまとめたものである。文大生の日常の移動手段のほとんどは徒歩か自転車であるということがグラフから見て取れる。

しかしながら、都留は山間地であり、土地の起伏が激しい。そのため、都留のまちのいたる所を散策して歩くのに、自転車や徒歩では非常に困難であるといえるだろう。私は友人から「周りは山ばかりの都留に来て、出歩くところがなく、閉鎖的な気分になる」とほのめかされたことがある。私の体験談を語らせていただくと、私の主な移動手段は自転車である。春と夏には都留市内の商店街をひとりで散策し、「都留の美味しいお店探し」をした。また、「ツール・ド・都留」と称し、ひとりでサイクリングに出かけた。しかしながら、「宝の山ふれあいセンター」や「鹿留溪谷」「芭蕉月待ちの湯」などは自転車でアクセスできる場所ではなかった。私の経験談から推測すると、十日市場から谷村町

駅付近の三町商店街までが文大生の行動範囲の限界であると考え。図2の「都留市内の観光地・行楽施設のうち訪れたことのあるもの」の集計結果では、「都留市総合運動公園楽山球場」が一番の割合を占めているが、これはおそらく部活動やサークル活動のために訪れたことのある場所であろう。「商家資料館」は商店街の方に、「田原の滝」は十日市場寄りにある。しかし、訪れたことのある人の割合が非常に少ない。おそらく、このような施設の存在を知らない学生がほとんどなのではなかろうか。文大生に都留のまちをいかに知ってもらうかが、今後の地域住民と文大生のよりよい関係を作り上げていくためにも必要な条件になってくるのではなかろうか。そのために地域密着型のサークルが我が大学には多数存在しているのではないかと想像される。

図 1

**Q6 日常の移動手段（下宿の人のみ）**

	度数	パーセント	ケースのパーセント
徒歩のみ	204	30.5%	34.5%
自転車	199	29.7%	33.7%
バス・電車	59	8.8%	10.0%
原付・バイク	66	9.9%	11.2%
自動車	63	9.4%	10.7%
無回答	6	0.9%	
非該当	72	10.8%	
合計	669	100.0%	

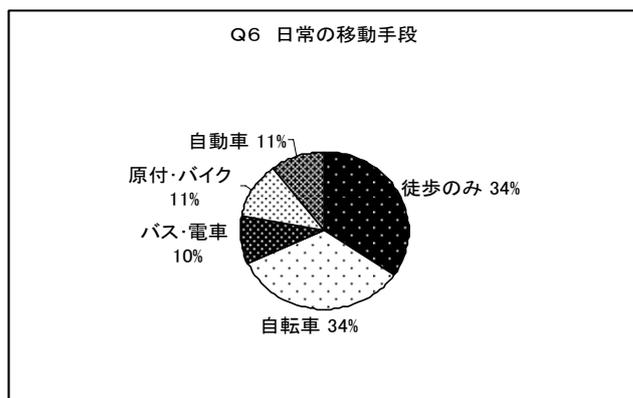


図 2

**Q29 都留市内の観光地・行楽施設のうち訪れたことがあるもの（すべて選択）**

	度数	パーセント	ケースのパーセント
ミュージアム都留	209	15.1	32.1
情報未来館	141	10.2	21.6
ふるさと会館	118	8.5	18.1
商家資料館	43	3.1	6.6
田原の滝	79	5.7	12.1
都留市総合運動公園楽山球場	217	15.6	33.3
勝山城跡	55	4.0	8.4
リニア見学センター	71	5.1	10.9
尾県郷土資料館	19	1.4	2.9
鹿留溪谷	55	4.0	8.4
宝の山ふれあいの里	68	4.9	10.4
芭蕉月待ちの湯	128	9.2	19.6
いずれも訪れたことがない	185	13.3	28.4
合計	1388	100	

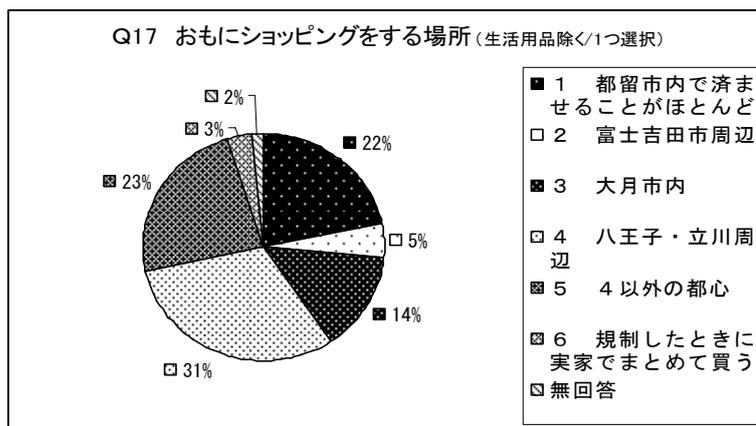
## 2 「都留文科大学前駅」開業による、文大生と地域住民との関係

Q17の集計結果(図3)を見てもわかるとおり、そもそも文大生は都留を通り越して東京に行くことが多い。都留には服飾店やカフェなど若者を対象とした店が少ない。商店街を歩いてみても、ミセスを対象とした店は数多く立ち並んでいても、ヤングを対象とした店はほとんど無い。また、商店街は文大から歩いていくには少し遠い距離にある。文大の周りをみても、飲食店は他の学生街に負けないうほど数多く立ち並んでいるが、服飾店や大型書店、おしゃれなカフェなどは見当たらない。学生が自分たちでおしゃれなカフェを作ってしまう気持ちがわかる。

図 3

Q17 あなたがショッピングを(食料品・日用品除く)をする場所は主にどこですか。(1つ選択)

	度数	パーセント	ケースのパーセント
1 都留市内で済ませることがほとんど	129	19.3	22.0
2 富士吉田市周辺	28	4.2	4.8
3 大月市内	84	12.6	14.3
4 八王子・立川周辺	186	27.8	31.7
5 4以外の都心	139	20.8	23.7
6 規制したときに実家でまとめて買う	20	3.0	3.4
無回答	10	1.5	
非該当	73	10.9	
合計	669	100.0	



そして、昨年(2004年)11月、「都留文科大学前駅」(以下、「文大前駅」と省略)が開業した。これにより、駅付近の開発が進み、文大前駅の周りにはカフェやレストラン、おしゃれな美容院が建設された。音楽・映像ソフトの大型レンタル店ができるといううわさも文大生の間で広まっている。しかし、新駅周辺の開発により、学生が商店街からさらに遠ざかってしまうという懸念もある。図4(次頁)は「文大前駅開業による学生の生活の変化への影響(駅を利用する頻度が変わるか)」を集計したものであるが、ほとんどの学生が「今までと変わらない」と回答している。しかし、本当にそうだろうか。文大前駅が開業してからも、私は交通費のことを考え、谷村町駅をいまだに利用している。しかし、明らかに以前に比べ、谷村町駅を利用する学生の割合が減少している。谷村町駅を利用する学生が減少することは、商店街に立ち寄る学生も減少するということを意味するのではなかろうか。新駅が大学やアパートから近くに出来ることで、東京で買い物をする学生が増え、文大前駅付近のカフェやレストランを主な行動範囲としていけば、大学周辺は学生ばかり、商店街界限は地域住民ばかり

りと、完全に学生と地域住民の間に居住地区のはっきりとした境界線が出来てしまう。

図 4

Q8 都留文科大学前駅開業にともなう普段の生活への影響

	度数	パーセント	ケースのパーセント
1、増えそう	139	20.8%	23.4%
2、今までどおり	403	60.2%	67.8%
3、わからない	52	7.8%	8.8%
無回答	3	0.4%	0.5%
非該当	72	10.8%	12.1%
合計	669	100.0%	

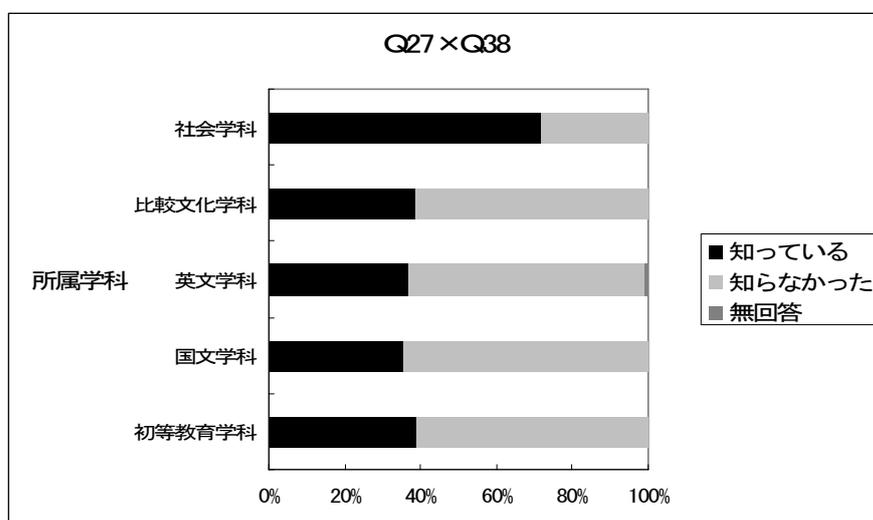
### 3 文大生は都留についてどれだけ知っているのか

都留市内における文大生の行動範囲は狭いのであったが、では、文大生は都留の行政や名物についての知識はあるのだろうか。まずは、行政について尋ねてみた。図5はQ27とQ38をクロス集計したものである。社会学科の学生でも都留市と道志村の合併協議について知っている人は少なかった。

図 5

Q27とQ38のクロス集計表

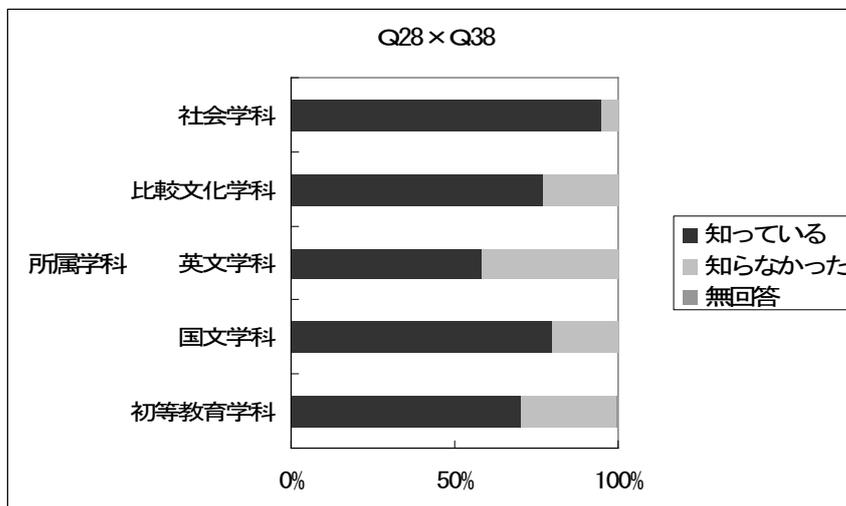
	Q27 都留市と道志村が合併協議を進めていることを知っていますか						総計
	知っている		知らなかった		無回答		
Q38 所属学科	度数	比率	度数	比率	度数	比率	
初等教育学科	74	39.2	115	60.8	0	0	189
国文学科	53	35.6	96	64.4	0	0	149
英文学科	41	36.6	70	62.5	1	0.9	112
比較文化学科	37	38.5	59	61.5	0	0	96
社会学科	82	71.9	32	28.1	0	0	114
無回答	1	11.1	2	22.2	0	0	9
総計	288	43.0	374	55.9	7	1.0	669



都留の商店街のキャラクターにもなっているムササビについてはどうであろうか（図6 Q28×Q38）。社会学科の学生はほとんどの人が知っていた。これは、大学案内のパンフレットでムササビの研究をする教授について紹介されていたために、多くの学生が知っているのだと私は推察する。そのため、他の学科でもムササビについて知っている人が多かった。

図 6

Q38 所属学科	Q28 都留の自然環境を象徴するものとして、ムササビの生息が有名ですが、あなたはそれを知っていますか						総計
	知っている		知らなかった		無回答		
	度数	比率	度数	比率	度数	比率	
初等教育学科	133	70.4	55	29.1	1	0.5	189
国文学科	119	79.9	30	20.1	0	0	149
英文学科	65	58.0	47	42.0	0	0	112
比較文化学科	74	77.1	22	22.9	0	0	96
社会学科	108	94.7	6	5.3	0	0	114
無回答	1	11.1	2	22.2	6	66.7	9
総計	500	74.7	162	24.2	7	1.0	669



また、都留の歴史に関しては（次頁 図7 Q30）、「松尾芭蕉」がもっとも多い割合で表れているが、これは設問設計に問題があると考えられる。松尾芭蕉に関しては、誰もが高校までに必ず勉強したことのある内容である。そのため、都留と松尾芭蕉が関係あるということを知らなくても、「耳にしたことのあるもの」として回答者は答えてしまうのではなかろうか。その可能性に配慮するならば、むしろ、「都留と松尾芭蕉には歴史的関係があることを知っていますか」という設問にするべきであった。松尾芭蕉に関する回答を除いて、この集計結果を見てみることにしよう。学生の耳にしたことのある事柄として、次に「お茶壺道中」があげられている。これは「お茶壺道中実行委員会」という団体が存在し、学生が地域住民とともに積極的に活動しているからであると考えられる。この集計結果で私が驚いたのは、「谷村城跡」「勝山城跡」が思いのほか知られているという点であった。

図 7

Q30 都留の歴史に関する事からのうち、耳にしたことのあるもの（すべて選択）

	度数	パーセント	ケースのパーセント
秋元氏	104	6.9	15.8
お茶壺道中	360	24.0	54.8
谷村城跡	237	15.8	36.1
松尾芭蕉	446	29.8	67.9
勝山城跡	262	17.5	39.9
どれも知らない	90	6.0	13.7
合計	1499	100	

終わりに

私は、後期の調査票調査の結果から多くのものを得た。まずは、文大生はあまり都留に興味がない、という結果。都留は公共交通機関が発達していないために、学生の行動範囲は狭い。あまり出歩かないか、または、東京に遊びに行く。中間がない。そのため、都留のまちに繰り出し、地域住民と親密な交流を持っている学生は限られてしまう。アルバイトでもしない限り、地域の人びとと接する機会はないのではなかろうか。私はこの結果に非常に落胆している。せっかく自分の住んでいる地域なのだから、もっと積極的に都留について調べ、都留を楽しんでみるべきである。しかしながら、私自身も、最近、都留に飽きてきている人間であったりする。集計作業に当たってきたこの冬、雪が多く、あまり遠出できなかつたからである。友人が言っていた「山ばかりで、閉鎖的な気分になる」という気持ちがわかった。しかし、4年間も生活する地域であるのだから、楽しまないことにはやっていけない(!)と、今回の調査結果を見て思い直した。今回の調査は、マイナスに傾きかけていた私の都留に対するイメージを、プラスの方向へと回復させてくれた。

文大生のみなさん(私自身を含め)、楽しいことを見つけましょう。楽しいことが見つければ、都留の暮らしにも飽きることはないはずだから…。

